
IS インフィニット・ストラトス ISは狙撃専門ですが？

サドンアタック

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos ISは狙撃専門ですが？

【Zコード】

Z5339X

【作者名】

サドンアタック

【あらすじ】

本屋に突っ込んだトラックにより死んだ新城司はふぞけた女神によりIS世界に転生！

神様仕様によりチートのようなISを使いながら原作知識を頼りに学生生活をしていく

狙撃をモットーに新城司は原作を壊していく？

* 作者は文才がありません、時々見苦しい部分がありますがご了承

しぐだせこ

ただいまアンケート募集中詳細は活動報告まで

転生・・・(前書き)

二次創作始めてしまった・・・

転生・・・

「フフフ・・・貴様の姿なんて丸見えだ」

茂みの中から長い銃口を出し、狙い撃つ

無風な上、距離は40ほど

当然、外さなかつた弾は敵に当たり、渋々ヒット宣言をする

「さて、あと一人か」

そう呟いた瞬間・・・

ガサリ!

(後ろづ！？)

俺はうつ伏せから一気に仰向けになり、背後を見る

それに気づいたのか敵もこちらを見る

しかし、一步だけ自分が速かつたらしい

振り向きと同時に狙つた敵は引き金を引こうとした瞬間、弾があたつたのに気づいた

「ヒット！」

「だあああ、ちくしょー！」

俺は勝利宣言をし、愛銃の「96Aを掲げた

「なんで当たれんだよ！」

至近距離のボルトアクション痛えんだよ！」

「んなもん、知るか！
慣れれば当てるわ！」

「それはお前だけだー！」

フハハ、負け犬の遠吠えめ

サバゲーのバトルロワイアルルールで見事一位を勝ち取った俺は他の友人の元に行く

今日は土曜日で大学のサバゲー友達と一緒に大学付近の森でサバゲーを楽しんでいた

「んじゃ、全員一個ずつ奢りな」

他五人が悔しそうに財布を見つめる
俺は意氣揚々に何を買つてもらつか悩む

「あー、そういうや今日欲しい本の新刊出るんだ
それ頼むわ」

「テメエ、本だと！」

「しかも、新刊かよ！」「ゼッティー、高いだろー！」

「鬼畜か！」

「他のもんは！？」

など、見事に全員一致で不満が出る
けど、確かにラノベの新刊は高いしな・・・

「なら、五人でその本でいいぞ
ほら、さつさと本屋行こうぜ」

後ろで何やら嬉しそうに叫んでるが気にせず、俺は愛銃を解体し、
コンパクトにスポーツバックに着替えと共に入れ、原付へ向かう

「あっがとうございましたーー」

「よつしゃー、インフィニットストラタス、タダでゲットー。」

俺はついにかがげてしまう

「んじゃ、毎飯にマクドナルドでも行くか

その学友の声を出口に向かって凝視している

しかし、一人が出口の向こうを凝視している

そして少しずつ後退る

「おいおい、マジかよ？」

みんな逃げろ、トラックが突っ込んでくるぞー！」

慌てて逃げるみんな

だが、一番出口付近にいた俺は後ろを振り向くだけで視界がブラックアウトになった

おいおい、俺の人生これで終わりかよ

凄腕狙撃手を目指してたんだぜ？

死ぬの早すぎだろ・・・

インフィニットストラトスもまだ読んでねえんだぞー！？

・・・・・・・

そこで俺の意識は完全に途切れた

「はー、こんにちわ～
私は神様、女神様よ～」

「・・・はつ？」

意識が戻つたら田の前には白いワンピースを着た青髪ロングヘア
の女が笑顔でそう言い放つた

「・・・俺死んだん？」

「 もちろん 」

わかつっていたが、それを笑顔で言われた俺、新城司はがっくり頑垂
れる

「ゴメン、ゴメン

つい手違いで君が死んじゃつたんだよ
ホントは君がいた本屋の受付が死ぬ予定だつたんだけどなぜか君が
死んじやつたつだ
つて、ことで生き返りさせてあげるよ

「マジでー？」

その言葉に俺は飛び付く

読めなかつた本が読める！

俺は感激した

「あ～、けど君がいた世界じゃないからね
生き返るの
正確には転生わかるんだよ」

生き返るの

「ふやけんな」

期待させてなんだそれ！」

「うふ・・・・揺りしきゃ」

ブンブン

「まだあの本読んでないんだぞ！」

「うつ・・・・気持ち・・わる」

「この気持ち、責任取れえ！」

「吐く・・・吐く」

ブンブン肩を揺らされた女神の顔は真っ青になることも関わらず振る
のやめない

そして結果・・・

「もう・・無理・・」

「え、今、何時ですか？」

A vertical column of 20 black dots arranged in a grid pattern. The dots are evenly spaced both horizontally and vertically, creating a rectangular shape.

「とつあえず、すまん」

「か弱き乙女になんて恥じを・・・」

ツツ「ミたいところだが、先ほどの暴走でグロテスク表現をさせてしまった司はとりあえず謝る

「まあ、あれでねあこ」

で、話に戻すけど

転生させる世界はどんな世界でもいいよ
君が望んだ世界でもいいよ

「アハ、であるか？」

司は驚きを隠せないほど驚いた

好きな本の世界だ
興味深々だった

「私は女神様よ
君のミスを補わないといけないんだ
この世界にいかせてあげるわ
どうだい？」

「頼む、女神！」

そう答えた瞬間、女神を魔法のように指をパチンと鳴らす

すると周りの世界が一気に変わり、学校の教室じき部屋になる

「ちよいと失礼」

女神がそう言って消える、するとそこにはインフィニットストラトスの生織斑千冬がいた

「ふむ、こいつは世界か」

女神が入ったのだろう
千冬がフムフムと頷く

「じゃあ、この世界で生きるには工かつてのを使わないといけない
みたいだね
なら・・・ほいっ！」

と、女神が空間から何かを取りだし、司に投げる

受け取つたそれは、黒い銃の形をしたネックレスだった

「君が元々いた世界で使つてた銃をIS化したんだよ
なんか希望する機能を3つまでならなんでもつくれるよ

チート機能も問題なしさー。」

「マジっすかー!？」

「マジと書いて本氣や」

俺はう~んと悩む

(「96AをIS化出しな・・・
やつぱりオンラインゲームの時の銃みたいに・・・)

「一つ目ー。

無反動だけど威力が落ちないよう!」
他は・・・

(確かに、一夏や算つてエネルギー兵器持つてるよな

)

「一つ目ー。

弾は実弾やエネルギー弾など弾は自分が想像した弾を!」

(最後はな・・・多分こんだけだと防御面が不足だし・・・あ、瞬

時加速あるじゃん！

あれが結構使えれば……（）

「武器は狙撃銃だけでいいからその代わりに瞬時加速の回数は無限大に！」

「狙撃銃だけって……いいのかい？
そんなことしなくても設定できるよ？」

不思議そうに首を傾げる女神だが俺は首を横に振る

「チート過ぎるつてのも面白くないしな
これだけでも十分チートさ」

「そつか・・・

やつぱり君を転生させたのは正解だつたね
いい暇潰しになりそうだ

じゃあ、設定はしたよ

ISの名前はリクルア

君の設定は世界で一番目に見つかった男のIS操縦者
周りの記憶も改竄済み

今から入学初のHRだからね

準備はいいかい？」

「おう、いいぞ」

女神が説明をしてる最中に同の服装はあのヒュ学園の白い制服にな

つていた

「ただ、君は面白いのが好きみたいだから織斑千冬と篠ノ之束の記憶は少ししか改竄してないからね」

「えつ？ちよ・・・どひこひ」と…？」

司はその発言にとても面白くさうな展開になりそうな予感がし、立ち上がりながら声を上げようとするが、女神は笑顔で手を振り…

・

「じゃあ、セカンド人生楽しんでね
またね～」

呼びかける前に女神はスーと千冬から抜け、時間が動き出し始める

「はい、じゃあ次は新城君

お願いします」

「えつ・・・あ、ハイ」

(あんの女神め・・・)

早速、織斑先生が変な目で見てくる(?)

気づかれないように千冬を見たが彼女はポーカーフェイスだが自分を凝視してゐるのに気づく

(はあ・・・まあこの学園生活を楽しむか)

「新城司です

趣味は読書

よろしくお願ひします」

新城司の新しい人生は女子の黄色い叫び声により、スタートした

セシコアイベント開始（前書き）

セシコアの口調あつてるかな？

セシリアイベント開始

一限目が終わり、今は休み時間

感想はめちゃくちゃ暇だった

なぜかわかるIIS知識に

なぜかあるIIS学園の教科書

なぜか用意されてある筆記用具や財布など

なぜか机の横にあるスポーツバッグ
きつと中身は私服などどう

女神仕様・・・そう思った司は納得した

ちなみに席だが真ん中の列に前から一番目だ

つまりIISの主人公

織斑一夏の後ろである

休み時間になると早速彼から声を掛けられた

「新城司・・・で合ってるよな?」

「おう、織斑一夏だよな?
同じ男子だ
よろしくな」

「ああ！

男子一人にこの空間はきついよ
お前がいて助かつた！

あと、俺は一夏でいいぜ！」

(おおう、小説通りフレンドリーだな)

「俺も司でいいぜ！」

確かに男子一人はきついよな

小説を見たとき司はハーレム天国だろーっと思ったが実際体験する
とキツイ

二人だけでも常に視線を感じるのだ
一人だつたら相当気まずいだろーっ・・・

「ちょっとといいか？」

すると一人の女子が話かけてきた

(おっ、これは一夏の再会イベントか)

「うん？一夏に用か？」

「ああ、すまんが借りていくぞ」

「ああ、わかつた」

幕に答えるなり、一夏の襟を持って外に行く

（小説と違つて情けない連れて行かれ方だな・・・）

それが一限目の休み時間だった

一限目の容赦ない姉と情けない弟を見た後の休み時間

（確かに）でセシリアイベントが・・・

そう思いながら一夏と話してると・・・

「ちょっと、ようじくて？」

（キター、セシリアイベントだ・・・）

などと思いながら視線を彼女に

座ってる俺たちを当然のように見下げる美人がいた

（なんつーか、日系イギリス人みたいだな・・・）

「訊いてます？お返事は？」

「ん？ 訊いてるけど、なんか用？」

「まあ、なんですの、そのお返事！
わたくしに話かけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度
というものがあるんじゃないかしら？」

「…………」

セシリアのその態度に俺と一夏は言葉を失う

（小説ではそんなんだつたけど……めっちゃウザイなコイツ）

「悪いな

俺、君が誰か知らないし」

一夏も少しばかりムカついているのか声のトーンが少し低い

「わたくしを知らない？

このセシリア「オルコット、イギリスの代表候補生で入試主席」

俺がセシリアの続きを話す
やつぱりコイツムカつくわ

「あら、少しほは頭のわかる方がいるのね」

「なあ、司

代表候補生ってなんだ？」

「国の代表の生徒ってこと

まあ、俺たち男子がわかりやすくていいだな

俺は二ンマリ笑いながらセシリアを指指す

ヤバい、やつちまつたぜ

「たかが国代表なだけで自分が強いって思い込んでる女さ
ほら、中学とかでよくいただろ
たいして強くないのに大口叩く馬鹿とか」

その言葉に一夏は笑みを浮かべる

「それは分かりやすいな
「つーー！」

俺と一夏の笑顔にセシリアはフルフルと身体を振るわす
そこに火に油
俺はさらりと言い放つ

「ありや？」

顔、真っ赤だよ？

保健室行つてくれば？」

そういつとけどうじ休み時間のチャイムが鳴る

「結構ですわ

新城司さん、あなたは絶対に認めませんわ
覚えておきなさい！」

「おう、忘れるかもしけんがな

捨て台詞を放つ彼女を見ながら一夏は笑顔で俺の肩を叩く

「ハハハ、司

なんかすげえスッキリしたぜ！

最高だ！」

「ありがとよ！」

さすが同じ男子

アレはムカつくもんな

そしてそのまま三限目が始まる

「再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める

が、授業内容

まあ、アレだ

セシリ亞戦イベントだ

当然、こりは一夏で・・・

「私、新城君を推薦します！」

「私も！」

何！？

そこは一夏だろ！

「私は織斑君を！」

「なんだと！

じゃあ、俺は司を推薦する！」

一夏あああ！

お前、セシリアイベントを折るつもりか！

「今のところ、新城が多いが他はいるか？」

するとその千冬の言葉に抗議するものが・・・

「納得がいきませんわ

代表者候補生でもない男がクラス代表者なんて認められませんわ！」

「らしげが、新城

なんか意見は？」

「面倒くさるのでセシリアイベントを立候補します！」

「そんな理由認められんわ、馬鹿者」

「バシンッ！」

(ぬお～～！)

織斑先生の角アタック痛すぎだあ！

絶対あれ、鉄製だろ！)

「やはりそんな弱々しい者が代表者なんていい恥さらしですわ
やはり、この国の男子なんて技術も後進的なら頭も後進的な弱虫な
のですね！」

ブチン、カチン！

たぶんそれが正しい表現だろ？

男子一人の表情が変わる

「イギリスだつて大して自慢できる国じやないだろ？

世界一マズイ料理で何年覇者だよ

「おい、一夏
そこがきっと自慢できるところなんだぜ？」

どうせ、アイツの料理もやは料理じゃないだろ
うわ～、優等生とか言いながら家庭科とか赤点だつたんじやね？
恥ずかしそぎだわ～」

ブチン

たぶん「ちりも正しい表現だろ？

「あ、あっ、あなた達、わたくしの祖国を侮辱しますの？」

「どうちが先に侮辱したんだか?」

「決闘ですか!」

「ハンシ、いいぜ!」

泣き落としとかセコい真似すんなよ?」

「そんな真似こねしなくとも完膚なきまで叩いて奴隸にしますわよ

!」

「それはこいつの台詞だ!」

開始五分でお前を墜としていくよ」

するとセリフで周りの女子が笑い出す

「新城君、面白い冗談はやめてみ」

「せうせう、ハンテ付けてもひつたらへ」

そう言われるが俺は――

「男に一言はない

そうだろ、囁」

「あつたりまえだ」

そう言い放つとパンと手を叩く音が響く

「さて、話はまとまつたようだな

来週の月曜日、第三アリーナで決闘を行ひ

後、織斑、お前も推薦されてるため参加決定だ

新城の後に決闘するからな

三人とも準備しておくように

こうして、セシリアイベントは司がやることになった

主人公 + 紹介

新城司
しんじょうつかさ

20歳 16歳（肉体的に）

大学一年生でサバゲーとラノベが趣味

真っ黒で男子の割に髪が肩まであるといつ長髪

顔はどちらかというと細め

テイルズオブヴェ ペリアの主人公の髪が肩までしかない少年と言
えばイメージしやすい

身長は一夏と同じくらい

肉付き

サバゲーが好きだったためミリタリーマニア

プライドは少々高めだが実力差があると思う人間には忠誠的

悩みは男の割に声が高めということ

女神

青髪の女性

面白いことが好きで怠け者

新城海奈

女神がI.S世界に顕現した際にこの人物として活動している
青髪から黒髪に変わり、腰まであるストレート
司の母親という設定であり、本人はノリノリである

司のI.S

狙撃型I.Sリクルア

背中に大型一門、両足に小型一門ずつ、両肩に小型一門ずつにブースター

肩から肘までと太ももが露出し、脛から下、手、銅に装甲があり、
全体的に薄い装甲

しかし、ブースターを囲うように装甲が展開しており、少々羽根に見えるのが特徴的

武器は大型の狙撃銃のみ

外見はまんまL96A

装甲の色は深緑で銃は黒

狙撃銃 リクレシア

外見はL96A

しかし、大型になつており右側に翼のようなシールドがついている

弾薬はマガジンを変えることにより、変更でき、弾数制限はない

ゆりくつ寝るために（前書き）

主人公は面倒くさがりです

ゆっくり寝るために

(・・・1026室
にじにじ合つてゐるよな)

俺は渡された部屋の鍵を回す

ガチャリ

開いたのを確認し、部屋に入る

「改めて見たが・・・

「ここはホテルか?」

玄関を開け、すぐ左手側に洗面所と風呂場
その横にトイレ

大きめの部屋に入つたらすぐ左手側に二つのベッドとその間にある
クローゼット

などと、

そこいらのビジネスホテルより遙かにいい部屋だ

「うわー、布団がフワフワ」

柔らかい布団の感触を楽しみ、睡魔の誘いに乗つてしまいたくなる

しかし・・・

『ズドンー』

壁の向こうから大きな音が伝わってくる

「・・・・なんで物が落ちたような音じやないんだ?」

明らかにこう何か壊れたような音だ

そして再び同じ音が・・・

「うぬせこな・・・」

文句言おつ

そう決め、ドアを開け、隣を見れば・・・

「一夏、お前の部屋だったか」

そこにはまだアを背にして座りこんでいる一夏がいた

「た、助けてくれ
篇に殺されそうなんだ」

部屋を指差しながら必死な形相の一夏の慌てよつ・・・

(何イベントだっけかな……)

小説第一巻……思い出したのは簾のシャワールームの挿絵……

「あー、なるほど……

一夏のラッキースケベめ
簾のあの姿見たんだわ」

「なつ、何で!」

思い出したのだろう、顔を赤くして慌てふためく
しかし、そのままでは再びつむれなくなるので……

「篠ノ之、隣の新城だ
開けてくれ、話がしたい」

「ちよ、ちよっと待つてくれ!」

たぶん服を着てるのだろう
中が騒がしい

そんなこんなで待つてゐるうちキャリコーの姿がチラホラと……

(つて……マズイ、マズイ

周りの女子、無防備すぎる……)

確かにこじは普通は女子高なのだろうが、例外で男子もいるのだ

下着姿は、理性的にマズイ……

するといちようじドアが開く

一夏は・・・入れてやるか

「で、話とはなんだ？」

制服姿の篠が腕を組みながら聞く

しかし改めて見るが、やはり美人

髪をおろして、巫女さん姿になればきっと大和撫子になるだろう

そして、そんな篠がこの鈍感唐変木を好んでるのは小説で知っている
わけで……

「一夏、お前は篠ノ之と平穏にルームメイトになりたいか？」

「ん？」

そりゃあ、幼なじみだしな」

「そうか、なら俺が手助けしてやる

だから、篠ノ之と話がしたいが、お前に聞かれたくないことがある
んだ

ここは俺を信じて、シャワールームで待つてくれ」

「おう、わかつた」

ふう、単純で助かつた

「一夏に聞かれたくないことはなんだ?」 ちょっと警戒してゐる体勢

そりや、まだ親しくない男子だしな

けど、まあ、一応味方だぞ?

だつて、公式なカップリングは篠だし、一夏の機体的にも篠と組むべきだしな……

一夏とシャルルも捨てがたいが……まあ、それは置いといて……

「单刀直入に聞く
篠ノぞ、一夏のこと好きだろ?
つて、うわっ!」

木刀一閃

間一髪で避けた……

女神仕様で反応速度上がつてゐるのか?

「それをど、どいで聞いた!」

顔真っ赤で睨んでくる

ヤバい、ここで死亡フラグはヤバい

「お、落ち着け！」

考えてみろ、こんな女子高に例外で俺と一夏だ
少なくとも何回か女子を意識する場面に出会う可能性がある上に、
男に飢えてる女子に餌二人が来たんだ！

一夏にアタックする女子は多いはずだ

いくら唐変木な鈍感一夏でも墜ちるのは時間の問題だらうっ

「む・・確かに」

木刀を引き、悩み込む筈
これで怪我をする心配はないな

後は平穀のために・・・

「だからな、同居という最大のチャンスがある今のうちに一夏に優
しく接して、一夏の心を掴み、一步大きくリードするんだ

アイツは意外にも天然タラシだ
敵は多くなるはずだぞ」

小説でもメインヒロインの篠より、シャルルやラウラのほうが倍近い人気という結果だつたしな・・・

「そうだな・・・

今のチャンスを生かす」

もう一押し・・・

「はつきり言つて、唐変木な鈍感一夏はこの近くじゃないと氣づかないはずだ

ハツキリした意思表現や好印象を与えるアピールをだ！
例えば弁当を作つてやつたり、

今日だつたらEVAの基本を一週間で覚えるように協力したりしたらどうだ？

照れ隠しも暴力を振るつたりしたら、アイツのことだ

変に勘違いするに決まってる

いいか？

行動は積極的かつ慎重にだ！

男は優しい女に弱いもんだぜ？」

そこまで言つと篠はコクコクと頷く

「あ、ああ！

そうだな新城！、いや同
礼を言う！ありがとう！

これからは簾と呼んでくれ！

ガツチリ握手を交わす

これなら隣も静かになるだろ？
ゆっくり寝れる

「一夏、もういいぞ」

「ん？ わかった」

一夏が出てくるなり、簾が顔を赤くしながら 一夏に向かいつてるよ
うだ

「さて、邪魔者は消えるかね」

音を立てず、そつと部屋を出る

そして、その夜

司は邪魔されずにゆっくり寝れた

小説仕様で一週間（前書き）

文字通り仕様で一週間経たせました

小説仕様で一週間

翌日、なんだかんだで授業を受け、四限が終わった頃・・・
「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦しようと思つていなかつた
でしようナビ」

背後でヤツ語りセシリア

先ほどの授業では確かに男子とこうじで専用機を持つてゐるところ
ことを話したが・・・

「はいはい、わざわざ自分も専用機持つてますとこうじに来
て、お疲れ様です」

ペコリと頭を下げる

そんなセリフにセシリシアは・・・

「バカにしますの?」

「おひ、ムカつく奴をバカにして何が悪い?」

一発触発の雰囲気を出すが今の俺は冷静であつて・・・

「一夏、第
食堂行こうぜ?」

早く行かないと席がなくなつちまつ

「そうだな、時間の無駄だしな」

ギッと睨みながら席を立つ

「うわー、美人って怒ると怖いな・・・

そつ思いながら、何か言つてゐセシリ亞を無視し、食堂に行く

「どうか、空いてるといひは・・・」

一夏がキョロキョロ見渡す

「ほれ、あそこが空いてるだ」

指差した先にはちょうど二人分の席が

一夏を挟んで並んで座る

「どうだ? 一夏

I S の基本、順調か?」

「ああ、雛が助けてくれてるからな」

「当たり前だ、幼なじみが困つてると
それくらい助けてやるさ」

おつ、結構素直になつてゐ

すると後ろから声をかけられた

「君が噂の代表候補生と勝負する子?」

「はい、正確には俺と同ですがけど……」

一夏がそう答えるうちにリボンの色は見る
赤だから三年生……

ああ、あの食堂シーンか

「けど君、素人だよね

先輩がいろいろ教えてあげようか?」

そう言われた一夏は嬉しそうに笑顔を浮かべ、答えようとするとが・・

•
箒と皿が合つ

「あ、大丈夫ですよ

俺と一夏、あの有名な篠ノ之博士の妹さんに教わってるんで

「そうです、私が教えるので心配なく

そう言われた先輩は箒を一瞥したあと苦笑しながら逃げるように去
つていく

「なわけで、今日から訓練だからな

こつして訓練が始まるわけでして……

「それでなんでIS訓練が剣道なんだ？」

簫に打ち負け、更に厳しい簫の訓練の休憩時間
竹刀を持つ一夏に俺はため息をつく

いや、初心者だから仕方ないんだろうな

俺も知識とかなかつたらそうなるわけだし・・・

「いいか、一夏

ISの基本的な動きは人間の動きだ
だからな、剣道で剣を鍛えれば鍛えた分だけその動きが反映される
そういうことだ」

「なるほど、けど今は剣道やらなくていいのかよ

不満の眼差しを向けてくるが俺は自分のISを掲げながら答える

「俺のISは射撃専門だからな

それに一夏のISはどんなISはわからないんだ

剣道やつとけ」

「やつとけ」とだ

さあ、その緩みきつた一夏の技術を鍛え直すのを再開せらるや

「ああ、わかつたよ」

再び竹刀を打ち合つ一人を見た俺はちょっと離れ、IASを展開させてみる

女神からもうつたきり一度も展開してないのだ

(確か・・念じるようにだよな
来い、リクルア！)

黒い銃型のネックレスが輝いた瞬間、俺は深緑の装甲に包まれた両足には小型のブースターがついている

そして両手には右側に翼のようなシールドがついたL96Aの姿が・
・

(ヤツベ・・めつちゃカッケー)

やはり男たるもの銃とかには憧れるものだ

すると急にモニターが表れ始める

『フォーマッシュファイティング
初期化最適化終了、一次移行』

そう画面に映ると更に装甲が変わる

背中に大型一門と両肩に一門ずつブースターが増える

「ウッハ、こりゃ一撃離脱の高速戦闘かもな」

試しに50メートル先まで一気に移動するイメージをする
するとブースターが点火され、凄まじい速さで移動する

景色的に一瞬の移動だった

そして試し打ち

100メートル先の壁を狙い撃ち、ズドン！と一際大きな音が響く
更に素早くコックキングすると一発目

一発目と同じ位置に当たる

無反動、最高！

「そういうや、イメージで弾変えれるんだっけ」

そう呟くとモニターに弾の変更の仕方が現れる

「フム、マガジンを変えればいいのか」

マガジンを変えながらイメージするのはガン ムで出てきた緑色の
ビーム

そして再び狙えば見事に緑色のビームが放たれた

「おおー・マジでビームだ

「いつや、これいろ試せるな・・・」

そしていろいろ試した結果・・・

「・・・」
「試せないのはつかだな」

なんでもイメージ通りにできるのがわかり、核爆弾式の弾を想像した時は正直危なかった

区切りがよくなつたところで一夏のところに戻れば・・・

「どうした、一夏」

声をかけてみるが返事はない

そこで少し息が上がつてゐる簞に話しかけて見れば・・・

「体力も落ちてたらしい
これからは体力面の訓練もだな」

なるほどな・・・

こりや、大変そうだ

などと思いながらも一夏を背負つてやりアリーナを出た

こうしてなんだかんだで一週間が立ち、決闘の日になつたのだ

セシリ亞戦（前書き）

瞬時加速は・・・女神仕様です

セシリア戦

決闘当日の日・・・

「へえ～、これが白式か」

一夏の専用機が届き、改めて見るがやはり印象は『白

装甲やらなにやら白い装甲だった

「新城、容赦なくやつて来い

男が大口叩いたんだ

天狗になつてる小娘の鼻をへし折つて来てやれ

ありや・・・

小説ではなかつた千冬さんの言葉

やつぱり日本人として頭にきてたんかな?

「わつかりました

じゃあ、一夏

先に行つてるぜ」

「ああ、頑張れよ」

「おうー。」

そしてEVAを展開し、ブースターに点火する

飛び立つた先には青がいた

「ずいぶん遅かつたですわね

尻尾を巻いて逃げたかと思いましたわ」

「すいませんでしたー」

「棒読みになつてますわよ・・・」

「そりゃあ、謝る気なんて更々ないからな
少しくらい待てないのかよ

イギリスは短気な人ばつかだな～」

クククツと笑うと怒り心頭ばかり銃口を向ける

「その言葉、必ず後悔させてあげますわ！」

「できるなんならやつてみろー！」

俺も銃口をセシリアに向ける

そしてセシリアの武器

6.7口径特殊レーザーライフル『スター・ライトmk.2』からレーザー
ーが打たれる

これが開始の合図だった

俺は間一髪右肩を掠める程度で避ける

そこからひまざに雨

容赦なく降りかかるレーザーをブースター吹かしながらできるだけ
避ける

もはや、銃口を見ながら避けるのではなく勘を頼りに動いていた
やはりEHSの実戦はチートな能力を持つてても素人なのだ

すると、セシリ亞は更に攻撃範囲を広げる

自立機動兵器

特殊レーザーがついてる特殊武器、『ブルー・ティアーズ』

(うわ、実際見るとマジで種ガン ムの自由天使のドラグーンじゃ
ねえか!)

などと思いつつも最初から4000もあるチート級なシールドエネ
ルギーがもうすぐ2500を切ろうとしていた
まだまだ余裕はあるが・・・

(さて、そろそろ反撃に出るかね)

そう決めるなり、機体を制御し、セシリ亞と向き合つ

「オルコット!

それがお前の特殊武器か!」

「ええ、そうですわ

このティアーズとわたくしが奏でる円舞曲で墮ちるのも時間の問題ですわね！」

「そうだな、5分まであと2分を切ったし、そろそろ終わらせようか！」

そう叫ぶのと同時に俺は期待を反転し、レーザーの雨の中ブースターを最大点火

瞬時加速『イグニッショングーラスター』でセシリアの後方に移動する

「後ろっ！？」

ISのハイパーセンサーによって周囲360°全て見えているように脳内に伝えられる

だが、やはり人間は直接目視で見えない部分は一テンポ遅くなるわけだ・・・

「ファイア！」

掛け声と共に『ズガンツ！』という銃声がした後、セシリアの右肩に銃弾が当たる

そして装甲が吹き飛ぶ

(さすが女神仕様
威力、実弾でもパネエっす)

「まだまだ！」

マガジンを変え、再び瞬時加速

セシリアの真上に移動

今度は少々早めに展開されるが・・・

「そのまま巻き込まれちまえ！」

撃つた弾丸がセシリアの目の前のティアーズに当たり、盾代わりになるが・・・その瞬間セシリア周辺に黒い小さな固まりが三つほど散らばると爆発した！

「モンハンの拡散弾、使えるわ！」

セシリアが爆発により身動きが取れてないうちに再びマガジンを変え、撃つ

狙いは残り三機のティアーズ

『ズガン、カチン
ズガン、カチン
ズガン、カチン』

ボルトアクションライフル特有のコッキングレバーを引きながら、三発の銃弾を素早く発射させ、弾丸はティアーズに突き刺さっていく

その瞬間、ティアーズは爆発に巻き込まれ、木つ端微塵になつた

「これで守りはなくなつたな！
とどめだ！」

「くつ！」

俺はマガジンを変えながら一気に肉薄する
セシリ亞はダメ出しでスター・ライトを撃つが当たらない

そして俺が目の前に来た瞬間

「掛かりましたわね！
ティアーズは6機ありますよー！」

セシリ亞からミサイル型のティアーズが発射された！

普通は避けれないが・・・小説で知っている司はわかつていたため
・

「最後のは残念だつたな、
けど、まあ・・・チエックメイト」

セシリ亞が笑みを浮かべたのと同時に瞬時加速で下に避け、背後に
回って照準を合わせていた

最後は威力最大のビーム弾

スコープで見える背中を狙い、引き金を引く

弾丸が当たり、ティアーズのシールドエネルギーがエンブティー（

燃料切れ)と表示される

5分10秒・・・

少し過ぎたがそれでもほぼ5分だった

「あ～、今日は疲れた」

初の実戦

サバゲーをやつてたからそれなりに動けたがそれでも次元が違う戦いよくあそこまで動けたものだ

「にしても、弾丸選択自由と瞬時加速のオンパレード・・・これだけでも強すぎだろ

更にシールドエネルギーは多めで弾丸は対IS装備を吹き飛ばす威力まあ、五発撃つたらマガジン変えるつつ隙ができるからそれだな、改良点は「

今日の復習をしながら夜の散歩をしてるといつこ人とぶつかってしま

つた

「キャツ！」

「あ、すいません！」

お怪我はありま・・オルコットかよ」

「あなたですか！」

それつきり互いに沈黙

氣まずい雰囲気が漂つ

（なんか話題振るつ！

なんか気まずい！

話題、話題、話題！

脳内会議、話題は…）

その瞬間、司の脳内で様々な格好をしたミニチュア司が集まる

「緊急課題！
現在の話題を提案せよー。」
黒いスーツの司が司会をするらしく…。
「黙つて逃げるー。」

「却下ー。」

丸眼鏡の学生服司の意見は却下

「殴つて氣絶せらるー。」

「採用できるかー。」

不良君の司の意見は却下

「口説くー。」

「口説こいぢりあるー！？」

チヤラ男司の意見は却下

「謝るー。」

「やつとまともな意見がー。」

ジャージ姿の司に司会は考える

しかし、そこでベルがなり強制閉会

この間 0・5秒・・・

とつあえず司は・・・

「その、アレだ

すまん、頭に血昇つて言い過ぎた」

キヨトン

そんな反応だ

セシリ亞はパチクリと田を見開き、驚いた表情でこちらを見る

「なんつーか、天狗になつてゐる見たらムカついちまつてだな・・・
その戦闘とか女相手にやり過ぎた・・・」

今思えば容赦なかつただろう

まともな反撃すら」えず、爆発、爆発、爆発（威力はチート仕様）
でシールドエネルギー奪つたところでチート仕様のビーム弾だ

自分でも鬼畜すぎたと反省していた

するとセシリ亞はクスクスと笑っていた

「昼間の態度とは大違いですわね

別にそんなに怒つてませんわ

確かにあなたの言つ通り、自分の力を過信してたかもしだせませんわ
ね

セシリ亞は夜空を見ながら呟く

「わたくしの話を聞いてもらいたいから？」

わたくしの両親は今の世間でいう女尊男卑でしたわ
物心がついたときくらいから、いつも母の機嫌を伺う弱々しい父を見
てきたわたくしは常に女性が強い
そう思つて育つきました

そしてそんな両親があっけなく他界

親族やらが遺産を巡つていい争う醜い抗争

だからわたくしはそんな連中から両親が残した物を守りうと代表候
補生という地位まで登りつめました

そして男性の素人IS操縦者は当然弱いと決めつけてましたわ
自分と相手との器量を見極めきれずに・・・

だから謝るのはわたくしのほうですわ」

セシリ亞は言い終えるとペコッと頭を下げる

そんなセシリ亞を見た俺はなぜか頭を撫でてしまつた

「別に謝らなくていいさ

たぶんオルコットはわ

プライドが高いんだよ

それだけ努力して來たんだからさ

俺もプライドがあつてそれで決闘になつたんだ

おあいこさ

それに自分で間違いに気づいたんだ

お前は強くなるさ」

「新城さん・・・」

「明日は一夏とやるんだろ?」

今日の反省生かして全力でやつてやれ

「ええ、必ず!」

そしていつか必ず新城さんを負かせてみせますわ!」

「あはは、楽しみにしてるわ

「じゃあ、おやすみ」

気分も吹っ切れたし、今日は気持ちよく寝れそうだ

セシリアに背を向けて部屋に歩き出す

きっと彼女は更に成長するだらう
楽しみだというのは本音だった

「つて、あれ・・・セシリア矯正つて一夏の役じゃん・・・
もしやフラグブレイク?

いやいや。。。物語ではそうであつて別にあれで好かれるわけないし
な・・・

まあ、さつきの雰囲気で最悪から友人としていいやつだな

などとセシリアの印象が格上げされたのであつた

セシリアとの会話は俺じゃない・・・（前書き）

少々あいまいだけだがんばって修正・・・
これ以上は思いつかん・・・

セシリ亞とのフラグは俺じゃない・・・

説明が面倒くさいので結果を言おう

セシリ亞 VS 一夏はセシリ亞が勝利

昨日とは違い、慎重な戦いからレーザーによってシールドエネルギーを削られ、零落百夜も数秒しか展開できずに終わってしまったけど、やはり一夏の近接武器だけでセシリ亞と30分近くも戦い続け、白熱したい試合だった

そしてクラス代表だが、

一夏に勝ったセシリ亞より強いのが自分なため

結果、代表は自分になってしまったのだ

そして現在・・・

ワイワイと食堂でパーティーをやっている
代表おめでとうパーティーだ

周りに女子ばかり

そして定番だわ

一夏の周りには女子がワイワイ

セシリア戦では負けはしたものの善戦はした一夏の印象は女子の中では評価が上がったらしい

しかし、基本的に自分が中心になつて賑やかになるのは苦手であつて

そして今は自分が中心

心が落ち着かず、なんというか疲れる

ついつい、ため息が漏れてしまつのだ

「司、先ほどからため息ばかりだな」

「幕か・・・」

緑茶の入った紙コップを渡され、幕は自分の隣に座る

「アッシュのところに行かなくていいのか?」

「興が乗らん」

その声は低く、一夏を睨んでいる

当の本人は女子に囲まれ、戸惑っていた

「けど、アイツは筋金入りの鈍感だ
さほど心配しなくて大丈夫だろ」

「しかし……」

幕が口ごもるが、その先の言葉を遮るかのように一人の前に一人の女子生徒が現れる

「はいはーい、新聞部の副部長の黛薫子でーす
はい、これ名刺

二年生よ

話題の新入生、織斑一夏君と新城司君に特別インタビューに来ました

オーと周りが盛り上がる

そして自分の名前が入っていた一夏がこちらに来た

「さて、まずは一
クラス代表になつた新城君に聞こうかな
なんか一言ある?」

この聞き方になぜか、小説にあつたこの部分を思いつつのは幸いだ
と思う

「（確か、普通の「メントだと、ねつ造されるんだよな）狙撃や射撃をメインとする戦い方ですが、普通の狙撃手と思わないでください

い

一応、正論

だつて機体がチート仕様だもん

「おー、重いねー

こりゃあ、大物かな？

さて、惜しくも代表になれなかつた織斑先生の弟としても重いなー
夏君にもコメント聞くつかな？」

「まあ、なんどこりゃか、がんばります」

「うん、そつ言えれば楽なんだけど――――

「普通のコメントか～

面白くないから適当になつ造しておくな

「よくない、よくないですよー。」

なんてことになるんだよな・・・

新聞部、恐いしこや

「セシリアちゃんはなんかコメントある？」

わざわざから髪を弄つてたセシリアは来たとばかりに答へる

「うへこつたコメントせりふと書かれてますけど、仕方ないですわね

ではまーーーー「長くなりそうだからこーや

「ちょっと待ちなさいー！」

田上の先輩に命令はビリビリ・・・などと思いつつ、見てるがセシリアはギャア、ギャア言つてるが薰子は適当にあしらいながらメモしていく

なんか、セシリア弄られキャラだな～

「はい、じゃあ写真撮るから三人共並んでね時間ないからちやつちやつと並ぶ！」

と急かされながら並ぶ三人

俺が真ん中で左右にセシリアと一緒に夏

あ、そうだ

「こじで一夏を周りから固めて幕を助けてやれつ

考えついてから早速実行

ピントを調整している薰子のところにいく

「ちょっと質問いいですか？」

「ん?なんだい?」

首を傾げる薰子に耳元で話す仕草をすると面白がり笑い、耳を貸す

「スキャンダルみたいなネタは新聞部としては好きですか？」

「おっ、そりゃ好きだよ
面白くなりそうだしね」

さすが新聞部

情報好きだ

「じゃあ、篠ノ之博士の妹さんの恋路を助けたいんです
一夏はダイヤモンド並みにレベルが高い純感レベルなんです
だから意識させるには周りから固めようと…」

「お、いいねー

その話、乗ったよ

交渉は決定

みんなのとこ戻るなり幕を呼ぶ

「せつかぐの写真だし、幕も来いよ」

と、彼女を一夏と俺の間に置く

さあ、後はじかく紛れに押すだけだ
どうせ、他の女子が写真に写りたがるんだ
バレはしないだろ

「じゃあ、撮るよ

35×51÷24は？」

「えっと……？」

一夏が答えた瞬間、俺は簫を一夏の胸に向かつて彼女を押す

当然、いきなりのことにバランスを崩した彼女は一夏に倒れ込む
いきなりながらなんとか受け止めた一夏はつい簫を見て、簫も一夏
の顔を抱き止められながらも見上げる

そして互いに目があつた瞬間・・・

「74・375でしたー」

やはり、シャッターが切られるのと同時に全員入つて来た

「あ、あ、あなたたちなんで入つてるのでですか！？」

セシリアが悔しそうに怒つている

やはり、せめて一夏の隣にさせてあげるべきだったのか・・・

「セシリアたちだけ抜け駆けはすることよー」

「クラスの思い出になるじゃんー！」

クラスの女子につまづいて言つてくるめられ、セシリアは苦虫を潰したよ
うな表情だった

まあ、そのあとセシリアの要望で撮り直しもしたとさ

で、例の二人だが

「す、すまん！」

「ん、ああ、大丈夫か？」

篠は顔真っ赤にして恥ずかしそうだが、一夏は何事もなかつたかの
ようにしている

（ハハハ、一夏よ

そうやってクールにいられるのも今のうちだぞ）

一ヤリ顔を我慢できない俺は手で口を覆う

そして新聞部が去ったあともパーティーは10時過ぎまで続いたとさ

そして後日・・・

俺と一夏、篠は部屋が近いことから毎日一緒に登校しており、いつも通り三人一緒に教室に入ったのだが・・・

「織斑君！

これ一体どうこう」とー。」

「篠ノ之さん、大胆」

そこには新聞部による新聞

そして一面を使った写真と見出しが凄い者だった

『話題の一年生に突撃インタビュー
そこで大胆な一年生を発見！』

写真を大きくし、更に分かりやすいように抱きつきながら見つめあつてる二人を赤く囲つていた

「「なつーーー！？」」

二人は顔真っ赤になりながら新聞を引き寄せ、まじまじと見る

一夏は新聞に目を走らせ、篠に至っては口を金魚のようにパクパクとさせ、固まっている

(・・・アハハ、ヤツベ
この反応、おもしれー！)

予想以上の反応にみんなに背を向け、必死に笑いを堪える

そんな非常事態の一人にある女子が追い討ちをかけるかのように云
える

「なんかクラスメートうさんつて人のコメントがあるよ
『幼なじみだけあって一人とも部屋は同室らしいですね
勉学や食事、
訓練も一緒に、今更ですよ
けど、普段控えめな一夏から抱き寄せるとは驚きました』
って、言ってるけどホントなの！？」

「いや、抱きよせてない！
って、最初からそんな関係じゃなくて…」

「・・・・・」

一夏は慌てて否定するが、その慌て様は逆に関係を隠してゐるかのよ
うに誤解されてしまうだろう

篇はすでに炎上している

「ほれ、恥ずかしがつてないで席に着いひづ
みんなもな
早くしないと鬼教師が来るぜ？」

その一言は効果あつたのか

蜘蛛の子を散らしたように解散していく

(ハハ、簞が一步リードと……)

脳内エントロイン表で簞の棒グラフが少し高くなつた
セミであることに気がつく

(あれ、セシリ亞なじこの蜜を貪つてしまなのだが……)

首をひねり、?マーク浮かべる
すると後ろから声をかけられた

「おはよハジルコサマ

新城さん

「ん? オルコットか

おはよっ

振り向けば先ほどから考えていた本人、笑顔のセシリ亞が立っていた

「あの、新城さん
もし良ければお名前でお呼びしてもよろしく?
わたくしも名前で呼んでくださいようしいので」

顔を赤くしながらおずおずと聞くセシリ亞の仕草に俺はあることが
頭をよぎる

(まさか・・・
いや、ここは俺とセシリ亞フラグはだめだ・・・
ちゃんとセシリ亞と一夏とのフラグに戻さなければ・・・)

「やはりダメでしょうか・・・」

たぶん、頭に耳があつたらペコッと垂れているだろう

そんな表情だ

俺は慌てて答える

「あっ、いや！

大丈夫だぞ、セシリ亞！

最初は印象から違つたけど、ついして『友人』として話すならいいな！

改めてよろしくな！」

友人の部分を少々強めに強調して話し、それが伝わったのかセシリ
アの表情は固まっている
すまんな、セシリ亞
たとえ一夏とフラグじゃなくともタイプじゃないんだ・・・友人と
してならいいが・・・

「友人ですか・・・

しかし、まだチャンスはありますし・・・

なにやらブツブツつぶやいてるセシリ亞
しかし、すぐに表情は一変

「わかりましたわ！

改めてよろしくですわ、司さん！――

そのまま席に向かっていくセシリアは心なしかぎゅっと落ち込んでいた

俺は心の中で静かに合掌する

（すまない、セシリア・・・。狙つのは俺じゃなくて一夏にしてくれ・・・）

俺はため息をついて席についた・・・

時は既に遅し、やがちまたた（前書き）

・・・原作崩壊ツスね

時は既に遅し、やつちまつた司

風は微風・・・

距離は800・・・

湿度は高くない

放課後の訓練場で、ライトを灯し、やたらと明るいグラウンドでうつ伏せの状態から「96Aの倍率スコープを覗く

ターゲットの赤い的に的確に当たつ・・・・ていなかつた

五発中一発が真ん中

あと三発は真ん中より上

俺は身体を起し、あと右肩をぐるぐる回しながらため息をはく

「あへ、やっぱり本物の銃は反動が半端ないな」

そつー——

今撃つた「96Aは正真正銘本物

学園入学から早、一週間ちょっと・・・

IHS学園は高校でありながらIHS授業は訓練である

当然、軍に関係する訓練もあるわけである
そこで司はE.S学園を通して銃を購入した

お金？

なぜか私服と一緒に銀行の通帳を見れば80万ほど入っている
ちなみに住所を見れば学園からさほど距離がなかつたという・・・
まあ、そんなわけで今、本物の銃で試し撃ちをしてたのだ

「さて、帰ろうかな」

L96Aをケースにしまつとグラウンドの明かりを消し、真っ暗になつた訓練場から出る

そのまま食堂に向かおうとしたが、目の前に辺りをキョロキョロしたツインテールの女子がいきなり声をかけてきた

「ねえ、ちょっとそこのアンタ
総合受付って、どこか知らない？」

(・・・・もう、こんな時期だったか
どうなんだろう、鳳・鈴音イベント)

そう―――そこにはボストンバックのような大きなカバンを背負つたツインテールの少女・・・鳳・鈴音がいたのだ

「ああ、案内しようか？」

「頼むわ

にしても・・・アイツ以外にも男子がいるんだ」

マジマジと観察する鈴に苦笑いで答える

「俺は新城司

まあ、織斑千冬の弟の一夏のほうが世界的にもインパクトあるから
俺はそんなに有名じゃないみたいだしな

お前の名前は?」

まあ、知ってるけどなー

で、上の説明だが女神が記憶操作したため俺もIOS操縦者としてそ
れなりに有名らしい

(クラスの女子に聞いてみた結果)

しかし、やはり一夏のほうが有名らしく俺の名を知っているのは日本
国内だけみたいだ

外国からの生徒は知らなかつたからな・・・

「鳳・鈴音よ

アンタは一夏と同じクラスなの?」

「ああ、そうだよ

まあ、一夏のほうが人気高いからな

「アイツ、モテるんだ・・・」

「なんか言つたか?」

「あつー。

うつそ、なんでもない!」

あれば、受け付け?「

慌てて首を振る鈴だが、ちゃっかり聞こえちゃつてますよ~

まあ、聞こえてないふりはしてるが・・・

(うつなんだよ、一夏は小説通りモテるんだよ

こないだ聞いたが同居してゐる幕はどひつてゐるんだって一夏に聞い

たが・・・

幼なじみとしか意識してないといふ・・・

同じ男として情けないと本氣で感じてしまったのだ)

「うつうつ

まだ受付は閉まってないな・・・

すこませへん

明かりがついてる受付窓口から呼んでみると

すると事務員の女性が受付に出てきた

「中国代表の鳳・鈴音ですけど、寮の部屋番教えてもらつていいですか？」

入れ替わりに鈴が受付人に話しかけ、部屋番を聞いてるみたいだ

「お待たせ

ところでアンタ

一組のクラス代表みたいじゃない?」

「そうだけど・・・」

何です、その好戦的な目

そりやあ、クラス代表だから戦うなら仕方ないけど鈴さん、まだクラス代表じゃないでしょ・・・

「面白いじゃー」「間違つてもクラス代表にならないでくれよ・・・まだ何も言つてないじゃない!」

鈴の言葉を遮り、先制攻撃

案の定、戦おうとしていたのか・・・

「だいたいお前の好きな奴が対戦相手じゃないんだ
俺が代表だしな」

「なつ！」

「なんで、一夏が出てくるのよー。」

顔を真っ赤にして怒る鈴

小説ではピンと来なかつたがこれは中々、面白い反応だつた
先ほどまでは話しが面白くこと思つていたが、今は興味心が爛ら
れてい

「（もういちょうい弄つてみるか・・・）

誰も一夏つて言つてないけど？

一夏が好きでちゅうじゅう学園に入学したのを知つたから転校して
きたのか？」

一ヤリと嫌らしい笑みを浮かべながら話す

鈴は墓穴を掘つたのに気づき、口をパクパクさせながらフルプルと
震え、顔はトマトのように真っ赤

そんな反応につい笑いが堪えきれず、笑つてしまつた

「アハハハハ、その反応サイコー！」

アハハ、ス・・マン

笑い・・クツ・・すぎだな

クククツ、心配しなくとも・・ハハ、一夏はまだ誰も好きな奴はで

きてないぞ」

腹を抑えながらポンポンと優しく鈴の頭を叩く

しかし、それが最後の決壊の留めになつたようだ

ブチンッ！

例えるならこんな音だらう

鈴の堪忍袋が切れたようだ

「もう許さない・・・

クラス代表戦、覚悟してなさい！！

私を弄つて、怒らせたことを後悔しなさい！

公衆の前でボコボコにしてあげるわ！」

そう言い放ち、背を向け、スタスターと去つて行く鈴

残された自分は・・・

「やべへ、やり過ぎたな・・・

すでに後悔していた

鈍感　呆れ三人（前書き）

一夏はやはり鈍感

鈍感 呆れ三人

「噂の転校生の話知ってる?」

「聞いた、聞いた

なんでも中国代表なんだってね

二組なんじよ!?

登校し、教室に入るなり耳に入るクラスの会話

前の・・・前世の世界でもそうだったけど女子の情報の速さは摩訶不思議だと思う

少なくとも彼女が来たのは放課後の夜

半日足らずでクラスの女子の大半が知ってるという

女子独特のネットワークもあるのだろうか・・・

「ふーん、司は知つてたか?

転校生の噂」

話を聞いていた一夏が訪ねて來たが昨日会つたとは話づらかった・・・

なんせ、一夏と面識ある者だから・・・

「あ〜、それなりにな

ちょっと小耳に挟んだ程度だよ

「せうか、どんな奴なんだい？」「

そう呟いた一夏

するといきなり嫌な予感が胸中をよぎる

「一夏！』

スマン、トイレ行つてくるー！」

猛ダッシュで教室後ろ側のドアに向かう！

『『ガラガラ』』

教室にあるドアが一斉に開く！

「久しぶりね、一夏！』

「お前は、鈴！』

そこには腕を組み、笑みを浮かべた鈴が立っていた

「まさか・・・一組の転校生って鈴かー！？」

「ええ、そうよ

そして中国代表候補生よー

で、今日は改めて宣戦布告をして来たのよー

新城司はどこにいるのよー？

「あ、ああ

「アイツなら今、トイレに……」

キョロキョロとまるで獲物を探す日をしてる鈴に、惑いながら説明する一夏

それを聞いた鈴はフンッと鼻を鳴らす

「わう・・・

じゃあ一夏、伝えておいて

クラス対抗戦で必ず潰してあげるってね

「お、おう

必ず伝えるわ

じゃあ、俺は席に戻るな

「あ、ちょっと一夏ーーー

まだ話が・・・ーーー」

「お前が、うるさい奴とは
邪魔だから帰れ

「何よ、私を邪魔呼ばわりなんてーーー

そそくあと席に戻る一夏

だが、鈴はまだ話せりないよつて声をあげ、さうしてさなり邪魔呼ばわりされる

それを鈴は不機嫌そつとうとおしゃうに振り向く

そこには鬼がいた

「その先の言葉を書いてみる、小娘」

「ち・・千冬わい『バシン、バシン』

二回だ

大事? なことなので二回書おく

二回だ

一回もあの強烈な殺人級の出席簿アタックを食らつたのだ

角じやないく面だったがあの千冬に鉄製のよつな出席簿だ

見ていた一組全員が

「うわ~」や「痛そ~」などと顔をしかめながら恥じていた

そそぐと歸る鈴

「痛そ~だつたな、鈴のアレ」

「司、いつの間にー?」

後ろでいきなり聞こえた声に振り向く一夏

「やついたら・・・お前、鈴と何かあつたのか？」

「そうだな～」

ガシガシと頭を搔き、一つため息を漏らす

「昼休みに話すよ
もう少しHRが始まる」

一夏は一つ返事で前を向くとちょうどHRが始まった

時間は昼休み-----

購買で買ってきた昼食を仲良く食べる四人の姿・・・・・・・じ
やなかつた

「――なるほど、つまり・・・」

「司さんが悪いですわ」

「うん、わかってるや・・・」

正座させながら腕を組む女子一人相手に頭を上がらない自分

まさにこの絵図がこの世界の女尊男卑の体現してる光景だろ？・・・

「全く自業自得だ、馬鹿者」

「聞いて呆れますわ」

ため息を吐く二人

「けど、まあ司も反省してるしさ
その辺にじとじてやるつぜ？」

そりゃあ、わざわざ好きな奴を追いかけて来た鈴を笑うのは酷いが
反省したんならちゃんと謝るだろ？」

「あ、ああ、わかってる・・・

あと、一夏

俺が説明したことから、鈴が誰が好きかわかるか？」

鈴が好きなのが一夏というのは言つていないが出会いからこうなる
原因まできつちり話したのだ

笄とセシリ亞はその説明から誰を追いかけて来たかわかつたが・・・
・・・・

「わかるわけないだろ

会つたことがないし、鈴からも聞いてない
けど、今度紹介してもらつかな？」

「・・・・・」

わからないと当然のように答える一夏

三人は言葉を失う

「俺は本人がいるから名前を言わずに説明したが笄とセシリ亞はわ
かつたよな・・・」

「え、ええ・・・

けどあの説明でわからないなんて、筋金入り以上の鈍感ですわね・・
・」

「先が思いやられる・・・」
ため息を吐く三人

だが、そんな三人に一夏は首を傾げていた

「どうしたんだ、三人ともため息ついて・・・

なんかあつたのか？」

無意識なんだろ？・・・

だけどそんな天然鈍感一夏に再び盛大なため息を・・・

鬼の文 (前書き)

ヒロインは決定で・・・
シャルやラウラじゃないよ?

鬼「」

わして・・・

クラス対抗戦まであと一日

つまり前田だが・・・

これと行った訓練はしていない

いや、一応訓練なのだろう・・・

IS装備の鬼「」をしていた・・・

遡るにと一時間ほど前のIS実戦訓練の時・・・

「新城、専用機の武装レポートを見せて貰つたが近接武器がなく装備が一つだけだな」

「えつ、知らなかつたんですか？」

普通、生徒の機体は調べておくもんじやないの？
そんな疑問を浮かべるが・・・

「あくまでここはISについて教え、訓練する学校だ

専用機持ちのデータは基本的に各代表とその担当整備に本国の者だけだ」

そうですか・・・

それしか言えなかつた・・・

「で、後付け装備で近接武器でもつける気はないのか?」

確かにあつたら乐だらう

しかし、断る

だつて・・・・・

(近距離に現れた敵をスナイパーライフルで倒すつてカッコいいじ
ゃん!

シユーティングゲームで俗に言つクイックショット
マジでカッコ良かつたんだ!)

それは憧れであり目標だつたのだ

「自分の武器はコイツだけです

距離は詰めさせませんし、詰められてもコイツで倒します」

愛銃である「96Aを撫でながら強く答える

「ほつ・・・・言い切るか

面白い・・・

全員、集合!」

千冬の掛け声で各自訓練に励んでいた生徒が集まる
なぜだらう・・・胸騒ぎがする

「今から午後のエス基本動作のテストをするつもりだったが、やめにする」

それを聞いたクラスメートは嬉しさ声をあげる
なぜだらつ・・・素直に喜べない

「それにたまには趣向の変わった訓練もありだと思つしな

今回は新城のクラス対抗戦対策訓練も兼ねて
対射撃エスに対してもう懐に入るかを訓練してもう

なぜだらつ・・・とても逃げ出したくなつてくれる

「そうだな・・・褒美もあつたほうがいいだらつ
もし、勝つた者には単位を一つくらいくれてやる」

ナンデスカ、ソノ、ホウビハ

「訓練内容は簡単だ

新城、お前は逃げ切り
妨害を兼ねた攻撃もありだ

そして織斑とオルツット

他の者は今ある訓練機二機を交代しながら回して使え
その計四機は攻撃をするな
防御や回避は許可する
とにかく新城に『触れる』
その時点で新城の負けが確定する

だが、新城自身による攻撃・・・蹴りなどで触れたのは判定に入らん

自分から触れたのを判定とする

つまり、鬼ごっこだ

勝つたほうに単位一つくれてやるわ」「ひふ

ワアアアと歓声をあげる

見れば一夏やセシリ亞もやるみたいだ

「近接武器しかない白式には良い訓練になるな

「司さん、私たちティアーズが必ず捕まえますわ！」

「ティアーズありかよ！？」

「一応機体の一部だしな
問題ないだろ？」「

千冬の容赦ない回答に俺はガックリ膝を着き、オーラになってしまつ

しかし、もはや避ける余地なし

司は諦め、気持ちを切り替え、瞬時にリクルアを起動させる

「もついい・・・とことん逃げ切つてやる！

俺が勝つたら、俺以外ここにいる全員に一個ずつ食堂で奢つてもら

うからな！

もちろん、織斑先生もな！」

多分、自棄になつていたんだろう
この時の自分・・・

「なつ！？」

ルールで褒美は単位と言つたろ？！

それに、お前はこの私に奢りせるとはいひ度胸だなー！？」

「先生が鬼側のルール決めたんならただ一人の逃げる側のルールく
らい少しば決めさせて下さいよ！」

嫌なら先生自身、打鉄で出ればいいじゃないですか！」

「私が出ると訓練にならんだろう！」

この時の自分に会えるなら間違いなく、容赦なく、確実に殺してい
るだろう

この時の自分は頭がトチ狂つていたみたいだ

「あれ？ 織斑先生

たかが生徒を捕まえる自信ないんですか？
これなら、自分はこの鬼ごっこ、楽勝ですね～

もしこれが許される行為なら俺は勇者だと思つ

なんせあの鬼教官こと世界一の称号を持つ織斑千冬を『挑発』した
のだから

「・・・・・・どけ、小娘

あの雑魚を漬してきてやる」

「はつ、はい、ただいま！」

脱兎の『』とく打鉄を譲る女子生徒
見ればガタガタと震えていた

「一夏、オルコット

足は引っ張るなよ？」

「「はいっ！」「

背には般若の姿が見える千冬に即答する一人
専用機持ちが形無しである

そして始まつて一時間・・・

範囲は校舎敷地ない

今は学園にある公園の林の中に草木に紛れ、隠れている

機体が縁のため、さらに分かりにくい
身を潜めているセンサーに反応

そのまま近くまで来るのは一夏だつた

照準は合わせず、銃口だけ向けておく

「そのまま通り過ぎて行つてくれ・・・」

一夏が田前20メートル先を通り過ぎて・・・行つた

「ふう・・・と、一息ついた瞬間、

「あ、新城君発見！」

右を見れば打鉄を身に纏つたクラスメートの一ーナという少女が・・

・

「ちくしょう！」

緊急点火でフルブースト状態にし、緊急離脱
当然、機体性能差で距離は開くが・・・

「司、どこにいたんだよ！？」

左側から戻ってきた一夏が迫っていた

急いで方向転換し、低空で飛び続け、後ろ斜め上を飛んでいる一夏
に銃口を向ける

「隠れてたんだよ！」

そのまま一夏に照準を定めないまま散弾式の弾を五発放つ
散弾ならあわせなくとも当たるだろ？・・・

「うお！？危ねえ！」

さすがスピード型

バレルロールしながら簡単に避けられた

しかし、単純な一夏だ

避けることに考えが一杯だらう

第1アリーナの建物の角を曲がった瞬間

ダブルイグニッシュンブースト
一連瞬時加速

一度目でアリーナの上に

「一度田にアリーナの中へ

そこには山田先生が他のクラス……いや、見たことある顔に知っている専用機を発見し、一組だとわかった

「新城君！？」

学園内でのH-S起動は校則違反ですよー。」

「織斑先生が許可した訓練中なので問題なしですー。」

「あ、やつですか……」

「ちよっと休ませて下せ……邪魔にならなことひい端つこで
るんで

「昼休み終了からずっと動きっぱなしなんで……」

「やうですか……

それくらいなり」

山田先生がそつぱつたあと、H-S起動を向けてる鎌に山田元気を任せると

(めつちや睨んどるし……

けど、とつあえず休む)

機体を着陸しようと降下していく

しかし・・・休む暇はなかつた

「新城おおおおう！」

「げつ、織斑先生かよー。」

オープンチャンネルから開かれた怒声にすぐさまブーストに火をつける

見れば山田先生や鈴を含めた二組全体は縮こまっている
織斑先生・・・雰囲気が火山のように燃え上がり、目付きが視線だけでは殺せそうな目である

髪の毛が角のように尖つてるのは氣のせいだらうか・・・

「死ねつー！」

「それが教師の言つ」とおおーー？

つーか、それ攻撃じゃねえか！？

「武器も機体の一部だ！」

なんといつ屁理屈

そう思いながらも足のブーストが火を吹き、機体が右にずれる

そして打鉄だと言つのに瞬時加速で一気に距離を詰め、近接ブレードを振り下ろすとこを聞一髪で避ける
しかし、すかさず逆袈裟切りで刃を返してくる

が・・・、同も負けていない

避けた先を狙つてきてる刃を瞬時加速で離脱
お返しとばかりに装填した拡散弾を五発連発しながら後退

弾一つに三発の爆弾で計十五発の爆弾で爆風に巻き込まれる千冬

そのまま爆風の中心に煙幕を撃つ

「すみません、お邪魔しました」

ペロリと礼をした後すぐさま旋回し、瞬時加速で一気に離れる

じぱりくして、煙が千冬の振った近接ブレードで払われる

山田先生はオロオロしながらも千冬に近づく

「あ、あの・・・織斑先生、大丈夫ですか？」

心配する山田先生は下を向いてる千冬の顔を覗き込んだ瞬間
ビクリと体を振るさせ、硬直する

「フフフ・・・やるじゃないか新城
殺りがいがある・・・フハハハ！」

そのまま飛び去る変わりきつた千冬

一組の生徒は山田先生の元に行く

「山田先生、大丈夫？」

一人の生徒がそっと声を掛けるとぶわっと涙を溜めた山田先生はその立場を忘れ、生徒に抱きつく

「うえ〜ん、怖かったよ〜〜！」

子供のように泣き叫ぶ山田先生
だが、誰も咎めなかつた

見た目魔王様は誰だつて怖いものだ

「クソツッ！」

第一アリーナから屋外プール場に向かつた瞬間セシリ亞に鉢合せた新城は田まぐるしい動きでティアーズの攻撃で避けていた

「避けないでくれません！？」

「無茶言つな！」

先程から瞬時加速を結構使っている

シールドエネルギーは神様仕様と言えど、すでに1／3になっていた

（瞬時加速は使えない・・・タイムリミットの六限終了までは・・・）

モニターの用意しておいたタイマーを見る

残り15・5分

（一夏、セシリ亞、千冬さんの機体は補給なしだが、もう一つのクラス用打鉄が交代毎に補給
千冬さんはさつきダメージを負わせたからいいけど・・・問題はあまり使わせてない一夏がセシリ亞と合流した時が一番マズイ・・・）

ティアーズは援護面なら素晴らしい援護兵器だらつ

そこにスピード型の一夏は最悪だ
シールドエネルギーが持つかわからない・・・

そう考えながらもなんとかティアーズの突進を避けていく

時々、セシリ亞に隙を見て彼女自身狙つて狙い撃つが簡単に避けられる

やはり平行処理がまだできないようで避けた時、

ティアーズは止まるが避け終わつた後のティアーズを操作するまでのタイムラグが短い

さすが代表候補生

敗北から学んだ成長速度が速い

「当たりなさい！」

「無理だ！」

このままできるだけ避け続け、ブルー・ティアーズのシールドエネ
ルギーを消費させていく

しかし、状況はそうさせてくれなくなつた

「スマン、遅くなつた！」

「つか！最後の最後で箒かよ！」

打鉄を身につけた箒はそのままティアーズと共に自分に触れまいと突進してくる

残り7分・・・

「墜ちろおー！」

「追い付くのは早すぎだろ！」

さらにも千冬が加わる

ティアーズを蹴り飛ばし、瞬時加速で急降下
そのまま、すかさず箒を狙撃で吹き飛ばす

千冬も残り少ないシールドエネルギーを瞬時加速に使えない

四人の攻防は再び仕切り直す

「やつと見つけた！」

そこに更に一夏が加わった

見ればいつのまにかクラスの女子がギャラリーになっていた

「残り2分ちょいで全員集合かよ・・・」

「運がこちらに傾いたな
一夏、オル「ツト、篠ノ乃
負けたら許さん、勝つぞ」

「　　はいっー。」

負けたらどうなるか三人の表情はもはや背水の陣だ

「ひつやあ、怖いな」

ゆっくりと銃口を向ける

ここまで来たらもはや逃げるのは格好的

全部避けて、防ぎ切る！

装填——特殊散弾

イメージした散弾をマガジンに詰める

そしてタイマーが1分半を切った瞬間

カチリと引き金を引いた瞬間、ショットガンのようすに銃口からバラバラの黒い小さな塊が放出される

五人は動いた

飛距離はあまりなく、そのまま前方全域に漂うだけだが・・・

「マズイ・ビットを戻せ、オルコット！
一夏もそこを離脱しない！」

経験からすぐに気づいた千冬の警笛はすでに遅く、真つ先に真つ正面から来た一夏とティアーズはその黒い塊を避けながら進んでいたが・・・

「残念、ボカン！」

突如、黒い塊が爆発

そのままティアーズと一夏は爆風に巻き込まれる

出鼻を挫かれた二人

その間に左から回り込んだ篝が迫る

「ここの間合いなら狙撃銃は使えまい！」

確かに普通ならな・・・

だが、

「こんなだけ近けりやあ、照準合わせなくとも当たるわー！」

初弾を撃ったあとすぐにマガジンを変えておいた対エサ用通常弾を片手だけで構え、撃つ

神様仕様の反動なしだからこそできるのだ

反動があつたら左のマニュピレーターがイカれてるだろ？

狙撃銃の零距離発射は絶大だ

右肩に当たり、装甲を吹き飛ばし、バランスを崩させた
そこですかさず弔の左腕を持つと前に引き、背負い投げ

弔は眼下のプールに叩きつけられた

「後ろ、取りましたわ！」

背後からセシリアがいることに気付き、残りわずかなシールドエネルギーを少し使い、一瞬的な瞬時加速で下降

そこには回り込んでいた千冬がいた

「いつまでシールドエネルギー持つんだ！？」

「あいにく、あと一振り分はあるのでな

見れば両足のスラスターしか出していない
完全な待ち伏せ迎撃だ

もはや目前

振りあげられる近接ブレード

銃の右側面のシールドでガードするが、さすが世界一
ガードしても体制が少し崩れながらも、プールに叩きつけられない
ようなんとか機体制御した

そこに・・・

「貰つたあああー！」

瞬時加速で肉薄する一夏

千冬は囮だつたんだらう

だが、残り少ないシールドエネルギーを出しきる

タイマーはもはや一〇秒切つていた

「セセるかああー！」

「ぶわつぶーー？」

男の意地を見せ、体を捻りブーストを最大出力にして、バク転のようの一回転

ブーストの勢いによつてプールの水が押し退けられ、水飛沫が上がり、一夏は水の壁に飲み込まれた

だが、ここで自分の運は切れた

シールドエネルギーが切れてしまい、ISGが強制解除

「マジかよーー？」

そのままプールに向かつて落ちていくが・・・

「えつ？」

落下地点にはちょうど水面から顔を出し、ポカソンとした表情でこちらを見上げていた筈と田が合ひ

そして一人はそのまま正面からぶつかり水飛沫がふきあがる

そして同時に六限終了のチャイムがなった

慌てて千冬が確認しに行くとそのぶつかつた一人を見るなり、ため息を漏らす

そこには筈の胸に顔を埋めている司の姿が・・・

「・・・早く離れておけ

どうせ、そいつは気絶してるんだろう?

お前が保健室に運んでおけ

ああ、H.Rは出なくていいぞ」

「は、はい・・・」

返事にこしたもののは筈の表情は赤い・・・

「よし、これにて訓練は終了する!

各自、教室に戻れ!

私と篠ノ乃は訓練機を返しに行き、気絶してゐる新城を保健室に運ぶ
静かにして待つよう

「元気よ

千冬の指示に早々と帰つていく

もはや千冬の指示には誰もが従う

この訓練でわからされたのだろう
怒らせた千冬の怖さが・・・

千冬も専用機持ち二人を連れ、戻つて行き、残された筈も・・・

「む・・・意外に軽いほうか?」

プールから出て、司を背負いながら保健室に向かう

訓練で筋肉がついてるのだ

司一人くらい背負つのは問題ないようだ

そのまま一人はゆっくり保健室に向かつて行つた

プロジェクトが立ちました（前編）

展開が早いかもしれません……」
つきます

「ロジヒーリング」しました

「ふう、ついた……」

篝は誰もいなかつたため、勝手に司をベッドに寝かせた
そこで改めて司の顔を覗くと再び恥ずかしさが吹き返す

(ハハ・・・あんなことになるなんて)

あの瞬間、二人はぶつかりそうになつた

しかし、篝はすぐさま受け止めるようにエスから両腕をページし、
腕を広げ受け止めた

後ろに倒れ、水飛沫をあげながらも、衝撃はエスによつて緩和され
ていた

しかし司の勢いは緩和されず、彼は頭を篝の胸に陥没させ、氣を失
つたのだ

それからとくもの篝は終始、顔が赤い

「改めて見ると意外に綺麗だな……」

まじまじと司の顔を覗き込む篝

意外にも髪が長く、触れば女性のよつて柔らかい
黒い髪はその長髪に映えている

端正な顔立ちはワイルドな一夏とは違つて美人のようだ……

つい頬に触れてしまふ手

陶器のように白い肌が羨ましく思えてしまう……

「つて、私は何をやつているんだ！？」

慌てて手を引つ込め、自重する篠

「恋人でもなんでもないのに……恋人？」

先ほどの行為は恋人のようなシーンにも見える
そこで自問自答する

（なぜ私は無意識にあんな行為を？

私には一夏が・・それにいつも司が手伝つて・・・）

そう・・・いつも司が手伝つてくれていた

きつかけも同居も細やかな気配りも

田で追つていいく度に田が会えば笑顔を向けてくれていた

自分が困れば、助け舟

食堂で一夏がいないときの人混みに巻き込まれそうになつたら手を

引いてくれたりと

頼りになるとこは多くあった

一夏は気づいてなかつたが一夏に話しかけようとした女子を司が相手をし、一人つきりにしてくれることもあった

そして気づいたのであつた

(・・・一夏ようじ気にしてる?)

なんでこんなに司の行為に気づいてるんだ?)

（これでよしあく自分のことがわかつたらしく）

一夏よしも司のまつに意識が向いている」と(・・・

（こつも気づいてくれない鈍感一夏と一緒になつて手伝ってくれる司

そつ思ひと同のまづが魅力的だ・・・

バスタオル姿を見せても自分の好意に気づかない男だしな、一夏は

・・・

普通だつたら間違いなく意識しない男はいないはずだ

なんの関係もない女子がバスタオル姿を見せるのだ

それで意識しないのは男として恥ではないのだらうか・・・

自分の幼なじみながらも馬鹿らしく思えてきた

だが、司は意識してくれるだろ？

そつ思つて いると彼が目を開けたのに気づく

「 こゝは・・・ 篓か？」

「 ああ、お前が気絶したから保健室まで運んだんだ

身体は大丈夫か？」

「 ああ、問題ない

疲れ過ぎて気を失ったみたいだ

簾にぶつかる瞬間に氣を失つたみたいだが・・ 篓こそ大丈夫か？」

「 ああ、IHGが保護してくれてな・・」

「 そうか・・けど、ゴメンな
ここまで運んでくれて・・・
お礼したいんだが、なんがあるか？」

苦笑しながらそつと言つて

(・・・自分の気持ちを確かめてみよう)

「 司、動かないでくれよ？」

「 えつ？――うわつ！？」

答える暇もなく司に抱きつく

伝わるのは人間の体温と高い心臓の音、心地好い司の匂い

(ああ・・・私は司が好きなのだな・・・)

「あ、あの篠さん?

「これは一体どうこいつ」とかな?」

顔を赤くしながらも引きつづいてる笑顔の司に私は意地悪い笑みを浮かべる

「好きでもない男にこんな」とするわけなかろう

「えっと異性としてと受けようとしたらとても魅力的ですが・・・」

「異性としてだ」

司が「クク」と息を呑む音が聞こえた

「一夏のことは?」

「あそこまで鈍感だとな・・・アイツに取つて私は幼なじみ止まりなんだらう・・・うとしが思えんのだ」

「まあ、以上に鈍感かもしくは興味がないのかどちらかだもんな・・・

けど、なんで俺なんだ?」

「最初はもううん一夏が好きだったさ

久しぶりに見たアイツは背が高くなつて逞しさい一夏は格好よかつたさ

しかし、いくらアピールしても気づいてくれないのだ

同居してゐにも関わらず何もしてくれない

わざとバスタオル姿でベッドに座つてもだぞ？

少しくらい意識して欲しいものだ！

「・・・アイツ、どんだけよ

同じ男としてたぶんどうかと思つぞ？」

「やうなのか？」

「俺だつたら意識せざる得ない
つか、普通意識するだろ？」

「・・・私はそんなに魅力がないだろ？」「

そこまで言わると自信なくしてしまう・・・

「あ、けど篱は凄く美人だと思つぞ！－

アイツがおかしいだけで俺からすれば十分魅力的だつて！

料理もできるし、強いし、なんだかんだで面倒見がいいしな

正直、篠は可愛いし、告白をめでちや嬉しい

けど、その時間、くれない？
いきなりすぎてさ・・・」

確かにいきなりすぎか・・・好きな男のアタックを手伝つてのが手伝つて貰つた男が好きになつてしまつたのだから

「こくらでも待つと
ただ早めに頼むぞ？」

私はそりに残して、保健室を出していく

(「言つた！
言つてしまつたあ！」)

荷物を纏め、すぐさま自室に戻り、枕を抱きしめながら「ロロロロ」と回る

顔が凄く熱い

「振りられたたら友として接しよう！」

潔く叫んだ筈は高らかに拳を突き上げた

プロジェクトを始めた（後書き）

今思つとセシリ亞とか一夏に出合つた次の日には好きになつてたし、
篇が一ヶ月経つて好きになるのも不思議はないかと

気づいた自身の想い（前書き）

短いです

気づいた自身の想い

……………アハツ

篇が去つたあと、同はニヤニヤが止まらなかつた

「ヤベー、人生初だわ
告白されたの……」

前の人生では学校の休み時間にはラノベを……
昼休みや放課後にはエアガンを……

休日にはオンラインショーティングゲームを……
などとミリタリーオタク扱いにより、顔はそれなりによくてもモテ
ていなかつたのだ

そんな自分が学園に入学して一ヶ月経ち、まさかの物語のヒロイン
から告白されるとは……

「確かにさ……篇はメインヒロインだけど一番人気なかつたさ
それでも美人だし、料理できるし、照れ隠しが過激でちょっと自分
勝手などいはあるよ

けど、優しいし、気遣ってくれるし、慌てるところとか可愛いし……
・つて、アレ?」

改めて彼女を評価してみて気づく

「・・・俺、かなり見てるやん」

そう、彼女自身をかなり見ていた

無意識に追っていたようだ

彼女の姿を・・・

いつからだろう、彼女を見ていたのは

彼女を気にするようになったのは

一夏への恋の手伝いとか言いながら彼女と話す口実を作っていたの
かもしれない・・・

「恋つて急なもんだな・・・」

恋―――

一日惚れから長い時間をかけて気づいたりなどいろんな出会いがあるものだ

言葉や文字にして伝えたり、伝えられたりしないこと気づかないと

だつてある

いろんなきつかけで恋の出会いは訪れるものだ

「・・・そりだな、鈴に勝つたらこの気持ちを伝えよ
一夏のハーレムイベント崩壊なんて上等だ
あんな鈍感野郎から籌は奪つてやる」

俺は高らかに打倒、鈴を保健室で宣言した

気づいた自身の想い（後書き）

某イラストサイトでエラヒロインの纂、セシリ亞、鈴、シャル、ラウラ、更織姉妹どれくらい作品があるか調べてみた

結果
1位 シャル 2735作品
2位 ラウラ 1537作品
3位 セシリ亞 1328作品
4位 鈴 988作品
5位 篲 898作品
6位 更織姉妹 100以下

つてことでメインヒロイン纂があまり人気がなくシャルが他ヒロインの倍近くの人気さ

もちろん作者もシャル好きですから、この物語でもシャルはメインになるでしょう

以上、後書きでした

銃フルボック（前書き）

近距離専門のスナイパーライフルって、全距離型ショットガンだ
と思つ

鉢フルボッコ

そして試合当日・・・

小説で説明されたが改めて実際見ると壮絶である

(オリンピック選手とかこんな雰囲気を感じてるんだうつな)

緊張感が最高潮だが、悪い気はしない

なぜかワクワクしていた

そしてビットには・・・

「新城、負けたら貴様は問答無用で赤点な」

「ちよつ！？」

織斑先生、それ酷くないッスか？」

「フンッ、冗談だ

この私のクラスの代表だ
勝つて来い」

「当然ッス」

千冬に「クリと頷き、

「司一必ず勝てよー」

「おう、男同士の約束だ」
一夏には親指を立てた拳を向け、

「負けたら、許しませんわ！
同じ狙撃手として必ず勝つてくださいー。」

「ああ、狙撃手の意地を見せてやるぜ」

セシリ亞に「96Aをコツコツと叩きながら笑顔を向ける

「司、必ず勝つて帰つて来い
私は勝つて帰つて来ない限り、迎えてやらん」

「ハハ、こりゃマジで頑張るかな

試合終わつたら改めて話すぞ」

笄の頭を撫でてやつたあと、俺はビックリの外を向く

「じゃあ、行つてくれるー。」

そつ言い残し、スラスターの火を吹かして、発進した

そして二人を見た残り組はといふと・・・
「ほう・・・」

「あわわわ・・・

「まあ・・・」

千冬と真耶とセシリアはその雰囲気に息を呑む

「篠ノ介、昨日の今田で奴に惚れたか?」

「なつ!?

ち、違います!」

千冬の言葉に顔を真っ赤にする篠
しかし、普通そこを否定するだらうか・・・

「けど、篠さんは彼が好きだったのでは?」

セシリアの問いに篠は一度、一夏を見るが・・・

「ここまで経つても、何をしても気づかないでアイツが好きにな
りました!

嘘、偽りはありません!」

隠すことはせず、堂々と立てる篠

そこが篠らしいのだらう

そんな篠に一夏はこう

「篠が誰か好きになったのか?」

「　　」

わかつて いたが、呆れた眼差しを向ける四人

「あはは、これは諦めたくもなりますね・・・」

「我が弟ながらも情けない・・・」

「幼なじみでありますながらも、まだに氣づかないか・・・」

「馬に蹴られればいいですわ!」

一夏の鋭感では底なしのチート級な強さだった

場所は代わり、アリーナ中心

「フンッ、逃げずによく来たわね」

「ああ、やつやあ勝てる試合を逃げるほど愚かじやないからな」

「相変わらず減らす口ね

その減らず口が一度と聞けないよつに潰してあげるわ」

また「買ひ言葉に売り言葉

そんな二人である

「言つとくナビエの防御も絶対じゃないのよ？
本体にダメージだつて与えることができるわ」

「んなもん、知つてるわ

だが、宣言してやる

お前の攻撃は当たらない

笑つたことは謝るからそんなに煽るなよ

負けた時に慘めだぜ？」

そつ言いながら俺はゆっくりとブースターにチャージをする

「・・・・！」

もう手加減してあげない！

無惨に潰れなさいよ！」

鈴は青竜刀のような近接武器・・・『双天牙円』を器用回転させ、
キヤッチする

互いに臨戦体勢に入り・・・

「ビッシュ！」

そして試合開始のブザーがなった瞬間、両者は動いた

鈴は一瞬で距離を詰め、両手の双天牙刃をおもいっきり降り下ろす

が――そこにはすでに咲はいない

「なつー…ビッシュー…」

鈴は慌ててハイパー・センサーを頬りに探す

しかし、その一瞬止まつた動きによつて鈴は背中から地面に吹き飛ばされた

「つたああー！」

「休む暇ねえぞ」

「つづー！」

地面に仰向けに倒れた鈴はその言葉に慌てて起き上がる

バク転のように一回転して、そこを離れながら起き上がるがすぐ足元が爆発し、足に当たった爆風がシールドエネルギーを削る

司が使つたのは衝爆弾

着弾した衝撃により、爆発を起こす弾だ

「やつてくれたわね！」

鈴は空中にいる間に衝撃砲——龍砲を向ける

「つづー!?

わかつていたが、こりゃあ厄介だな

「初見で防ぐなんてやるじやない
けど、まだまだ！」

銃のシールド部分で防いだが一瞬方向が光った瞬間にはすでに弾丸
は届いている

ブースターを吹かしてその見えない弾丸を避け続ける

「言つとくけどこの『甲龍』は安定性と燃費を目的とした機体よ！
いぐり弾を打つたってさほゞシールドエネルギーは減らないわよー。」

「（J）—寧（ひびき）説明（さつきもー）！」

両肩の砲口を交互にぶつ放してゐる鈴に右手だけで銃口を向け、だいたいの標準だけ合わせると引き金を引く、引く、引く

撃つたのは拡散弾

爆風が鈴を巻き込み砲撃が止む

そこで再びマガジンを再装填

「さつきから！」

あんたは爆弾魔か！？』

「いや、狙撃手だ！」

爆風が晴れ、そこから見えた砲口に狙いを定める

「入れ！」

そう祈りながらも引き金を引く

弾は貫通弾

チュイン！

そんな感じの音が響くと鈴の目の前にモニターからエラー表示が出る

『右側非固定浮遊部位損傷——— 使用不可』

「なんで！？」

鈴はその場から立ち退きながらも詳細画面から損傷内容を見ると・・

「嘘・・・HSの装甲を貫通するなんて！」

「対HS用貫通弾だからな！」

砲口から侵入した貫通弾はそのまま砲身を貫通し、風穴を開けた
当然、砲身に穴が開けば圧縮するはず空気がその穴から漏れ、砲身
が砲身の機能をしなくなるはずだ

「ああ、ついでにもう一トー！」

「やうせむもんですか！」

撃たれた弾を紙一重で避けた鈴はそのまま左肩の龍砲を連射しながら一気に近づく

さすが代表候補生というべきか

損傷しても攻めての勢いは衰えていない

「距離は離させないわよ！」

氣迫じみた龍砲のラッシュをガードしながらも司は冷静にマガジン
を変更

対IDS用通常弾

そして肉薄した鈴は、ハルバードのように連結した双天牙月を左に
横一閃にして振り抜く

しかし司はそれをしゃがんで回避

だが、鈴も間髪入れずに切り離した双天牙月を持った左手を返し刃
のように再び横に振り抜く

それを右手に持つた「96Aのシールドでガード

そこで司は笑みを浮かべた

「なあ、狙撃銃が普通の銃と違つて遠くまで弾の威力を落とさず」
撃てるってことはさ
初速の速さが半端ない威力つてことだよな
そんな初速を食らつたらどうなる?」

「まさか!?
こんな間合いで!?」

気づいた鈴は遅い

ギリギリとシールドを押し返そつとしていた双天牙月の力が驚きで
緩んだ瞬間
司は鈴の腹を蹴りあげる

そして体勢を崩した目前の鈴に銃口を当てる

「One shot One kill!」

この一発で完全に勝敗を決めるつもり引き金を引いた
そのままドン!と吹き飛ばされる鈴

爆発に爆風、龍砲の損傷、機動や攻撃に割いた割合、そして零距離
狙撃
十分シールドエネルギーは減っているだろ?

対して司は、攻撃をほぼ避けるかシールドで防御しているし、試合開始時の瞬時加速以外シールドエネルギーを消費していないため残りは2000ちょいもある

一夏のよくなシールドエネルギーを直接奪える武器がない限り、逆転はないだろ？・・・

そう決着がついた瞬間

ズドオオオン！

そんな龍砲とは桁違いの衝撃音とともにアリーナ中央に『フルスキン全身装甲』のISが出現する

「やつとおいでなすつたか
悪かつたな、一夏じゃなくて」

司は銃口のマガジンをセットしながら呟く

するとプライベート・チャンネルから鈴の声が聞こえた

「早く逃げなさいよー！」

そんな言葉を聞いた司はため息をついた

「（女尊男卑はここまで女が強くなるわけか）
シールドエネルギーが500もないんだろ？
なら、邪魔だから退いてろ」

「なつ・・・

あ、あんただつてどうせないんでしょー。」

「悪いな・・・

こつちはまだ2000オーバーあるわ

だから速攻殺られるくらご・・・ついいい!?

司はふと敵EISを見た瞬間慌てて一連瞬時加速をし、こつちを睨んでる彼女を抱えて、ピット付近まで回避する

「何するのよ!?

放しなさい!」

「わかってる、チビ」

ポイッと放り捨てるように離してみると

再び何か文句を言つてゐる

「うるさいな、助けてやったんだから感謝しろよ・・・
お前がいた場所見てみろよ」

そう言われ、仕方なく撃たれた場所を見た鈴はゾッとした

大出力のビームにより、地面が抉れ、赤々と光るほど熱を持っていた

「ついで、お前はここにいる」

そう囁が言つとアリーナ内部に放送が流れる

『鳳さん、新城君、今すぐアピットに逃げてください！
そこが一番早く解除されます！』

真耶の声だ

当然これが来ることはわかっていた司

「確かに僕や鈴の火力じゃ相手を倒せませんが時間稼ぎくらいで
ます！

なんたつて織斑先生の攻撃すら避けられましたし
それに上からの友の援護期待しますし」

『しかし・・・』

そこで放送が途切れ
たぶん千冬が切ったのだろう

「さて、主人公が来るまで相手してくれよ」

威力を落とした通常弾をセット

「コイツの右腕があるかぎり俺の弾は意味がないし、コイツは一夏が
相手をしないと意味がないのだ

司は相手の注意を惹き付けるように相手を標準に合わせ、引き金を
引いた

想いを伝えて・・・(前書き)

ちょいとベタかも知れませんが・・・

想いを伝えて・・・

「やはりアイツは才能が凄いな・・・」

「どういってます?」

モニターから映る間に千冬は納得するように頷く

「射撃の位置取りと避けるタイミングの良さだ

山田先生は射撃武器を使つてるな?

なら、撃つ時に一零停止で標準を合わせてるだろ?~

アイツはその停止のタイミングに合わせて回避運動を取つてゐる

「ええつ!~?

そんなタイミングわかるものですか!~?」

「そこは駆け引きの上手さと視線の動きだろ?~

人間は目標を直視で見る癖があるからな

だが、それが回避に使えば自分のアドバンテージは限りなく上がる
私が雪片だけで世界一になったのがいい例だろ?~

「それが新城君の強さですか・・・」

真耶はモニターの画面を見ながら呟く

敵IISのビームは「じ」とく外れている

無駄撃ちのように見えるのだ

「だが、なんだ・・・

「つモヤモヤする感覚は・・・」

司のIMSを見る度に何か納得いかない感覚に陥る
そう思いながらもコーヒーに砂糖を入れていくが・・・

「あの・・織斑先生

砂糖何杯入れる気ですか?」

「・・・ムツ」

「コーヒー カップを見ればそこには砂糖により体積がかなり増えたコ
ーヒーが・・・
しかし千冬は問答無用で混ぜていく・・・混ぜたことによりゲル状
のコーヒーの完成である
そして、それを無表情で山田先生に差し出した

「どうぞ、山田先生

糖分摂取は疲れた身体にいいです」

「いや、遠慮しておきます・・・」

「そう言わずに、一気に飲んだほうがいいですよ」

「すみません、自分の飲み物取つて来ます!」

普段からは信じられない俊敏さで逃げる真耶

残された千冬は・・・覚悟して飲みきった

「・・・しばらく甘い物はいらんな」

胸焼けしていた千冬である・・・

「まだか・・・」

「こちらに砲口が向き、砲身内部が臨界する

司はそれを一拍おいて右に回避

その瞬間、回避したのと同時にビームが撃たれるが司には当たらない

するとアリーナに一つの影が映る

「お待たせしましたわ！」

「大丈夫か、司！」

一夏の白式、セシリ亞のブルー・ティアーズが現れたのだ

「やつとか・・・」

司はほつと一息をつく

今まで回避に専念していたのはこのためだつたのだから直ぐに3人に指示を出す

「鈴！こっちに来い！」

ピット付近で大氣していた鈴が不機嫌そうな顔でやつてくる

「何よ、私が役に立たないんでしょ」

完全に不貞腐れている

「馬鹿いうな、やつと大砲の弾が来たつつのに砲身がその仕事を放り投げ出すな

いいから聞け

「どうこうひとよ・・・」

鈴がしじぶしじぶ従うのを確認した司は直ぐ様指示をする

「一夏は瞬時加速を全力で奴に近づき、全力の零落白夜を使って奴の右腕を落とせ

奴の遮断シールドを破壊できるのはシールドエネルギー関係なく攻撃できるお前だけだ」

「けど、全力の零落白夜はっ・・・！」

「安心しろ、さつきセンサーで確認したが奴は無人機だ」

「そりか・・なら安心して殺れる」

一夏はニッヒと笑う

対IIS戦では全力でやれなかつた零落白夜を使えるのだと自信はあるのだろう

「でだ、鈴は一夏が瞬時加速する時に残りのシールドエネルギー使い切つて龍砲を一夏のブースターに叩き込め」

「なつ！？」

「仲間を撃てつつづの！？」

「違うわ、馬鹿

一夏なら瞬時加速の構造、今すぐ言えるだろ？」

「ああ、瞬時加速は

一度出したエネルギーを再び吸収・圧縮してその放出したエネルギーで加速

つて、なるほど！

だから鈴の龍砲か！」

「そりか」と

「？」

セシリ亞と鈴はまだわかつていないようだ

「つまり瞬時加速の吸収するエネルギーは外部エネルギーでもいいつてことだ

で、外部エネルギーが鈴の龍砲つてこと」

一 夏の説明に納得する二人

「で、一夏が右腕を落とし、奴の右腕にある遮断シールドを止めたところを俺とセシリ亞の射撃で動きを止め――――」

そこまで言つたところで声が大音量による声に遮られた

「司――

それくらいの敵くらい早く倒せ――

放送室からの幕の声

反応しなければよかつたものの・・・

それに敵IJAが反応したようで右腕を放送室に向ける

「あー、クソつ――

なんでのイベント忘れてたんだ!

一 夏、鈴――今すぐやれ――

司はさつと直ぐ様瞬時加速をし、彼女の元に急ぐ

「ツチ、原作は撃たなかつたらうが！」

司は舌打ちしながらも敵ヒヒの右腕を見ると、その砲身は既に臨界している

「聞こへえええ！」

司が叫ぶのと同時に撃たれる

紙一重で放送室の前に立つた司は「96Aの盾を構え、放送室を守る

「一夏あああ！」

「つまおおー！」

司の呼び掛けに答えるかのように一夏の大出力の零落白夜が奴の右腕を落とし、セシリアのティアーズが奴の頭、両足、左腕を撃ち抜く

「終わつたか・・・」

ビームに耐えきつ、ボロボロの装甲を纏つた司はソード意識を失つた

「うう・・・」

「目が覚めたか」

意識が戻り、辺りを見れば保健室というのがわかつた
身体を起こせば全身に痛みが走る

そして傍らにいるのは腕を組んだ千冬がいる

「機体損失レベルCに全身が筋肉の疲労と炎症を起こしている
しばらくはEIS実装訓練禁止だ

よくあの馬鹿娘を守りきったな」

「ハハハ・・・」

乾いた笑い声をあげる同

馬鹿娘とはきっと籌だろう

この様子だとかなり説教されたみたいだ

「まあ、好きな人が守りきれたんなら後悔はしてませんよ」

「つたく、一夏にもその甲斐性を分けてやりたいくらいだな

「アハハ、アイツは男じゃ特殊ですもんね〜」

千冬のため息に笑いながら同意する

まあ、その鈍感さで 笈をもらつた同なのだが・・・

「それでは私は仕事があるから戻るぞ
お前はそのまま部屋に戻つていいからな

それと・・・明日くらいなら休んでも何も言わん」

そう言い残して言った千冬は保健室から出ていき、入れ替わりに 笈
が入つて来た

「まあ、立つてないで座つたらどうだ?」

「う、うむ」

うつむきながら椅子に座る 笈
どこか元気がなさそくに見える

互いに沈黙する中、司から切り出す

「なあ、 笈

俺はお前を守り切れて後悔しないし、怒ってもないぞ？」

「えつ・・・」

呆然とする篠

しかし、構わず続ける司

「今は女尊男卑の世界だから分かりにくいが、昔は男が女をするのは当然だったる？」

俺はそれが当然だったし、その考えは今も捨ててない

だから篠を守れたことに後悔はないわ

それに好きな女くらいい守らねり

「好きな・・つて！」

それじゃあ・・・」

篠は先ほどの表情から一変

期待の眼差しを向ける

「ああ、お前が好きだ、篠」

「つかつ・・ンムー・・」

答えてやるなり、抱きついた篠を逆に抱き寄せ、その唇を奪つ

ほんのつと甘い匂いと味を感じる司

安心感に包まれ、心地良い温もりを感じる雰

今、このHIS学園で数少ない男子である新城司と篠ノ之雰は繋がつ
た・・・

教師といつもかと・・・（前書き）

こんなリア充いたら死ねばいいのに・・・
とか作りながら思つ

けど作者はこんな糖度が高い話は大好きです

教師としていつかと・・・

ただいま幸せ一杯気分です

あの美少女こと大和撫子のような雰さんがその大きなメロンで腕を
挟みながらも腕を抱きしめ、顔を見れば微笑み顔で返してきます

なんといつ至高の幸せ！

現在、週末の土曜日で学校は休み
というわけで人生初の彼女と共に人生初のデート中というわけである

「そろそろ昼飯でも食うか？」

「やうだな、そうしよ！」

まあ、そんなわけで飲食店を探していると・・・

なんの偶然だろうか

左を向けば五半田食堂があつた

「いこい、一夏の友達の店らしいし入ってみないか？」

「やうなのかな？なら、入つてみよ！」

そして、いざ入つてみれば・・・

「お、一夏・・・」

「司、 篠？！」

噂をすればなんとやら・・・

そこには隅のテーブルで三人仲良く食べている五半田兄妹と一夏がいた

(あー・・・あれか

五半田兄妹が初登場する場面か)

などと脳内T.S.I一巻を開いて確認する司

「紹介するな、 じつちがこの店の子供で兄の五半田弾
それと妹の蘭

で、 じつちの長髪がクラスメートで学園での唯一の男友達の新城司
とさつき話したファースト幼なじみの篠ノ之篠」

「よろしくな

俺と篠はペコリと挨拶するがなぜだらう・・・

五半田兄妹は睨んできていた

「お前もあのヘヴンの人間か・・・羨ましい奴め」

「あなたが篠さん・・・」

二人の言葉に納得・・・

とりあえず沈静化させよう

「えつと蘭さんだよな？」

「その、筈は一夏争奪戦には参加しないぞ？」

「えつ、ホントですか！？」

「ああ、なんせ俺たちけりぬしな」

そして証拠のように筈の腰に腕を回し、抱き寄せる

それを見た蘭はほつとしたように安心し、筈に笑顔を向けた

だが、兄の弾がさりに敵視してきていた

「！」のリア充め
見せつけか！」

それを言われた俺はつい笑みを浮かべる

これが勝者の気持ちか！

などと思うが、まずは沈静化

「間違えるな、真のリア充は俺たちの横にいる！」

「イツはな！」

ここで耳打ちする

蘭に再び火をつけるわけにはいかない

「イギリスの淑女系、中国のシンデレラ系にアタックされているにも
関わらず気づかない

しかも後にはドイツの天然系、フランスの癒し系、ロシアのお姉さん系、日本の内気メガネ系が加わる

それでも気づかない鈍感さだぞ！

だが、友よ

そんなハーレムを受ける変わりに嫉妬という攻撃をISISの攻撃で毎回、受けてみろ？
身が持つか？」

言われた弾は攻撃を受けると「うを想像するとブルフルと震え出す

「いいか？一夏はなリア充といつ我らの敵であるのと同時に救つてやらねばやらんのだ

だからこの钝感に必ず俺が一夏の钝感さが聞かない女を見つけてやる

そうすればお前の妹への心配も減るし、一夏が弟なんて嫌だろ？」

「・・・友よ！..」

ガシッ！と互いに熱い握手を交わす

そして一連の流れを見ていた一夏はとこりと・・・

「そりか、篠にも恋人ができたか
おめでとう、二人とも」

この発言の瞬間、ガタリと篠が立とつとしたが司が押さえる

「篠・・・諦める、コイツは悪意があつて言つたわけじゃない」

今にも殺しそうなほど睨みを利かせる篠を司は必死に抱き寄せて
落ち着かせる

一夏はなぜ篠が怒つているのかわからず戸惑いを見せている

天然、鈍感といつも無意識に人を深く傷つけるものだ

「一夏、俺は時々わざとやつてるかと思つんだ」

「篠さんも好きだったんですね・・・」

五半田兄妹も少しながらも篠に同情したようだ

「篠、飯でも食つて気分を変えよつぜ?
いつもでも気にしてても意味ないし、お前には俺がずっと一緒にいてやる」

「・・・つと」

篝は司の胸に抱きつき、司は篝が落ち着くまで頭を撫でてやる

「弾・・・」の業火野菜炒めと大盛りチャーハンを頼む
一人で食べるから箸とかは二つな？」

「おう、わかつた

一夏、ちょっと席外せ！」

「えつ、なんでだよ！」

「いいから来い！」

弾に連れてかれて席を外す一人

弾は空気を読んだのだろう

一夏がいなくなり、少し落ち着いた篝は司から身体を離す

残された蘭は一人に微笑む

「篝さんは優しい彼氏さんを見つけたんですね
正直、司さんのフォローが羨ましく思いました

一夏さんが最初好きだったんですね？」

「・・・ああ、久しぶりに会った一夏が好きだった

司にも手伝つてもらいながらも必死に一夏にアタックしたさ

けど、一夏には全く効かなかつた

同居してる時にはかなり勇気を振り切ってアピールしたさ
それでも振り向いてくれない

ほとんどが一夏には想いが届かず、仲のいい幼馴染止まりで終わつ
てたんだ

そんな一ヶ月を過ごしていく中、自分を助けてくれたり、支えてく
れたりした司がいつの間にか好きになつてな・・・

さつきの一夏はムカついたが私には一夏よりもいい男・・・司がい
るんだ

一夏はもう私にとつてただの幼なじみで友人みたいなものだ

「ありがとな、俺を選んでくれて」

「それはこちらのセリフだ・・・」

互いに笑みを浮かべ合ひ、「一人

それは思春期真っ最中の蘭にはとても素晴らしい光景だつた

「私、必ず二人のようなカップルになるよつに頑張ります！
お似合いですもん、二人とも

さあ、お料理来ましたし、「じゅつくじうわ」

横を向けば料理を運んで来た弾の姿が・・・

「「いただきます」」

熱々の中華料理を一人は仲良く食べ始めた・・・

かくして、腹を満たした一人は今は街中のショッピングセンターに戻っていた

「どの色がいいだろうか・・・」

「このグレーのジャケットはどうだ?」

「わかった・・ちょっと待つてくれ」

そう言って試着室に行く筈

しばらくしてからカーテンから出てきた筈に田を向けると・・・口
が塞がらなかつた

白シャツにグレーのジャケット、デニムのショートパンツに黒いブ
ーツ

お姉ちゃんっぽいがその中にある可愛ら、女性でまだみつと顔が高めの筆には似合つており、ついつい見惚れてしまつ

「その・・似合つてないか?」

チラチラとこちらを見ながら恥ずかしがる筆

(恋は恋だと云つたが・・・うふ、筆がめりやへりや可愛く見える)

そんな表情が可愛らあまつに・・・

「毎度ありがとうございます!」

先ほどの服一式をすべて同持ちで貰つた

諭吉さんが三枚ほど財布から消滅したが司はなんのダメージを食らつていなかつた

「よかつたのか?
結構高かつただろ?」

「何、デートは基本的に男が払つもんだ
気にするな

ありがたく思つなり、今度出かける時にそれ来てくれよ

「わ、わかつた!

ありがとな、いろいろと」

筆が嬉しそうに喜ぶ顔を見た司はそれだけで満足だった

そして手を繋ぎながら学園に帰るなり、ちよつビバッタリ山田先生に会った

「あ、もしかして『テートの帰りでしたか?』

改めて他人に言われ、恥ずかしく思つ二人

そんな初々しい二人に思わず微笑んでしまう真耶

「そうですね~、別に恋人同士なら『間違い』が起きても問題ないでしょ~」

「??」

はて、真耶の話が読めない二人は首を傾げる

「篝さん、お引っ越しです

今日中に隣の司さんの部屋に移動してください!」

「(。・!?)」

表情はきっとこんな感じじゃないだろ?か・・・

司が自分と篝を指しながら呟く

「まさか、『間違い』って・・・」

「ええ、何をしてもバレないなら大丈夫だと思いますし、ナニをしても恋人同士なら問題ないでしょ?」

ボンッ！

それなりに知識がある一人は噴火した

「では、同居もとい同棲生活をじゅっくり～！」

健全な高校生活を目指してくださいね～」

去っていく真耶に呆然と立ち尽くす二人

そしてしばらく立ち、落ち着いたのか篠から話出す

「ふつつか者ですが、よろしくお願ひします」

「ううううう…」

日本人特有だらつ・・・」んなやり取りは

こうして一人は同棲生活が始まった

買収してイチャイチャ（前書き）

今日は微糖です

買収してイチャイチャ

「えっと新しい転校生を紹介しますね」

「はい、キマシター

シャルル、ラウライベントキマシター

「シャルル・デュノアです

こちらに同じ境遇の方がいると聞いて転校してきました」

うん、一番人気のシャルルはめっちゃ可愛いです
もはや輝きが見えるほどです

二回

クラスの女子の急所にあたった

ダメージ9989

なんという破壊力！

その美しい笑顔にクラスの女子は大半が氣を失いかける

しかし・・・

「ラウラ・ボーディッシュだ」

「えっと、それだけですか？」

「以上だ」

シャルルが太陽ならラウラは月だらつ

そんな冷たい態度に気を失いかけた女子は意識を取り戻す

さあて、そろそろだな・・・

俺は右拳を握りしめ、準備をする

「貴様がっ！」

ラウラが一夏の前立った瞬間

「死ねえええ！」

ガツン

俺は容赦なく前の席に座る一夏の後頭部を殴る

それにより一夏は頭を下げる形になり、ラウラの手は空を切る

「すまん、蚊がいたもんでな
ついマジでやつちまつたぜ」

「ついで殴るああー」

やれやれと言つた表情で肩をすくめる俺に一夏は頭を抑えながら叫ぶ

そんなバカのようなやり取りの中、ラウラは無言で口チラを睨み、

それを俺は微笑みながら言ひてやる

「どうしたんだ、ボーディッシュさん？」

手なんて抑えて

俺は蚊を殺し損ねましたかね？

席についたらどうですか？」

「ああ、そうするといいよ！」

互いに皿を合わせない

だが、確かに敵対した

先ほどのやり取りで・・・

「では、一限はここで実戦訓練だ

織斑、新城が同じ男といつことドテュノアの世話をしつ

解散！」

千冬の声と共に俺と一夏は早々に席を立つ

「一夏、ドテュノアの手を引きながら出で
れりやと出ぬべ」

「ああ、やつだな」

「えつ、ええつ？」

いきなりのことに困惑するシャルルだが急がなければ俺たち男は社会的に抹殺される

「女子は教室で着替えるから男子は空いてるアリーナの更衣室で着替え

移動の度にこれだから早めに慣れてくれ」

「う、うん」

おどおどする表情のシャルル

うん、実は女の子だもんな
恥ずかしいよな・・・

そんなことを思いながらも後方に毎度現れる敵が現れる

「転校生発見！」

ついでに男子一人ともよー！」

「者共ー出会い、出会いー！」

「クツ、一夏逃げるぞー！」

窓、天井、床

いろんなところから沸いてくる女子から逃走を始める
いつからこの学園の女子は忍者になった？

「ねえ、ここ学園だよね？
なんか映画みたいになつてるよ？」

「こつものことだ！」

気にしたら負け

そう決めてる俺は必死に魔の手から逃げた

「フウ、間に合つたな・・・」

ただいまグラウンドに向かっている三人

先ほど更衣室でシャルルが顔を赤くしたのは定番だろう

そして自己紹介を終えた三人は名前で呼びあつてる

「遅い！」

バシン×3

男子全員が頭に出席簿アタックを食いつ

初めて食らつたシャルルに至つては涙目だ

「授業に遅れるとこうなるから気を付けよう。」

コクコクと頷くシャルルは小動物みたいで可愛かった

その後、小説と変わらず山田先生が威厳を取り戻すかのように鈴とセシリ亞がフルボッコされた

そして現在、各班に別れてTIS装備訓練をしているわけだが・・・

「新城くーん、登れない！」

と、訓練機を乗るのに手伝い

「助けてー、転んじゃうー！」

と、歩行訓練に付き添つたりなどと真面目にやつてるがそれが嫉妬に繋がったのだろうか・・・

自分の彼女はややこ立腹のようだ

一応、籌も同じ班であり、三人目である

「嫉妬してくれたのは嬉しいけど、機嫌治してくれないか？」

「・・・・・」

無視ですかい・・・・・
なら、仕方ない

彼女だからこそ特別サービスだ

「よつ・・・と」

「なあ！？」

離せ、馬鹿者！」

俗に言うお姫様抱っこ

同じ班の女子が文句を言つが・・・

「悪いな、大切な彼女だから少しサービスしただけだ

まあ、彼女の特権ということだから、諦めてくれ」

「「「「えつ？」」「」」

（。 。 ）（。 。 ）（。 。 ）（。 。 ）

ポカーンと呆然とする同じ班の女子四人

「あれ？ 言つてなかつたっけ？」

俺、新城司は篠ノ之箒の恋人なんで過度なサービスを期待してゐるみ
たいだが諦めてくれ」

「ええええつ！？」

そう叫ぶ四人は放置して訓練、訓練

だが、篝が顔を赤くしながら口をパクパクさせている

(アハハ、驚いてる)

篝の反応を楽しみながらも打鉄に乗せるが・・・
次の瞬間、復活した篝が近接ブレードで斬りかかって来た

「なつ、なんでバラした!?」

「あつぶね!?

間一髪で避ける

あ〜、照れ隠しに近接ブレードは危ないぜ・・・
篝を沈静化させなければ・・・

「・・・良かれと思つてお姫様だっこしたんだが嫌だつたか

それにこいつしてバラしたほうが俺を狙つ女子は減ると思つたんだが
な・・・

篝を思つて言つたが逆に怒らせたちました・・・
ごめんな、篝・・・」

「えつ・・・いや、そのだな・・・」

ペコ」と頭を下げる狼狽える篝

何？黒いだつて？

主導権握つてるだけだ

もう一押しか？

「幕は・・・俺のこと嫌いか？」

「馬鹿者！」

チラツと目だけで幕を見るとそれで勝負は決まった

「私が司を嫌いになるものか！」

私のことをそこまで考えてくれたなんて嬉しい限りだ！」

「俺も好きだ、幕」

抱きつくり幕を受け止める

うん、素直な幕は可愛いです

抱き心地とか最高です

「てなわけでもう班全員終わつたつて織斑先生に伝えて

「え、まだ私が・・・」

うん、終わつてないよね

だからこそカードは用意してある

「一夏の寝顔写メいらんのか？」

「「「「はい、喜んで！」」「」

そして四人で千冬の元に行へ
人間、欲には忠実だよな

「簞・・・」

顔を上げた時に辺りを確認してから一瞬だけ、おでこにキスをする

「訓練中だから訓練しよう

今はそれで我慢してくれ

コクリ

何も言わずに頷く簞

そんな簞がまた可愛い

などと思いつつ一人つきりの訓練に勤しんだ

さてはて、なんだかんだで午前中のIRS訓練が終わり、ただいま片付け中なわけとして

「お前らズリーぞ」

「何を言ひ、仲間の信頼の差がコレだぞ？」

「これも訓練のうちだ、馬鹿者」

訓練用IRSをカートで格納庫まで運ぶわけだが

一夏は一人
こつちは筈と二人

人一人変わるだけでだいぶ変わる
それほどまでにIRS自体重いのだ

「一夏、手伝おうか?」

お、ここでシャルちゃん登場

そういうやフラグ的にシャルルートが一番人気だったもんな・・・

「いや、大丈夫だ

男の意地として運び切る!」

「男の意地ね・・・」

おいおい、シャルルが引いてるぞ一夏
か？

一
なあ、
第

シャルルなんだか女性の視点から見るとどんな感じだ？
その体型とか、雰囲気とか
なんか女っぽいよな？」

「言われて見れば……そうだな
男の割りに腰周りが細いし、背も低い……足も細いし、肌も白い……
・・羨ましいなあ・・・」

「俺は今の箒が一番好きだぞ？
体型も十分好みだ
そんなに気にするな」

「や、やうがー」

うん、そのメロンとか男のロマンの塊ですから

「でだ、仮にだ
シャルルが男装してたとしたら？」

「馬鹿な・・・」

「ニュースで三人目の男子とか出てもいいのに?」

そこで篠が考え込む・・・

だっておかしいもんな

ニュースで全くでないなんて

「だからさ、今晚調べてみようぜ?」

男なら俺が、女なら篠が対処できるだろ?」

「うむ、やうだな」

いつって、原作とは違つて早い展開でシャルちゃんになるのである

ひあるイギリス娘のわっかけ（前書き）

セシリアを一夏フラグに復活させようと

時期的にセシリアイベントが終わったあとくらいです

少々無理やり感がありますが、多目に見てください

m(—)m

ひかるイギリス娘のせいかけ

「全く……向さんが外出なんて……」

セシリ亞は、はあーとため息をつきながら学園外のショッピングモールに足を運ぶ

ショッピングでもして気分を変えよ!といふ

「こひりしゃこませ~」

デパート地下にあるブランチ店に訪れ、夏物の服を探そうとした

「今日せどりのよつな物をお探しに来ましたか?」

店の店員であらわ

女性店員が聞きたくる

「早めに夏物を買おうと思いまして……

ワンピースタイプでオススメはありますか?」

「だったら、ひかるの袖口ヒフコルが着いた白いワンピースに黒いタイツせどりでしょ!うか?」

タイツなら日焼け対策にもなりますし、冷え性にも防止になります

」のワンピースにワンポイントとして腕にアクセサリーを身に付け
れば可愛こと思こまへ

「やつですね・・・」

セシリアはママと歯みながら他の品を見ていく

しかしどれもパツとしないため結局、最初の白いワンピースのセッ
トを買つことにした

そこで店の出入口付近で何やら騒がしいことになつてく

「何かあります？」

「なんかあの女性が見ず知らずの若い男の子に荷物を持たせようつと
したみたいなんだよ

や～ね、最近の若い娘は・・・」

少々歳を取った親切な女性が教えてくれたことに感謝しながらもセ
シリアは喧騒の中心を見る

(い、一夏さん!?)

まさか同じクラスメートがいたとは思わなかつた

「いいから持ちなさいよー」「

「だから何様だ!」

明らかに女性の押し付けだ

女尊男卑の絵図だらう

今思えば少し前の自分を見ている気分だった

(けど、必ずしも女性が強いわけではなく、女性が正しいわけではありますわ)

そう考えを改めたセシリアはクラスメートを助けに入った

「ちよつとよみじくて?」

「何よ!?」

「セシリ亞ー?」

一夏は一夏で自分の登場に驚いてる

一夏が素直に従わないとめか女性は不機嫌だった

「先ほどから様子を見させていただきましたが、私のクラスメートに手を出さないでくれませんこと?」

先ほどから品のない理不尽な発言

「一夏さんは何も悪くないのにあんまりですわ」

「別に男が女の荷物係なんてビコが悪いのよー。」

そんな発言にセシリ亞はあからさまなため息と共に肩を竦める

「これだから器量のない女性は・・・
まあ、今さらですわね

確かに今は女尊男卑のような世界ですが、
それに甘えて見ず知らずの他人の男性に荷物を持たせようなんて大
人がやることですか？

いい大人が子供じみた行為をするなんて恥ずかしくないのですか？

それとも、それすらも気づかない低能な女性なのかしら」

「・・・いい加減にしなさい、小娘！」

毒舌じみた発言だが、正論を言われた女性はハツカタリのよつこセ
シリアを叩こうとするが・・・

「やめる、手を出くな」

「一夏さん・・・」

セシリアを守るかのように抱き寄せ、女の腕を掴み、ドスの効いた
低い声で睨む一夏

ついセシリアはそんな一夏に見惚れる

「っち・・・・」

ギャラリーも増え、居心地が悪くなつた女性は舌打ちをしてその場
を去つた

「ありがとな、セシリ亞
おかげで助かつた」

「いえ、私こそお礼を言つべきですわ
守つていただきありがとうござりますわ」

場所は変わつて喫茶店

セシリ亞の内心では見上げた時に見えた相手を睨んでる一夏の顔と抱き抱えられた感触がいまだに残つていた

気持ちを落ち着かせようと話題を変える

「一夏さんはなんであんなとこにいたのです？」

あそこには女性服などが多く売つてることになりますわよ。」

そう

セシリ亞と一夏がいたのは女性服やブランド物を扱っている店が多く、男性が訪れるのはカップルかプレゼント目的だろう

しかし、この鈍感一夏にはそんなことが当てはまるわけがない

「実はだな・・・千冬姉にこのブランドのスースを買つてくれぬよ」

に頼まれたんだがどこにあるかわからなくてな・・・

[写真を見せてもらひースーツを見る

黒いスースーだが薄く縦模様が入つており、胸元の金色の刺繡が特徴
なんだろう

そしてそのブランドマークを知つてゐるセシリアは笑顔を浮かべる

「そのブランドを扱つているお店なら知つてますわ」

「本当か!?

その・・・案内頼めるか?」

(か、可愛いですわね!)

普段、同とは違つたカッコよさを見せる一夏が戸惑いながらも期待
の眼差しを向けるそのギャップにセシリアの母性がくすぐられる

「 もううんですわ!」

今日は一夏と会えて、良かつた

そう思つたセシリアは一夏との買い物気分を楽しもうと思つたので
あつた

それが後日からだんだん一夏に想いを寄せていくことに気がつかずには
・

シャルルイベント（前書き）

ピロリン

一夏のレベルが上がった
称号「スケベ魔王」を手にいた

シャルルイベント

時刻は夜――――

『コソコソ』

「開いてますよ~」

一夏の声にドアを開ける

「司に籌か、ビリした?」

「いんや、シャルルと親睦を深めようとな

シャルルはどうした?」

「シャワー中

どつやうりシャワー中だったようだ・・・

耳を澄ませば水音が聞こえる

「一夏、私がいなくなつても整理整頓はしてるんだな

「やうだな、まあ家ではそれなり家事やつてたしな

確かにこの部屋は結構片付いている

そうだ、一夏は無駄に家事スキルを持っていたんだ

まあ、そんなこんなで雑談をしていくと・・・

洗面所方面から水音が消える

なんでわかるかつて？

そりや髪で隠しながらも耳の部分だけ部分展開して音拾つてますから

そこまで計画を実行

「一夏、頭にホコリついてるだ？」

「えつ？ どこに？」

もちろんこれは嘘
だが、確認のためだ

「鏡見てこい

右側のほうだ」

「おう、わかった」

そのまま洗面所に向かう一夏

そんな一夏を見た篠が訪ねてくる

「ホントにこんなものでわかるのか？」

「ああ、ちゅうじゅうシャルルがシャワーから出たタイミングに合った
たからな

このまま一夏が戻つてくれれば杞憂だったところ」と

何かしら悲鳴が上がつたらアウトといふことで篠の出番ついでやれ

「やつこひ」とか

ヒカルで同

アウトだつたら一夏は制裁しつくべきだるつか

「それなりに頼む

うん、リア充の罰だ

我が嫁の制裁は喰らつておけ

などと思つてみると・・・

「キャアア！」

「はー、アウト」

篠さんが出動しました・・・

「よひ、変態」

「理不尽だ・・・」

そこには両頬に紅葉跡をつけた一夏がいた

「シャルルの感想は?」

「可愛いかった・・・つか、胸がきれい・・・ハツ!!
（。口。：、「

「墓穴掘つたな

そんなお前にスケベ大魔王の称号をやろう!」

「入らねえよ!」

一夏はそう抗議するが時はすでに遅し・・・

司の背後には女子『二人』がいた

シャルルは顔を赤くし、篝はシャルルを背後に回し守るかのように立っている

「一夏、明日までその称号を云えておいてやる

安心しろ」

「ヤメテー！」

幼なじみにさえ、白い皿を向けられる一夏はちょっと哀れであった

「で、シャルル

どうして男装しているのか聞かせて貰おうか」

「う、うん・・・

バレてしまつた影響だろ？

顔色は悪い・・・

「実は実家からそう命令されてね・・・

「えつ、けど親がそんな命令出すなんて・・・

「一夏、僕は愛人の子なんだ

だから母が病死してから父に引き取られた

けど、実家では邪魔者扱い
父も僕を娘扱いしなかつた

最初は引き取られた時はなんで迎えてくれなかつたかわからなかつたけど、父の現在の奥さんには

『「この泥棒猫の娘が！」』

つて殴られた時に初めて理解したんだと思つ

ああ、僕は利用する道具のために引き取られたんだってね・・・

で、この学園に来たのは・・・』

「各国INSのデータと世界で一人の男性INS操縦者のデータの採集つまり工作員として入れられた

仮にそのことがバレたとしても親を想う子が良かれと思ってやった勝手な行為だと

自分は娘がただ単にINS学園に入学したいだけだと思つていた

簡単に切り捨てられるし、使い勝手がいい人間だろう

「察してくれてありがとう」

元気のない笑顔を向けてくるシャルルがとても痛々しかつた

「しかし、デュノア社は世界INSシェア第三位だらうなぜ、そんな外道な行為を・・・」

籌の意見はもつともだ

それをシャルルが説明する

「今欧洲ではイギリッシュ・プラン・プランっていう各国が第三世代型INSの開発に急いでるんだよ

そのプランのトライアルの選定中のINSがイギリスのブルー・ティアーズ、ドイツのシュヴァルツ・レーゲン、イタリアのテンペスト?

これで選ばれればシノアは間違いないんだけど
僕の国、フランスは世界でも最後発でEIS開発に入ったから今、や
つと第一世代型ができたとこなんだ

だけど政府はそんなデュノア社に次のトライアルに選ばれなければ
政府からの支援金はなしといつ命令が下ってね・・・

「だから第二世代型EISが見れるEIS学園に入学させたわけだな」

「そうこうして・・・

まあ、入学初日にバレちゃったし、僕は呼び戻されて良くて実験台
悪くて極刑だろ? うね

ありがとう、最後にみんなに話して楽になつたよ・・・

年端もいかない十代の子がこんな表情をするなんて・・・
司は怒りが内心を占めていくのを感じた

すると一夏が口を開いた

「それでいいわけじゃないだろ・・・

確かに親がいなけりや俺達子供は生まれねえ

けど、その子供に何しても許されるわけじゃねえ
誰にだつて人権がある!

生き方を自分で決める管理はあるだろ? ！」

「けど、僕にはもう選択肢がないんだよ
今さらどうすることもできない」

シャルルの輝きのない瞳にはもはや力がなかつた……
だが一夏はあきらめていなかつた

「特記事項第一一に書いてある

内容はこの学園に在学中はいかなる国家や組織であつてもそのいか
なる存在に帰属しない

つまりこの学園にいる限りは安全だつて」とセ

「一夏……

特記事項なんて五十五個もあるのによく覚えたね

「俺は勤勉なんだよ」

「やうだね、アハハ」

シャルルが笑い出したのをきっかけにさつきの雰囲気から一転

明るい雰囲気になつていた

そんな雰囲気を蚊帳の外一人がわざとらしく聞いていた声で話しだし
ていた

やつ、わざとひじへだ

「ちよいと簞れんや
あの一人の雰囲気が甘いですか?」

「全くけしからん

しかも先ほどから真面目に話していくながら彼女の胸ばかり見ていて
やはりスケベ大魔王の称号は嘘じゃないな・・・」

「おー、聞こえたー!」

ひそひそと話す声に一夏は真っ赤になりながら抗議する
そしてシャルルを見てみれば・・・

「やつだったの?
一夏のえっち!」

もはや名前にもなっているシャルルのえっち発言に一夏はやけに荒
てて何か言おうとするが・・・

「やはりハーレム体質な一夏にはスケベ大魔王は素晴らしい称号だ
な」

「シャルル、襲われそうになつたらいつでも隣の私達の元に来ると
いい
必ず保護し、一夏を制裁してやる!」

「わつお前、しゃべんなー!」

火に油

一 夏は叫ぶ

「うさ、 そうするよ。」

「ちょっと頷くなよ。」

もはやシッコになつてこの

「やだな、冗談だ（よ）。」

「冗談に聞こえねえよ。」

存分に弄られた一夏はこの数コマの会話でかなり疲労した

その後、部屋に戻り就寝に就こうとしていたが・・・

「あの〜、 篠さん？」

「なんだ、咲?」

「こねは一体どうしてこうしたのか?」

「なんだ?嬉しくないのか?」

ただいま理性が本能の襲撃に必死に耐えています・・・

なぜでしょう・・・

咲が自分のベッドに入り込んでいます

就寝着なんで服は薄く、メロンがかなりダイレクトに感じていて感極まりないです・・・

「・・・いや、嬉しいけど普段なことしないよな?」

付き合って同室になつてから一週間

一度も一緒に寝ていない

さすがに健全な高校生活を送るにもそれはマズイと思つたのだが・・・

「いや・・・な、あの鈍感一夏がシャルルの胸を見た時になぜシャルルの時は女として見ているのに私の時は反応しなかつたのか何やら悔じてな」

「つまりハツ当たりか?」

「む、そうこうことだな」

ハツ当たつで胸を打てるかのよつて男のベッドに廻入るのせり
かと思つ

「俺が襲うかもしれないと？」

「こきなり身体を求めるよつな男じゃなこと信じてゐからな

（クソー、なんか悔しいな
確かにやつだけどさ……）

確かに付き合つてすぐ肉体関係はビツカと握つて、やけへんを信
頼してくれるのは嬉しい

嬉しいけど……

「眠れません……」

「私は眠れる
おやすみ、司」

チクシヨー！

そう思しながらも理性と戦しながら夜はふけていった

『アサマヤー（前書き）

女神の攻撃

司にはいつもがばつぐんだ！

「ん?」
「アーマニア?」

『風づかば何やら真つ白な空聞こじた

そつまるで死んだ時のよつな・・・・・

「やあ、お久~」

「女神!~?」

「お、よく覚えてたね

ちなみに今は君の夢の中」

ふわりと現れた青い髪の女性——女神は相変わらずフレンドリーであった

「こきなつ会いに来たってことは何か用があつたのか?」

「いや、それがちょっと数十年の休暇を貰つたからさ」

「休暇!~?

女神にも休暇つてあんの!~?」

「セリヤあるよ

神様だつてたくさんいるわけだしね

つてことで脳の世界に遊びにこられてしたよ

(。 。 :)

「なんだい、その顔は」

「いや、驚きのあまりにな・・・

てか、どうやって現れるつもりだよ?」

「それはお楽しみ」

「嫌な予感しかしねー・・・」

ため息をつく

するとだんだん視界がボヤけていく

「さて起きる時間だよ

またねー!」

やがて意識が消える女神

そして次に現れたのは・・・

「起きんか、馬鹿者……」

「「口フツシ！？」

ギャアアアー！」

腹にアッパーを食らい、更にアイアンクロード締め上げられた

「起きたか、馬鹿者

「こつまでも寝るこじやないぞ、親御さんに恥をかかせるな

ん？待て待て・・・

今、千冬さんは何とおっしゃいましたか？

「いえいえ、千冬さんの生徒指導はとても勉強になります

私の息子が悪いのですから、ビシバシ鍛えてやってください

ギギギ

首を動かしたくないのか

錆び付いたかのようにうまく動かなかつた

「わかりました
新城先生がそう仰るなら・・・

さて、紹介しよう
今の流れでわかるように
新城司の母親だが、今日からじぱりへまHIS教員実習生としてウチ
のクラスに来た
かいな
新城海奈先生だ
失礼のないようにな

「わあ・・・綺麗」

「ホントに新城君のお母さん?」

「若く見える・・・」

女子が憧れの眼差しを向けている

艶があり、腰まで届く長い髪は、色こそ青から黒に変わっているが
その端正な顔立ちとソプラノの声は間違いなくフレンドリーな女神
だった

「みなさん、よろしくね」

(「ぐる女神が1日中同じクラスだと?」
俺の幕との学園生活があああ!)

司は血の涙を流したい気持ちだった

一日で13万アクセス・・・（前書き）

会話中心

「日で13万アクセス・・・

司、 篠、 一（一夏）

「13万アクセスおめでとう！」

作（作者）「ありりー！」

作「いやー、まさか作成一日で13万行くとは・・・意外だった
な」

司「これは俺の活躍でだな」

一「司、 意外にも黒いからな・・・」

第「読者の意見はどうなんだ？」

作「えつとだな、 聞いて驚くなよ？」

一番人気は篠ちゃんです！」

三人「えつー？」

作「『テレたところや初々しいところがいいらしく
ギャップが可愛いそうです！

これからもテレたら人気上升、 司も喜ぶ
一石二鳥！」

第「同が・・喜ぶ・・一番人気・・・Hへへ

(自分の世界にトリップ中)」

司、「俺達は!?」

作「ん?ああ、お前達はな・・・

死ねよ

首、もげろよ

消えろよ

もげちゃえよ

その他 etc

司、「・・・なんで暴言?」

作「リア充死ねよ」

司、「ブルータス、お前もか!?」

作「ハイハイ、この辺で終わりにしましょう

筆、帰つて來い

挨拶するぞ」

筆「あ、ああ」

作、筆「それでは読者のみなさんありがと!」「やこれまたー。」

司、「あつがとついぞこました・・・」

作「次話から司の日常崩壊です」

司「イヤー！」

女神イヤアアア！」

・・・・・・・・・・・・

女神「アハッ
読者のみんな、よろしくね」

母親・・・(前書き)

短めです

母親・・・

「限終了後―――

「一夏、購ば「同ぢやーん!」

海奈の抱きつきによつて・・・

「たまには水入らずで過!」せよ

と、逃げ切れず・・・

「限田一の実習訓練では・・・

「そのタイミングで相手の利き腕とは逆の方向に避けるんだ

「なるほど・・・ありがとう、同

「簫のためなら俺はなんだつて」「カラッ!」

愛しの簫の頭を撫でよつとした瞬間・・・

打鉄を装備した海奈が一人の間に近接ブレードを挟む

「不純異性交遊はいけません!」

と、邪魔をされた
どこの優等生だ・・・・

昼休み―――

「 築、一夏！

飯に行こ』『1・1の新城司君、至急職員室まで来なさい』

と呼び出されたと思えば、

「 ああ、同ぢやん
お弁当食べましょ 」

と一緒に昼飯を食わされた

放課後―――

さすがに放課後は先生権限使えないだろう

そう思つたが甘かった

「 部屋まで来ればもう大丈・・・・」

「お帰りなさい、同ちゃん」
「」飯できてるわよ？」

「部屋間違えました・・・」

なぜだろう

鍵は俺と簞しか持つていなければ・・・

再び開けて見る

「あ、お風呂バタン！」

間違ひなく女神がいた

確かに笑顔だったが、今の俺にはストレス対象だった

仕方なく、扇を開けて彼女の存在を認める

諦めて扉を開ける

「なんて顔してるんだよ」

「お前のせいだ、女神

せめて部屋くらい邪魔しないでくれ……
篇との時間くらい取らないでくれ……」

俺は心底嫌そうに言つと女神は驚いた表情なり、扉に手をかける

「やつか、ゴメンね

母親つて難しいね……」

そう言い残して出でいく女神

残された俺は……

「なんだよ、それ

居心地悪かった

まるで自分が悪かったかのよう……

(怒りがちやつたな……)

女神・・・海奈は苦笑を浮かべた

自分のミスで殺してしまった子

その子には母親がいなかつた・・・

だから、休暇を貰った際に母親の代わりをやつてみよつと頑張つたの
だが上手くいかず怒らせてしまつたのだ・・・

「けど、簡単に諦めるもんか！
頑張るぞ！」

しかし、彼女は落ち込むわけではなく、前を向く

前向き、ポジティブな女神であった

司は・・・私のものだ by 築（前書き）

司、大胆

同は・・・私のものだ by 篠

次の日――

昨日ほど過激なスキンシップはなくなつたが・・・

「同・・・その弁当は?」

「えつとだな・・・母さんが俺に用意したみたいなんだ

あ、けど篠が作ったのも食べるぞ?」

「そ、そつか・・・
では・・・あ～ん」

「あ～ん、

ん、やつぱり篠の料理は最高だよ」

と、篠特製弁当を食べながらも折角作った弁当を無下に扔げるのはさ
もなく女神の弁当も完食

ちなみに味は美味しいのだ

「一夏、今日も放課後練習するよね？」

「おひ、シャルル

そうだ、司と篠も行かないか？」

そう言われた俺は考える・・・

そうだな・・・今の時間なら女神はもう来ないし・・・

「そうだな・・・篠の近接訓練もあるし、行こうかな」

とこっくわけで第三アリーナに移動

第三アリーナの入り口付近に着くと、突如爆発音が聞こえた

「何かあつたのか？」

「ならこいつで様子見ていいつよ

一夏の疑問に答えたのはシャルル

そして示したのは観戦用のモニター

確かに中に入るよりもこっちで見たほうが断然早い

そして映し出されたのは、

「セシリ亞、鈴！」

装甲はボロボロの一人

そしてもう一機は損傷軽微のラウラーーシュヴァルツェア・レー
ゲンだった

（ああ、ラウライベントか・・・）

俺はモニターに釘付けになつていて一人を放つて先に行こうとした
が・・・

「氣をつけな・・・」

「ああ、行つてくる

俺の嫁さんには氣づかれたみたいだ・・・

そして、模擬戦から離れているBピットでEISを展開

距離は900メートルほど離れている
それほどまでにアリーナはデカイのだ

弾薬選択

貫通弾

そしてスコープを覗く

狙うはあの鈴とラウラの間・・・
こちらに注意を向ければいい

タイミングを合わせて俺は引き金を引いた

「終わりか?ならば・・・私の番だ」

ラウラは田の前の獲物を見る
すでに装甲はボロボロであり、なんとか意識を保っているものの立

てないくらいにダメージを負っている鈴とセシリ亞

そんな2人にラウラは無慈悲にもプラズマ手刀を展開し、瞬時加速で留めを刺そうとした瞬間

『ピー、ピー』

いきなりハイパーセンサーから警告音が鳴り響く

「何！？」

ブースターで急制動をかけ、その場に止まつた瞬間

『チュイン！』

ラウラの田の前を何か通りすぎ、直後すぐ横の土がそれによつて捲れ上がつた

それが攻撃というのがすぐにわかつたラウラは振り返る

「射角……方向……そこがあ……」

右肩のレール・カノンでB.ピットを撃つ
衝撃で煙が上がるがすぐにそれは払われた
L96Aを振りぬいた司だ

「また貴様か……」

転校初日……織斑一夏への宣言とともに出鼻を挫いた男……
冷酷のような睨みを利かせるラウラにひるむこともなく、むしろ笑
みを浮かべている司はしゃべりだした

「よお、ちびつこ

弱いもの虐めは楽しいか？

偉そうな態度の割にはその職業とは反対のことしてゐなよ、貧乳

軍人は民を守る職業だろ？が

一步間違えればそいつら死ぬぜ？

それすらもわからないのか？

ああ、悪かった

身体も小さければそんなこともわからないガキだったか・・・

こりゃあ、失敬」

「あ、き、貴様ああああーー！」

数々の容姿の暴言

ラウラは怒り心頭にレール・カノンを連射する

しかし司はそれを「ことじ」とく避けていく

「おーい、よく狙えよ

それでも軍人かよ

わっさは『わざと外して』やつたが・・・

ワイヤーブレードでの攻撃をバレルロールや縦、横、時には弾いて
捌く

「ヤレヤレ。」

ワイヤーブレーダーで同の動きが止まった瞬間、レール・カノンを叩き込む

「新城・・・」

ボロボロの鈴は煙の奥を見つめているが・・・
仮にも助けられた身だ、今は少しばかり感謝し、心配そうに見ていた

「同さんなら大丈夫ですわ」

「けど、さすがにアレは・・・」

鈴が言いよどむが、セシリ亞は笑顔で言った

「同さんは・・・今までまともな被弾率〇ですわよ?」

そうセシリ亞が呟いた瞬間煙を貫いて弾丸が飛び出してくる

「実弾など!」

シユヴァルツェア・レーゲンの特殊装備AICが作動するが弾丸は
突如目の前で割れると三つに別れた

一つはAICで止まるも、一つはラウラの横で止まる

その瞬間、小規模な爆発が起き、ラウラのシールドエネルギーを削る

「もう終わりか？　

やつぱり、特殊装備がなければただの雑・魚だな
まだ一夏のほうが楽しめるわ

ああ、けどまあ少しばかりは褒めてやるよ
さつきの砲撃はよかつたぞ？カス」

高らかに笑い声をあげる向はもはやラウラに取つてその声すら屈辱
だった

するとある人物が現れる

「全く・・・火に油を注いでどうする？」

「同ちゃん、もう少ししまともな助け方があるでしょ？・・・」

両者の間に入ったのは千冬と海奈であった

「模擬戦をするのは構わないがアリーナのシールドを壊すまでやるのは見逃すことはできない」

「だから続きは学年別トーナメントでやつてもいいよ。
一人ともこれは命令だよ？」

言い方」こそ柔らかいが威圧感を醸しだす一人

「教官がそう仰るなら」

「俺も別に構わないですよー」

その返事を聞くなり、千冬は改めてアリーナ内にいる生徒に向けて叫ぶ

「では、学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁ずる！解散！」

千冬が強く手を叩いたのを合図に去つていく生徒

「おい、最後に言わせろ

お前が余裕ぶつこいでいるのは構わないが・・・俺と戦う前に一夏に足元掬われるぜ？」

「ふん、あの男など壁にもならん」

それを最後に二人はその場を去つた・・・

場所は保健室・・・

「・・・・・」

「・・・・・」

ベッドに座りながらも包帯ぐるぐる巻きの彼女達一人はムスッとしている

すると保健室に一夏とシャルルが入るなり・・・

「別に助けてくれなくてもよかつたのに」

「あのまま続ければ勝つていましたわ」

「・・・ほつ、私の司に感謝の言葉すらないのか」

「「いひやいー」」

一夏が入ってくるなりこの言ひ草である

そう意地を張る彼女達に筹が軽く肩を叩くだけこれである

「筹もよせつて・・・

まあ、怪我の割には元氣で安心したぜ

「こんな怪我程度・・・」

「別に対したダメージじゃないわよ」

「司が助けなかつたら更に悪化したはずだからな・・・」

「いたああ！」

「つづつづー」

「お前ら、バカだろ・・・」

再び簫にやられる二人を一夏は呆れた眼差しを向ける

「まあまあ、簫もその辺にしてあげたら?

一人とも好きな人にカツコ悪いとこを見られたくないだけだよ

簫だつてわかるでしょ?」

「まあ、そうだな」

シャルルの言葉に顔を真っ赤にする二人

何やらトリップ中だが・・・

そんな一人にアドバイスが飛んでくる

「しかし、たまには素直になることだぞ
いつまでも意地を張つていると、バカには通用しねえぞ」

「司さん！」

「新城！」

セシリ亞と鈴は助けてくれた本人の登場に声をあげる

「司、大丈夫だったか？」

すかさず保健室に入ってきた司をすぐに心配する鈴

司は安心させるかねように鈴の頭を撫でる

「大丈夫だよ、職員室に呼び出し食らつて怒られるかと思ったが、
意外にま状況説明しただけだ

悪かつたな、

心配させて・・・

「いや、司が大丈夫なら私は平氣だ・・・」

(((いいな)))

撫でられている筈を羨ましげに見つめる三人

それに気づいた司と筈は笑みを浮かべる

「物欲しそうな顔するならバカに頼めよ?」

「きつとバカなら意図に気づかずには撫でてくれるぞ?」

「バカって誰のことだ?
てか、一体なんの話だ?」

そんな一人の言葉にいつもと変わらず鈍感な一夏
しかし、セシリ亞と鈴は納得いかない表情で
シャルルは乾いた笑みを浮かべていた

「そ、それでは意味ないですわ!」

「勝ち組の余裕・・・凄くムカつくわね・・・」

「アハハ・・・」

まさにリア充と非リア充の絵図とも言えるだろう

セシリ亞と鈴は田の前のリア充に怒りが湧く

すると突如、ドドドドと何かの突撃音が聞こえてくる

「氣のせいか・・・

だんだんこちらに近づいてくる気が・・・

すると・・・バタン！

と、ドアが開いた

ちよつと待て・・・

スライド式のドアがバタンってなんだ?
見ればドアが縦に倒れている

壊しやがった・・・

「デュノア君!」

「織斑君!」

「新城君!」

そして現れたのは男という獲物を求めた、女子の皮を被つた肉食獣
だった

「一体なんなんだ・・・

「みんな、ちよつと落ち着いてー！」

一夏とシャルルが沈静化させようとするが女子の勢いは止まらない

「 「 「コレー」「」」

そして差し出されたのは緊急告知文の書かれた申込書だった

「ああ、コレか

内容は今回の学年別トーナメントは一人一組で戦うから同意の元、パートナーを決めるか抽選で選んでもらつか選べってこと
で、この人達は俺達男子三人と組みたい希望者ってこと

「そういうこと…とにかく…」

再び手を伸ばす女子

「私と組もう！織斑君！」

「私と組んで！デュノア君！」

「お姉さんと組まない？司君…」

「えつと…・・・」

「司・・・・」

シャルルは実は女・・・
司は司を切なげに見る

「」で女を守れ、野郎ども

そう脳内に感じた二人は行動に・・・

「悪いな、俺はシャルルと組むから諦めてくれ・・・」

しーと沈黙が響くが・・・

「男同士なら仕方ないし・・・」

「他の女子と組むよりはいいし・・・」

「「じやあ同君ー。」」

なんといつ切り替えの速さ

しかし同も・・・

「俺は籌と組むんで・・・」

そう答える同

しかし、「」で問題が・・・シャルルは見た目が男なため問題はなかつたが、筹は女子・・・

不満の声が上がる

そんな反応に筹の気分はあまりよくなく、同もため息をつく

「つたく、面倒だな・・・」

ちゃんと理由言つたら諦めてくれます?
てか、もつ諦めてください

根本的な部分を・・・

「 篠、ここに向け」

「えつ・・なに、んつー?」

同は篠の顎をつまみながら自分の唇で篠の口を塞ぐ

「んつ・・ふつ・・あつ、んんつー!」

時々舌を絡ませ、篠は赤くしながら、なんとも甘い声を出す

口から漏れる息とよだれが色っぽさを出しており、その場にいた二人以外全員が釘付けになっていた

「あつ・・・つかさ・・・」

口を離し、トロンとした表情で同を見上げる篠

腰が抜けたのかカクンシと膝を着きしつなごじゅうを同が抱き支える

「 ここいう関係です

諦めてください・・・」

「あ・・うん」

何やら呆然としているようだ
力なく帰つていいく女子達

「さあ、帰るぞ

一夏もシャルルもいつまでも病室にいちや迷惑だし、帰るぞ

じゃあな、二人とも」

「え、ええ・・・

「じゃあね・・・」

出ていく四人に一人はぎこちなく挨拶する

そして残された二人は・・・

「簫さん・・・気持ちよさそうでしたわね・・・」

「なんか変な感じがするわ・・・」

モゾモゾと身体を動かしながら赤くなる二人

二人には同と簫の刺激は強かつたようだ・・・

海奈の存在（前書き）

「」でシャルルフラグを公開・・・

「」やセシリア派の方にはすいません

海奈の存在

その日、俺達は天変地異の前触れかと思つくり衝撃を受けた

「なあ、二人に相談なんだ・・・」

「「ん?」」

今、現在屋上で一夏と篠、司は昼食中

セシリ亞や鈴は昨日のワウラの攻撃で壊れた自機の修復中でシャルルは手伝いである

そんな昼休みの時である・・・

一夏から珍しく相談
しかも二人にある
一応、聞いてみた

「俺さ、シャルルに惚れたかもしれないんだ・・・」

「ゴフツ、カハツ！」

「ゲホツ、んーー！」

司はパンを、簫はお茶を吹き出しあつになるが必死に堪える・・・

落ち着いたところで再び聞く

「お前がシャルルを？」

「ああ、俺がだ」

「ライクじゃなくてラブで間違いないな？」

「そうだよ、男としてだ」

質問に潔く答える一夏に田畠を感じた一人・・・

「ああ、簫・・・

あの女に無関心だった一夏がこんな日が来るとほ・・・」

「きっと天変地異の前触れかもしれん・・・

私は最後までお前を愛してる・・・」

「簫つー・・・」

「司あつー・・・」

「やめんかいー・・・」

抱きつく二人「ど」から出したのかハリセンを叩きつける一夏

「そんなに俺がシャルルに惚れるのが珍しいかよ」

「「ああ、この世の終わりくらい・・・・・」

「お前ら、酷くね？」

シレツと言つ一人に呆れる一夏
すっかりソツ「ミ要員である

「まあ、とにかくシャルルに好かれるにはどうしたらいいか、教えてくれないか？」

真剣な表情で聞く一夏に「これ以上現実逃避できないとわかった以上、
真面目に聞く二人

しかし・・・

「答える必要ないとと思うぞ?
アイツは脈はありそうだしな・・・」

「だな、男からのアドバイスは告げるなら男らしくストレートにだ

といふか、なんでシャルルなんだ?

今までセシリ亞や鈴だつていただる?」

もつともな疑問だらう

あんな彼女達でも容姿のレベルは高いのだ

「えつ、鈴は幼なじみだけいつも意味のわからない文句と一緒に殴つてくるし、
セシリ亞は第一印象最悪だつたろ?
それからはまあ、いい友達だと思つてゐ
それにシャルルは女の子だつたのは驚いたけど、気が利くし、優し
いし、気が合つんだよ
まあ、惚れたのは・・・
シャルルの笑顔かな?

それにつも俺に怒つてるセシリ亞や鈴が俺のこと好きなわけない
だろ?」「

恥ずかしそうに頭を搔きながら答える一夏を見るからに嘘は言つて
ないだろ?・・・
しかし、まあ・・・

「照れ隠しどうのがコイツには変な意味に捕らわれるんだな・・・
「ああ、その点素直なシャルルが勝ち越したわけだな・・・

((御愁傷様・・・))

頑張つていた一人にはそれしか言えなかつた・・・

まあ、ここまで来たらシャルルを応援するべきだろ?

「今日の夜、部屋で一人っきりになつた時に告白してみるよ

主導権はできるだけお前が持てよ？」

流れは大事だからな

最後まで諦めるなよ？」

「ああ、わかつた

流れの最後まで主導権は譲らないだな

よし、ありがとう」「一人とも！」

必ず最後まで頑張るぜ！」

自信が沸いた一夏はぐつと拳を高らかに掲げると教室に戻つていく

だが、ここで不安が・・・

「なあ、司・・・

「アイツ、最後までの意味間違えてないか？」

「え、俺は最後まで諦めずシャルルの心を掴めのつもりで言つたんだが・・・」

「いや、その、だな・・・

最後までつて、アイツは・・・」

顔を赤くしながら恥ずかしそうに言つた

その様子から察した司は・・・

「あへ、わかつた・・・

・・・・・仮にそうだとしても恋人になるなら大丈夫だろつ」

「・・・・・そだな、ここからはアイツらの問題だしな」

投げ出した二人はなんて無責任なんだろつ・・・
しかし、あの特殊な一夏だからこそ不安になるということを考えて
やつてほしい・・・・

そして放課後の職員室・・・

「といふことなんだが・・・邪魔されないよつな仕掛けないか?」

「それを普通、先生に言ひつ?」

不本意ながらも女神の元にいた

一夏の部屋に鈴やセシリ亞が訪れる可能性は高い

それを防ぐことができそうな人物に心当たりあるのは一人しかいな

かつたのだ

「それがこの物語を変えるものだとしてもかい？」

これは神としての質問だろ？

なぜこんな質問をと思うが……考えてほしい

一夏とシャルルが繋がった場合、セシリ亞、鈴、ラウラ、更織姉妹
フラグがなくなるのだ

イベントすら消滅する可能性がある

しかし、司は迷わなかつた

「俺が……俺自身、この世界にイレギュラーとして存在している」と
自体が物語を変えてるんだ
もひ、今更だろ？

そう、今更

司はすでに物語を変えてしまつているのだ

「ふふっ、変わったね君は……」

「うわー

やめりつてー離せつー！」

さあ、ひと口を抱きしめる海奈

いきなりのことに慌てる司を見る海奈の表情は慈愛のようだった

「よし、同ちゃんのためにお母さんが一肌脱いであげる。」

同を离した海奈はワインクしながらおもいついた

（母ちゃんか・・・）

あんな感じなのか・・・）

職員室から出た同は未だに残る温もりに感心を感じていた・・・

それはとても素直な子供心とは知れずに・・・

そして夜・・・

「うん、同ちゃんはいい彼女を持ったね~

可愛くて、家事もできて、しつかりしてて

お母さん嬉しいよ

「いえいえ、お義母様には料理の腕はまだまだ及びません」

「もう、謙遜しちゃって！」

「いつでも私の娘になつてもいいわよ。」

「なんでだらう・・・」

「俺の彼女があの女神と仲良く料理を作っているのが不思議な光景だつた

「嫁、姑の仲が悪いのはたいていどの家庭もそつだと思うのだが・・・」

「働きやる者食ひべからずだぞ？」

「はい・・・」

畠袋を握つて居る者には逆らえず、従つて

尻に敷かれるといつこいつだらう・・・

隣の部屋に術を掛け続けるにも女神といつことを籌に話すわけにもいかず、彼女紹介という面目で海奈を部屋に入れたが・・・

篠と海奈は話してしばらぐすると気があつたらしく現在に至るといふことだ

「さあ、食べましょうか」

海奈の合図に席に座る

そして手を合わせるなり、

「いただきまーす」

そう言って食事にありつく箸

なぜだろうか、生まれてから父と一人っきり、もしくは一人で食べていた夕飯

しかし、今こいつして笑顔で食べる一人との食事がとても楽しく感じた司は、

今日は女神の存在に感謝した

一組四の・・・(前書き)

ちょっと内容薄いかも・・・

ごめんなさい

「んつ・・・朝か」

ベッドに朝陽が差し込み目が覚める

そこでも自分のすぐ横でぬくぬくと動く者が・・・

「つたぐ、無防備な顔いやがって・・・」

もはや毎日のようすに自分のベッドに入つてくる籌には何も言わずに受け入れた

しかし、昨晩は・・・まあ、運動をしたため服はベッド周辺に散乱している

そのまますぐに制服に着替えるなり、彼女の服も含めて洗濯機へ
そしてそのままスイッチを入れる

時間は六時ちょうど過ぎ

そろそろ食堂が開く時間だらつ・・・

「筹、起きひ、朝だぞ」

「ん～・・・」

しかし彼女は布団を更に被り、繭のように布団の中へ

「起きないと、飯食う時間なくなるやん」

「司・・のせー・・」

布団の中からの答えはそれだけ

だが、司はそれだけで理解する・・・

「おかしいいな・・・

昨日は珍しく簞から誘つて来たんだろう?
しかも第一ラウンジじゃ、足りないって言つて、第一までやつたじ
やないか

それでもまだ起きないってんなら、このまま田舎まし変わりに第三
開始といひつか

あいにく男の朝は元氣でな・・・」

そう言つた瞬間、彼女は跳ね起き、司の差し出した制服などを持つ
て洗面所に入つていく・・・

全くだつたら最初から素直に起きればいいのに・・・

しばらくして出でたのはこつもと変わらず、ポーテールの簞だ
った

「おはよー、そんじゃ隣の奴誘つて飯行こつか」

ちよつと不機嫌だが、それでも司に着いていく彼女だった……

「・・・」

「・・・」

四人テーブルで朝食を食べる四人

少々、まだ早朝なため、人は数える程度しかいないがそれでも食堂のおばちゃんなどからこのテーブルは注目されていた

特に司と篠の目の前の二人が・・・

「はい、一夏

いつも醤油だよね？」

田玉焼きを食べよつとした一夏に醤油ビンを差し出すシャルル

「ああ、ありがとうシャル」

それを笑顔で受けとる一夏

今、愛称で呼んだのは気のせいだろうか・・・

二人を取り巻く空気がピンク色
つまり・・・

「お前ら、付き合つたんだな」

「ああ、二人のおかげだ
ありがとう」

「一夏から聞いたよ
一夏を応援してくれてありがとう
おかげで、僕も勇気を出せたよ」

「あ、ああ
それは良かつた・・・」

二人はただ、ただ頷くしかなかつた

そう・・・一夏はシャルルに想いを伝えて成功したのだ

しかし、じつ目の前で初々しいカップルを見ると微笑ましい光景だ
と思えた

「セシリ亞や鈴には悪いが・・・こりゃシャルルの勝ち越しだな」

「ああ、お似合いだ」

司と篠そう言いながらも田の前のカップルに負けないくらい甘い雰囲気を醸し出しながら寄り添っている

正直、早めに来ていた学生の中にはブラックコーヒーを買っていた生徒がいるほどだ

全く朝からお熱い四人だこと……

時間は変わって放課後……

「なあ司、なんで司は鈴やセシリ亞が避けられなかつたあのシユヴァルツェア・レーゲンのワイヤー避けれたんだ?」

学年別トーナメントに向けて訓練しているいつものメンバー

司はシャルルと射撃訓練を

一夏は篠と近接訓練を

そこで一夏が学年別トーナメントで強敵であり、友を傷つけたラウラには印象があつたのか

そんな疑問を訪ねられる司

「あ～、あれだ

いへり六本もワイヤー操れるつて言つても攻撃してくるのはせこぜ
い2本くらい
多くても4本くらいだから
それに集中しただけだ

ほら、人間つてどうしても狙う所は眼で追うだろ？

それを感じながら迫つてくるのを避けていく

無理だと思つたら弾けばいい

その辺は剣道で留わないので？」

そこで篝が答える

「ああ、やはり田線だな

そこだ決まるからな

あとは雰囲気と勘だらう

勘は当たにならないといつが、経験やその人物の情報、試合の流れ
からつまく読み取つた勘は当たるときが多い

どんなプロスポーツ選手などもそつと読めた自分の勘・・・先読みを
大事にしていることが多いからな

だからといって闇雲に予想するのは間違えるな、一夏

冷静に分析し、賭けに出やすいお前がどれだけ焦らずに予想するの
が大事だ」

「なら、早速練習してみよっか？」

僕と司が撃つ攻撃をひたすら避ける訓練

ついでに籌もさ・・・」

「えつ・・・・・」

シャルルが笑顔で提案した訓練に固まる一人

「そりだな、筹も格闘メインだしやつて撃はないしな・・・

動くのがいいしな

ああ、あと回避と防御以外するなよ

まあ、させないけど

「攻撃なし!?」

司の言葉に狼狽する二人
見ればシャルルも両手に
アサルトカノン『ガルム』
連装ショットガン
『レインオブサターデイ』
を装備している

そして司は少々遠目に移動し、L96Aの照準を合わせ

「用意はいいか？」？

俺がラウラのレールカノン
シャルルがワイヤーだと思つて避けろよ」

プライベートチャンネルからの司の声に肩を落胆させ、諦める一人

「大丈夫、死なないから」

そういう問題じやないだろう！

そう言いたいがこれで状況が変わるわけじやないため諦めた二人は
剣を構える

「じゃあ・・・」

「頑張つてね」

それを合図に二人は弾丸の嵐に包まれた

孤高▽S連携（前書き）

雪片武型の零落白夜って、ガンダムとかのビームサーベルと似たようなもんだと思つたです

だから、武器から手を離してもすぐに零落白夜が消えるとは思えないんですね

孤高VS連携

学年別トーナメント当田

一夏とシャルルは準備を終え、最初の対戦相手を確認しにに行つた
がその相手に驚いた

その相手は・・・

ラウラ・ボーデヴィッヒヒニーナ・アクティーヌといつ同じクラス
メートの一人であった

そして現在、対ラウラ戦の作戦の最終チェックをしており、一夏の
脳内に鈴やセシリアを含めた作戦を考える会話が蘇つていた

『AIC?何だそりや?』

『シユヴァルツェア・レーゲンに搭載されてる第三世代型兵器だよ
アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、日本語だと慣性
停止能力だよ』

『ちなみに一夏さん、さすがにAICは「存知ですわよね?』

『・・・わからん』

『あ、あのねえ・・・』

ISの基本知識でしょうが!

全てのエリはこのパッシブ・イナーシャル・キャンセラーで、浮遊、
加速、停止をしてんのよー。
あんたの頭、腐ってカビ湧いてんじゃないのー?』

『……すまん』

『まあ、鈴もそこいら辺にしどこでやれ
といひでセシリアや鈴はP.E.Cの理屈はわかるのか?
私はそこいら辺はデータを見たことなくてな・・・』

『理屈はまあ、詳しきはわからぬナジ私の龍砲と同じで空間圧作
用兵器と似た感じで制御してゐますよ

空間に干渉して、攻撃を止めてるか?』

『ついてことは、俺の零落白天なら切れることだよな?』

『理論上はな

だが、俺だつたら零落白天に触れないならそれを操作してゐる一夏の
腕にP.E.Cを掛けて止めるが』

『腕つて・・・腕だぞ?

結構早く振る腕をピントポイントに止められるのか?』

『あのP.E.C操作の完成度ならできるでしょ?』

まあ、一つ申し上げるとしたら一夏さん自身に問題が・・・

『昔からさうだったが、

一夏の動きは性格がそのまま出でているからな』

『ぶつちやけると、あんたの動きが読みやすいのよ

『ぐつ・・・言い返せない』

『特にお前の攻撃は、縦の袈裟、逆袈裟、
横は払い、返し刃のどれかだしな

だから打鉄の簞にも負けるんだ』

『・・・・・

じゃあ、対抗策にはどうすればいい?

俺には雪戸しかないんだ』

『それを今、考えてるんでしきつが
あんたやデュノア達には私達の仇取つて欲しいんだから』

『まあ、鈴も熱くなるなつて

それに俺に一つ案がある

それは―――』

そこでブザーがなつたため

一夏とシャルルは互いにエスを纏うとアリーナのグラウンドに出て

「一戦田で当たるとはな、待つ手間が省けた

私はお前が心底許せない

お前が教官の弟だというのを認められない！

貴様の存在は教官を変える！

だから、私は貴様を！』

「・・・どういう当て付けだが知らないが、俺はお前にやられた仲間のためにお前を！』

「『叩きのめす！』」

そして両者が開始と同時に瞬時加速を行い、ぶつかり合つ
一夏の零落白夜を両手のプラズマ手刀で受け止めたラウラは追撃を行つ
一夏にAICOを掛ける

それにより身体全体が金縛りにあつたかのように動かなくなつた一夏

「開始直後に先制攻撃とは、わかりやすいな」

「そりゃあ、以心伝心で何よりだ」

「以心伝心なら次に私がすることもわかるだろう？」

一夏は聞かれなくともわかつていた

その右肩にある巨大なリボルバー機構の電磁砲・・・レールカノンによる零距離射撃

射撃武器の初速の威力はとてもなく強力だと司から聞いている

ハイパー・センサーがアラーム音を発しながら警告している

しかし、一夏の内心は余裕だった

「一夏はやられせない！」

一夏の背後から飛び出したシャルルがラウラのレールカノンの砲口にアサルトカノンを集中射撃

それによりレールカノンの砲口はズレ、発射された砲弾は空を切るそしてAICOの呪縛から抜け出した一夏はシャルルに打鉄で仕掛けようとしていた二一ナに気づく

「すまんが、邪魔はさせない！」

「あやつー？」

まだまだISには慣れていないようで零落白夜で数度打ち込んだだけ打鉄はシールドエンプティーになる

これで第一段階はクリアだ

『ラウラと戦いながらたぶん抽選で決まったパートナーと戦うのは正直言うと勝つのは難しいだから、先に一夏かシャルルのどちらかが速攻でラウラのパートナーを落として、ラウラとの戦いに集中できるような状況を作るんだ』

そして・・・

「シャルル！」

「起き土産にビーナー。」

一夏の合図にシャルルは両手のアサルトライフルを投げ捨て、高くジャンプすると得意の高速切替ラピッド・スイッチで呼び出した対E.S用グレネードをラウラにありますけ投げつけ始める

「ツチ、この程度！」

しかしA.H.Cを後方以外自分を包むように展開し、爆風をやり過ごすラウラよつてダメージを『えられない

しかし目的はダメージではなく・・・動きを止めること

『確かに零落白夜はA.H.Cに効くが、腕を止められて当たらなって言ったよな？』

そこで思つたんだが、一夏が零落白夜を持たなければいいんじゃないか？』

『だが、一夏じゃないと発動しないんじゃ・・・』

『そりやあ、一夏以外持つたってただの近接ブレードだらう武器としては使えるがな

俺が言いたいのは零落白夜の状態で雪片を・・・』

『投擲』した

「当たれええ！」

-1-
？」

AICが効かない零落白夜を避けるには前面から来ているため横か
上に逃げるしかない

しかしAICを解けば、爆風の餌食になる

まっすぐ向かって正面はすでに避けられない距離だった

だが、さすがプロ

ラウラは簡単にほやられなかつた

舐めるなああ！」

零落白夜はA.I.Cを貫くもその穂先を身体を捻り、直撃を避ける
零落白夜はレーゲンのレールカノンを貫き、彼女の後方の地面に突
き刺さる

「はあ、はあ

貴様にしては中々良いアイデアだったな
だが、得物を失つた貴様など！」

そう言ってプラズマ手刀を展開し、突撃体制に入るラウラ

しかし・・・

「僕を忘れないでよー。」

「なつ、それは！？」

雪片式型を『持つた』シャルルの斬撃を驚きの表情をしながらも展開したプラズマ手刀で受け止めるラウラ

確かに専用機の武器は他の機体が勝手に使えな^いくなっているが、その持ち主が使用許可をしている人物は使えるようになっている
そしてその許可を持つシャルルは単一仕様の零落白夜こそ使えないものの近接ブレードとしては使える

そしてシャルルが一夏の武器を使えるところとは・・・

「ツチ！ 雑魚共が！」

ギリギリで一夏が両手に持つたアサルトライフルの弾を片手のプラズマ手刀でシャルルの攻撃を防ぎ、もう片方でA.I.Cを展開し、実弾を止める

そのラウラの表情にはすでに余裕が消えていた

「それにしても織斑君が武器を投げたのは驚きましたね」

「大方、新城の入れ知恵だらうまあ、的には射ているがな」

「それにデュノア君との連携もピッタリやはり相性的に合っているからですか？」

「いや、そこにはデュノアが奴にあわせているからだらう

もし合わせるとしたら・・・新城とデュノアの相性が一番敵としては嫌だらうな

新城は武器こそ射撃だけだが、オルコットと違つて懷に入られても近接射撃ができる全距離対応型後方支援タイプだ
デュノアは近接も人並み以上、射撃も中々だ

それに器用で遊撃タイプには最高の立ち位置だらう
あの二人が組めば、懷に入るのは難しいだらうし、入つても対応されるとなると堪つたもんじやない」

「織斑先生でもですか？」

「ふん、ちゃんとした機体があれば赤子の手を捻るようなものだ

さあ、試合が動くぞ」

「あ、はい！」

二人は再びモニターに顔を向ける

（あの娘は昔から強さがすべてだと思っているのは変わらないな・・・

・

しかし、それでは私の弟には・・・）

『勝てんぞ』

そう確信めいた自信満々なことを思ひ千冬は弟の映る画面を見ながら小さく笑みを浮かべた

知らない貴方が不安（前書き）

ちょっと短め

知らない貴方が不安

強い・・・

一夏は素直にそう思つた

司の射撃訓練と回避訓練をしてなかくシャルルがいなかつたら一〇分も持たずに沈んでいた

「はあ・・・ふつ」

「一夏ー。」

「シャルル！」

第一試合だが「」の試合が一番白熱してゐるのだらけ

専用機持ち同士といひ「」とからギャラリーは興味を、各國からの役員は他国の自國の戦力比を・・・

やつ思ひはすが・・・

「」の試合がそんなことを忘れ、夢中になるほど高度な試合だ

再び距離をとつたラウフ

そこで一夏が雪片を

シャルルがアサルトライフルを

互いに武器を持ち主に戻す

そこで再び日本とフランス対ドイツの戦いが再戦される

「はあっ！」

距離を取つたラウラはワイヤーブレードによる精密操作に集中した

集中したことにより一人に対しても6本すべてを操っていた

縦横無尽に駆け巡る刃の糸の中、一人は縦に、横に、身体を捻る、
弾くなどして避ける

しかし軍人であるラウラの攻撃は計算された正確無比な攻撃である

そこでシャルルがその包囲網を掻い潜る

「貴様さえ止めれば奴など簡単だ！」

シャルルを止めるべくラウラはAICOを展開するが、

「僕のパートナーを甘く見ないでよー！」

シャルルがそう叫んだ時には一夏はダメージを受けながらもシャルルに対して最高の援護を行つた

「うおおお、最高のプレゼントを貰ひやー！」

ありつたけのエネルギーを食った絶大な零落白夜を再び投擲する一夏

当たるわけにもいかず、AICOを解除するラウラ

「懷に入つたからには！」

「たかが第一世代の攻撃力などっ！？」

そこでラウラはシャルルが防御のはずの左手を構えてることから、ある武装を思い出す

『実弾武器であり、超近距離型武器だが、その攻撃力は第一世代最强である』

『灰色の鱗殻』
グレー・スケール

通称『盾殺し（シールド・ピアース）』

左手の盾の装甲が炸薬により弾け飛び、そこにはリボルバー式の巨大な杭打ち機が露になる

『ズガーン！』

その巨大な杭がラウラに打ち込まれ、その至近距離の攻撃力シールドを突破し、絶対防御を発動させる

衝撃による痛みに耐えながらも打ち込まれた反動を利用して、距離を取るラウラ

「逃がさない！」

「瞬時加速だと！？」

「今、初めて使ったからね」

データ上シャルルは今まで一度も使ったことがなかった
つまりこの戦いが初の瞬時加速

一夏やらウラの瞬時加速を見よう真似で実現してしまったのだ
もはや、それは天才の域だらう

すでにAICも間に合わない距離にいるシャルル

しかも気づけば背後は壁

そして避けられぬままラウラは再びシャルルの切り札の餌食になる

そしてラウラのHSに強制解除の紫電が走り始めた

（力が欲しい・・・どんなものも敵わぬ最強の力を）

そう思つたラウラに答えるかのように自分の相棒であるシュヴァル
チエアがドクンと答える

（ならば受けとれ・・・世界最強の力を！！）

「ああああっつ！！」

紫電を纏い、叫び声を上げた瞬間
シュヴァルチエア・レーゲンはだんだんとラウラを呑み込みながら
その形を変えていく

『V-Tシステム』作動

アリーナにパニックが起つた

少し時は遡り、シャールルがラウラに突撃を仕掛けた時観客席にいた司は席を立つ

「どうしたのだ、司？」

「あ、いや、ちょっとトイレにな・・・」

やつて出口階段にいく司を篝は不安そうに見ていた

最近よく見せる苦笑

そして何か呟く姿はなぜか遠くに行ってしまいそうだった

しかし篝はそんな不安な表情を笑顔で隠す

司を信じて・・・

想ひの理由（論書類）

「ハカラ編終了です

強さの理由

「一体どうしたんだ・・・」

「HUNが変形するなんて・・・」

紫電が走り、近くにいたシャルルを吹き飛ばしたあとシユヴァルチエア・レーゲンは装甲を溶かしたかのようにドロドロになり、ラウラに纏い始めた、

そしてそこには肩、胴、脚部、頭部を覆つ

頭部は田を表すかのよつに赤いツインアイが現れ、その姿は前回襲撃した全身装甲のHUNよつな姿だった

何より一夏を驚かせたのは装甲と共にできた『黒い雪片』だ

そして一夏が本能的に無意識に雪片式型を構えた瞬間、ワウワウは自分の雪片を居合いで構えをして一夏に迫る

そして放たれた強烈な横一閃をなんとか防ぐも、その勢いにより打ち負け、雪片式型が弾かれる

すぐさまワウワウは雪片を上段に構える

その居合いからの上段構えは一夏の記憶にある人物の戦術・・・いや、剣技と全く一緒だった

雪片とその構えからすぐさま次の攻撃がどんな軌道で迫る攻撃かがわかつた

剣は弾かれ、防御は無理

残るは・・・

一夏はすぐさま白式に緊急後退回避を命令する

全力で避けた一夏は左腕の装甲を壊されながらもなんとか避ける

そして今の緊急回避と左腕を食らつたダメージの影響か、一夏の白式はエネルギー切れで強制解除される

しかし一夏の内心は強制解除に気にかかることもないほど、怒りが占めていた

(許さねえ！

千冬姉の技を、千冬姉の情報を、千冬姉から受け取ったこの武器を勝手に使いやがって！)

自分の姉のデータを勝手に使われたことに怒り心頭の一夏は白式を纏つていなにも関わらず、ラウラに向かっていこうとしていた

しかし・・・

「自殺願望か、お前は
目を覚ましやがれ！」

ガツ！

突如現れた司により、右ストレートをもろに食らつた一夏は吹き飛
ばされる

「邪魔するな、司！」

あの野郎、千冬姉を侮辱しやがつて！
邪魔するんなら、お前でも！」

「アツ？」

やるか、雑魚！？

テメエの攻撃なんて掠りもしねえよ！

人がせつかく命を助けてやつたつうのに何様だ、テメエは！

そのまま行つて、呆氣ない死に向してみろ！

悲しむのは誰だ！

テメエのやううとしてるのはカスがする無謀だとわからねえのか！

シャルルの目の前で、

死ぬ氣がテメエは！

急激に怒りが冷えていき、自分の愚かさを自覚していく

見ればシャルルは心配そうな表情だった

「・・・すまん、もう大丈夫だ」

そう言つた一夏は一度大きく深呼吸する

それが終わつた表情には落ち着きが戻つていた

そ「」同じくラウラを指差しながらゆきくつと説明していく

「いいか、ラウラはたぶん意識がなくE.Sのプログラムによつて動いてるはずだ

じゃなき今頃攻撃をされているはずだ」

確かにそうだ

今は敵を前に話してるとこのに全く攻撃してこないのだ

「前みたいに容赦なくやれればいいんだが、中にはラウラがいるだからラウラを取り出さない限り、奴は止まらないだろうでだ、お前はあのE.Sをぶつ飛ばしたいんだろう？」

「・・・ああ、千冬姉の弟として、千冬姉の剣技を教わった者として俺は倒したい・・・」

その強い意思に同は黙つて自分のヒヒのシールドエネルギーを譲渡する「ア・ケーブルを白式に繋げる

「俺のリクルアのシールドエネルギーを半分やるからぶつ飛ばして来い」

「ああ、まかせろ！」

・・・・ 来い、白式！」

エネルギーの受け取りが終わつた一夏は白式を起動させるそこで確認したシールドエネルギーの残量に一夏、目を見開いた

(2000ワ!?)

これで半分かよ!)

出鱈田なエネルギー量に驚きながらも一夏は零落白夜を発動させた

そして一夏の対応に反応したのか、ラウラも武器を構える

(一撃だ・・・
この一撃で決める!)

「つおおおおつー！」

互いに振り下ろす雪片

瞬時加速で勢いをつけた一夏、全身全靈をかけてその一撃を振り抜いた・・・

そこには確かな感触が

「ぶつ飛ばすのは勘弁してやる」

見事に勝った一夏はラウラを抱き止めながらそう呟いた・・・

「なあ、俺はや・・・強さってのは、心の在処
つまり自分自身がどんな風になりたいかじゃないのか?
他人に・・・千冬姉に求めるのは違うんじゃないのか?」

――そう、なのか?

真っ白な空間で一夏はラウラに語りかけ、ラウラは不思議とその一夏の言葉から耳が離せなかつた

「そりゃ そうだろ？」

千冬姉にばかり頼つて、自分が何をしたいかもわかつてない奴が強いわけもないだろう？

自分の人生だし、どう生きようがお前の勝手だろ？
誰も文句は言わねえよ

だからさ、まずは自分がやりたいことを見つけてから強くなつてみ
るよ

きつとお前なら強くなれるわ」

強くなれるか——

ラウラは田の前の男が自分の敬愛する者と同じことを言つたことこ
コイツがあの人の弟だと言つことと思わされた

——では、お前は……なんで強い
なんで強くなろうとする……？

「俺は強くねえよ
むしろ、まだ弱い」

自分に勝つて、なお弱いと言つた一夏にラウラは驚く

「俺は、司や千冬姉よりも力はないし、何よりもまだ人間性が弱い
と思う……」

そんな俺に最近大事な奴ができたんだ

そいつが今の俺にとって強くなりたいと思つ理由だ

自分の素を氣兼ねなく晒しだすことができる大切なそいつを失いたくない

そいつを守りたい

自分の全てを使ってでも、守りたいからだ」「

そう、その強さの理由はあるの人のような・・・

「だけどよ、強くなることもやつぱり仲間は戦友は大事だと思つんだ

自分一人じゃどうすることもできない時があるからなだからわ・・・

今回のことはこれで互いに洗い流して終わりだ

これからは仲間として、友として仲良くやつぱりせ

・・・一緒に強くなれ

ラウラ・ボーデヴィッヒ

言われて、ラウラの胸には熱いものが込み上げてくる

自分を必要としてくれる

自分と対等に接してくれる彼の言葉を嬉しく思つた

何より今まで軍人として生きて来た中、友という存在ができたこと
に嬉しいと感じていた

「ああ、強くなろう」

織斑一夏・・・

千冬教官と弟だということを認めよう・・・

そして私は戦友として彼と一緒に強くなろう

ラウラは一人の人間として成長した時だった

『恋の恋田』（前書き）

今日は一夏とシャルがメイン

それとその・・・R18描写がある話があるのでそちらを見たい方はノクターンノベルズのほうで探していただいて見てください

この小説サイトのタイトル名で探していただければ出ると思いますが、タグには『一夏×シャル』『オリ主×雛』をつけておりますので

司の厄日

「あ～、終わった～」

一夏がそう呟きながら食堂の席にドッと座り、それに続くシャルル、司、筈

あのラウラのことが終わつたあと、一夏、シャルルは教員から事情聴取をされ、それが終わつたあとに試合が終わつた司と筈の一人と合流をし、少し遅い昼食を摂りに来たのだ

ちなみに四人のメニューは

一夏は海鮮塩ラーメン
シャルルはミートスペゲッティ
司は山菜大根おろしそば
筈は焼き鮭定食

「結局、何が原因だつたんだ？」

筈の質問に一夏とシャルルは首を捻る

「それがわづかんね～

あの時はどちらにしても倒したいから倒しただけだしな

「僕達も原因がわからないんだ」

「そりが・・・」当事者でさえわからないことに三人は謎のまま、納得するしかない・・・

しかし原因はVTSシステム

通称

『ヴァルキリートレースシステム』

過去のモンド・グロッソの部門受賞者のデータをトレースするシステムだ

それを知っている司はもちろん言わない

それは本来、極秘事項扱いのデータだからだ

知らぬ顔で話を聞いてる司は食べ終わるなり、話し出す

「さて、試合が終わったことだし帰らないか?
部屋に帰つて休みたい」

「そうだな、私も同と部屋でゆつくりしたいしな」

「相変わらず仲がいいんだね・・・」

ちょうど羨ましいな・・・

シャルルがそう思ったその時、山田先生がこちらに向かつて来ていた

「織斑軍にデュノア君、それに新城君もここにいましたか」

そう言われた三人

箒が入っていないといつことは男子関連だらうか・・・

その大きなメロンをたゆんと揺らしながら来る姿は男子として目のやり場に困る

(山田先生のはシャルルより大きいよな・・・)

(箒といい勝負だな・・・)

などと思いつつ自分の彼女と比べる雄一人

しかし、つい無意識にそう思った一人に背後から怒気が感じた

「一夏のスケベ」

「司、今日はナシな」

「「なつー?」」「

彼女からの判決に驚く二人

口には出していないのになぜ考えていることがわかるのだろう

女は不思議な生き物だ・・・

「誤解だ、シャルル!

俺は悪気があつたわけじゃない!」

「そつだ!それに俺は箒のほうが好きだ!」

必死に代弁してゐる一人

しかし、その司の発言に問題があつたのだろう

少なからずまだ他の生徒がいる中、意味が違つても男が女に好きだ
発言するのは注目を浴びるわけで……

「場所と誤解を生む言い方をするな！」

「（）ふつ……」

誤解ではないのは照れ隠しだらうが注目されるのは恥ずかしい

見事なアッパーが司の腹に決まった

そんな仲のいい二人に苦笑しながらも真耶は本題に入る

「えっとですね、朗報が会つて来たんです三人に！
実は今日から男子の大浴場の仕様が解禁です！」

「おおー！ そなんですか！？」

てつくり来月からになるものばかりと――

大喜びする一夏

シャワーだけじゃ物足りないのは日本人の文化的な本能だろう

同じ日本人である司も少なからず喜びを感じていた

「それがですね～

今日は大浴場のボイラーチェックがあつたので、生徒たちが使えない日
なんです

でも点検自体はもうおわったので、それなら男子三人に使って貰おうって計らいなんです！」

「ありがとうございますー！」

一 夏は嬉しそうな声で礼を言った

そして現在・・・

一 夏とシャルルは脱衣場にいた

司は？とつと・・・

「まあ、あれだ

恋人仲良く一人で入つて來い

俺は浮氣もするつもりもないし、お前らが入つた後でいいさ

といつ氣遣いのおかげで一人つきりで着替えをしていく

「しかし山田先生も粋な計らいをしてくれるよな

こうして男女仲良く『婚約者』同士で風呂を堪能させてくれるなんて

「『男女』と言つても僕は男で通つてゐるからね」

一夏の言葉に苦笑しながら着替えを脱いでいくシャルル
しかし一夏はシャルルの言葉に驚いていた

「どうしたの、固まっちゃって？」

「……いや、ちゃんと婚約者つて認めてくれたことに感動して
な・・」

「今更だよ・・・」

シャルルは呆れた目で一夏を見ていた

服を脱ぎ、タオルを身体に巻きながら入る準備をした

「それに・・・混浴も男の夢の一つなんだ

しかも大風呂付きといつ
しつかり楽しませてもらおう

「あはは・・・

一夏、手付きがイヤらしく

そつ言いながらも肩に回した一夏の手を振りほどく」ともせず、む

しろ一夏の腕に抱きつきながら

二人は仲良く風呂場に入つて行つた

「今頃、一夏とシャルルはニヤンニヤンしてゐんだろうな・・・」

「いじつな時に何を言ひつい..」

「つまつ、危ねえ！」

野菜を切っていた包丁の先を口に向か、口はそれを仰け反りながら避ける

肉を焼いていたフライパンをよくひっくり返さなかつたと思つ

「照れ隠しに包丁を回くるな..」

「す、すまん・・・

しかし、こきなつあんなことを言ひついな・・・恥ずかしい

顔を赤らめながら答える雛

だからといって包丁を向けるのは危ないだろつ・・・

「つたぐ、ほれ

盛り付けて後は持つて行くぞ」

箒が切ったレタスの千切りの上に焼いた豚のしょうが焼きを乗せ、汁をかける

そしてお盆に『』飯とサラダも乗せ、最後に小皿に持った白菜の浅漬けを乗せる

「じゃあ、一緒に持つて行くか?」

「ああ、お義母様にも会いたいしな」

箒と海奈が俺の彼女として会つてからとこいつも結構仲良くなってしまい、

海奈の願いを良く聞く箒になってしまったのだ

そして今回も・・・

『あ～、匂の食堂閉まつたから』飯作つて持つて来て～
よろびく～』

などと同に

一方的に電話を掛け、なんの返事をすることもなく、一方的に切られたのだった

仕方なく箒にそれを伝えると何の電波を受け取ったのだろうか

いきなりやる気になり、仕方なく同も手近の羽田になつた

「失礼します

新城先生いらっしゃいますか?」

職員室に入るなり、出迎えたのはエドワース・フランシイ・・・
数学教員の先生だ

ちなみに海奈は世界史・日本史担当らしい

「新城先生ね、ちょっと待つてね

新城先生！」

給湯室に行くエドワース
すると海奈と共に出てきた

「ありがとうございます！

待つてたよ！

豚のしきょうが焼きにお新香付きだね！
いただきます！」

お盆を受けとるなり、早速食べる海奈

それを見ていたエドワースはじつと海奈のお盆を見る

「美味しそうですね・・・生徒一人が作ったんですか？」

「はい

息子と義娘が作ったお昼ご飯です！

姑の特権ですね」

「姑ー？」

海奈の言葉に瞬時に振り返るHドワース

その言葉に気づいた司は苦笑混じりに答える

「あはは・・・・

母さんはまだ気が早いだけです

まだ筈とは、交際中です」

「交際中ううーん？」

満更でもない司と筈

その表情は互いに田が合えば笑顔になる恋人同士そのものだった

「う・・・う・・うわ～ん！

今日は榎原先生と飲んでやるー。」

小走りで去つて行くエドワース

「なんで泣いたんだ？」

「まあ、負け組の叫びね」

司の言葉にシレッヒと答える海奈である

しばらくして食べ終わり、筈と海奈が雑談していると千冬と真耶が職員室に入つてくる

「ん？新城に篠ノ乃か」

「あれ？新城君は大浴場行つてないんですか？」

「えつと実は母の昼飯作つてまだ行つてなかつたんです
今から行きますよ」

空になつたお皿の乗つたお盆を見せながら答える同

「そつか、まだ行つてなかつた
なら、もしアイツがまだ入つていたら風呂で泳いでないか確認しと
いてくれ
アイツは風呂好きだからな」

「なら織斑先生が直接行けばいいじゃないです
俺が確認、遊んでたらその場で制裁

いなかつたら・・・自分の部屋に母さんに作った昼御飯が余つてしま
すし、食べますか？

山田先生もまだ昼御飯食べてないんじやないですか？」

司の提案に千冬は真耶と顔を見合わせる

トーナメントの処理に加え、ラウラの件で昼飯を食べる暇がなく、
海奈と同じく食堂にいけなかつた一人だ

ありがたく頂くことにした

そして雑談する筈を残し、司は千冬と真耶と共に職員室を出た

そして現在、大浴場の前にいるのだが・・・

『一夏あ～、ああつー。』

「　　・・・・・」

(。　。　。) 真耶

^ (— — ;) ^ 司

(・・・ポカーン) 千冬

中から聞こえるシャルルの喘息に思わず顔文字のよつた表情に・・

・

(・・・一夏、シャルルやるなら声抑えろよ

防音されていなく更に反響しやすい風呂場だぞ)

もはや弁解の余地なしと判断した司は諦めていたが、ここで思いがけない人物の弁解が・・・

「これは・・・止めるべきだ」

「いや、ダメです織斑先生！」

(*) ハハツ

司は真耶の発言に驚く

教師はそれを止めるべきだね！

しかし、その教師から出た発言が・・・

「今、止めれば教育的にも悪いですし、織斑君とトコノア君の絆を切るきっかけになるかもしません！」

それに世界にはいろんな愛しかたがあります！

この学園だって女の子同士って方は少なくありません！

だから・・・

一夏君とトコノア君とこの組み合わせも中々・・・
(まさかの腐女子ですか！?)

ウへへ・・・ところ笑い方が正しいのだね！

そんなツッコミを内心で行つ

たぶん千冬も同じようなことを感じていてるのだね！

表情からこ困っている感じだ

結局、その場で司も介入なし

そのまま三人は司の部屋で昼御飯を取ることに・・・

「まさか一夏がそつちの趣味に走るとは・・・」

「アハハ・・・一夏君が攻めよね」

氣落ちしている千冬に幸せそうな真耶

司はなんと声を掛ければいいかわからなかつた

（なんて言えばいい・・・

ホントのことを言えば千冬さんの悩みが解決するがそれは一夏たち
本人が言わないといけないし・・・

だあああ！

早く帰つて来い！糞リア充！）

なんといつ言い草だらう

糞リア充は君もだらうに

などという非リア充の作者の声も届かぬまま司は一人が帰るまでこの重苦しい雰囲気を味わつた

司の抱田（後書き）

オマケ

「ただいま～・・キヤツー！」

「幕つー！」

幕が帰つて来るなり司は彼女を抱き締める

困惑しながらも何があつたか聞くと・・・

「もうやだ・・・
なんで一夏とシャルルの問題で俺が苦労しないといけないんだよ！
一時間ずっと千冬さんの愚痴相手疲れた！」

ギュウと抱きつぶ司

普段力ヶ口よかつたり頼りになるがこんな風に弱々しい一面が可愛く見える幕は母性がくすぐられ、司をそつと抱き締める

（今日は甘やかしてやるか・・・）

お姉さん気分を味わつた幕であつた

失恋と成長（前書き）

あれ？

「ウツラを妹キャラにしちゃった・・・

鬼で厳しい千冬はどこに行つた！？

最後、手抜きっぽく見えたらいません

失恋と成長

次の日・・・

「おはよう、二人とも」

「「おはよう」」

いつも通りの朝・・・なのだがなぜか一夏は一人

「シャルルはどうした?」

「いや、なんか朝早くに先に登校したみたいでなんか千冬姉にようがあつたみたいなんだ」

「ふむ・・・」

何気なく聞いた筈は納得したかのように相づちを打つ

そんな一人を他所に司は回らない頭をなんとか回しながら脳内EIS
本一巻を捲つていた

(えつと・・・うーん

そうか一夏とシャルルの混浴イベントがあつたからシャルルが女子として再入学するんだった!)

「んっ?」

けど、待てよ・・・

シャルルは一夏とすでにフラグを立てるわけで・・・

そのまま食堂に入る三人

「ラウライベントは消えるのか？」

筈は俺で・・・

残るは猫と銀狐とロール頭で・・・」

朝食を終え、食堂を出る三人

「銀狐は教室に入つてからで・・・まあ、ロール頭と猫は殺る側で・
・」

教室に向かう三人

そこで雑談を終え、司を指差す一夏

「なあ、筈
さつきから司おかしくないか?
なんかブツブツ言つてるけど・・・」

「気にするな、一夏

ああいことは大抵何か起きる時だ」

「・・・なんか嫌な予感するが気のせいいか?」

「案するな一夏

私は嫌な予感はしない
つまり私に被害はない
司もたぶんないだろう

安心したよ一夏

「いや、安心できねえよ！

つーか、お前幼なじみに酷くねえか！？」

「当たり前だろ？？

一夏と司だつたら躊躇なく司を取るぞ」

(トト)

幼なじみの容赦ない一言にオーネーと落ち込む一夏

そんなこんなで教室に入る三人

「お・・・来たな織斑一夏」

そこで迎えたのはなんとラウラであった

「その昨日はすまなかつたな・・・
いや、それまでの行為や態度もだ

私自身の我が儘で周りに一般人に迷惑をかけた
ホントにすまない
許してくれるだろ？？」

(。 。 。) (。 。 。) (。 。)

あんた誰ですか？

きっとクラスのほとんどが「こんな」と思つたはずだ

冷徹無比
軍人気質の一匹狼

そんな近寄り難い雰囲気だつたラウラがあの日敵にしていた一夏にしおらしく謝つていたのだ

「許すも何も昨日言つたろ？」

もつ怒つてないし、友達にならつて言つたろ？

強いて言つながらクラスのみんなにも謝つて友達になつてもうつんだ

「謝つたら許してくれるだろ？ か・・・」

「謝ることが大事なんだ
ほれ、伝わるよ？」言つてみるよ」

一夏に押され、教室の前に立つラウラ

「その・・・みんなにも傲慢な態度を取つてすまなかつた
これからは対等・・いや、下でもかまわない・・・
だから許して欲しい」

下を向きながらも上目遣いで前を見るラウラ

背が小さいからか更にその可憐さが出ていた

「「「「ラウラちゃん...」」」

クラスの女子がラウラに群がる

「ラウラはこきなり困まれ、抱き締められたことに困惑する

「私達のことをお姉ちゃんって言つたら許してあげるー。」

そう一人の女子が言つと他の女子もウンウンと頷く

「ラウラは困惑しながらもやつと口を開く

「お・・お姉ちゃん?」

バタバタ!

数人の女子が鼻血を出しながら倒れる
その表情は幸せそのものだ

「うん、許してあげるねーラウラちゃん!」

笑顔で言われたラウラは許されたことについて笑みが生まれた

「良かつたなラウラ」

「ああ、ありがとう一夏
これからもよろしくな
後は簾だな・・・」

「ああ、よろしくラウラ!」

「あの簾もお姉ちゃんと呼んだほうがいいか?」

小首を傾げるラウラにガチリと固まる簾

実は先ほどラウラの発言に簾もぐつと来たよつだ

「その・・頼む・・」

「わかった、簾お姉ちゃん」

「・・・アハツ」

なぜか簾が少し壊れた気がしたが気がしないほつがよこだらつ

そしてラウラはセシリアに歩み寄る

「セシリア・オル「ツ」

ホントにすまない・・・

私のやつたことは「もうこいですわ」

「ラウラの言葉がセシリアによつて遮られる
そのため息をつきながら続きを話す

「今やら過去のことをグチグチ言つのは情けないです、何よりこ
れくらいのことを許すべしの器の大ささはイギリスの貴族として
合わせ持つべきですわ

許す代わりに・・・」

「代わりに?」

「わたくしをお姉さまと申ごなさい」

腰に手を当て、やうやくセシリアにラウリゼー・シロコ笑つて答える

「わかつた、セシリアお姉さま」

「・・・ウフフ」

セシリ亞も篠同様に壊れたようだ

そこで司が入る

「篠がお姉ちゃんなら俺はお兄ちゃんかな?
篠の恋人だし・・・」

「失せろ、新城司」

「「「えつ・・・」「」」

先ほどの可愛いラウリゼーへ行つた?と細ほほど冷たく低い声が
ラウリから放たれた

余裕の表情で近づく司を睨みながら威嚇するラウリ

更にラウリは続ける

「貴様だけは許せん

私を雑魚扱いにした貴様は許せん

篠お姉ちゃんの恋人というのがムカつくがそれは口出しどきる立場
じゃないのが悔しいがな

お前を兄呼ばわりするくらいなら一夏のほうがマシだ

なんといつ差別

しかしさう言われた司はそのまま口々と篠に抱きつく

「最近、妹が反抗期だよ篠」

「いや、お前が悪いだろ」「

篠は抱きついた司に竹刀の先で、
一夏はどこからか出した巨大ハリセンで頭を叩く

そんな漫才をしてると教室に千冬が入つて來た

「お前ら席につけ

今田は改めて転校生を紹介する
いや、私からも紹介しよう」「

はて、千冬自ら紹介する転校生とは？

そんな疑問を浮かべながら席に着くと入つて來たのはクラスメート
がよく知る人物だった

「つむ・・・あれって」

「デュノア君？」

「まさか美少年じゃなくて美少女だったの…？」

嘘ではない本物の美少女である

シャルルはニッコリ笑つて答える

「改めてよろしくお願ひします
シャルロット・デュノアです
そして…」

「立て、一夏
そして私の横に来い」

千冬が教室内にも関わらず、『一夏』と言つたのはプライベートということだ…

(ちょっと待て…まさか、まさか…)

そのままかであった

「デュノアはコイツの女だ
そして今日、私も認めた
いや、認めてしまったのだ」

「えええええっ…？」

「まさか…」なると
そうなるとあの一人は…

ラウラを見るなり祝福のような眼差しだったので心配なかつたが・・・

セシリ亞は・・・

下を向いていた

「まあ、聞きたい奴がいるだらう」
一限目は少し遅めにしてやるから聞き終えるまでは、解散

千冬の合図で一人に群がる女子

しかしセシリ亞だけはポツンと座っていた

そして席を立つなり教室を出ていく

「セシリ亞・・・

同はセシリ亞を追いかけようとしたが・・・

「司・・・

ぐっと肩を掴む筈

同じ女子としての判断だらう
司は渋々、筈に従つた

「あら、鈴さんもいたのですね」

「もうこうあなたもね」

屋上でバッタリ会つ鈴とセシリア

セシリアは黙つて鈴の隣に立ち、同じように構越した景色を見る

しばらく一人は黙つて景色を見ていた

・・・が

「こつまでそうあるつもつだ、小娘共」

「千冬さん・・・」

「織斑先生・・・」

振り返るとそこには腕を組んでいた千冬がいた

はあ～とため息を吐く千冬は一人に近づくとそつと抱き寄せる

「女はな・・・恋をして失恋するたびに強くいい女にするのだ

失恋したお前らなら強く男共の田を惹くいい女になる
だから今だけは我慢せず泣け

「う・う・う・あああー！」

きつと彼女達一人は女として一人の人間として強くなるだろう
こうして二人の少女の初恋は散ったのだった

失恋と成長（後書き）

けど妹ラウラは萌えると思ひ

千冬の許可（前書き）

千冬が性格崩壊

千冬の許可

早朝・・・職員室にて

「失礼します、織斑先生いらっしゃいますか～？」

(き・・・来た・・)

昨日のあの場の遭遇で寝不足になつている千冬

その前の机である真耶も寝不足だが、その表情は幸せそうだ・・・

「実は僕の学園生徒としての『変更』をお願いしに来たんですが・・・」

変更?

その単語に首を傾げる千冬と真耶は話を聞いてみるとする

力クカクジカジカ

小説仕様って便利だね！

つと、

まあシャルルが自分の性別が明かしてシャルロット・デュノアとして再編入することを伝えたのだ

そして一人の反応は・・・

「やつたー！

私の心配は嘘だつた！

一夏は正しい恋愛をしていた！

義妹よ！あの一夏を頼む！

超ハイテンションMAXで喜ぶ姿はまるで逆転サヨナラ勝ちのようだ

嬉しさのあまりシャルロットを抱き締めている千冬

そして真耶は・・・

「なんで・・・なんで」のタイミングで・・せつかくの髪リライフが・・・

一発逆転サコナラ負けのよつな落ち込みよつな落ち込み様である

シャルロットは千冬に抱き締められながらも千冬の面葉に答えるかのように自分からも抱きつくる

「これからもよろしくお願ひします！

えっと・・・千冬お義姉さんですよね？」

恥ずかしながらも上田遭いでやつ訪ねて来るシャルロット

しかし、その『お義姉さん』とこひ面葉に先ほじまで感情を止められた熱が急激に冷めていく

(ん？

今コトヤツ、

私を義姉と言つた？

・・・ いつの間にそんないどこ？

いや、待て・・・ 先程私はなんと言つた？）

先程の回想

『やつたー！

私の心配は嘘だつた！

一夏は正しい恋愛をしていた！

『義妹』 よーあの一夏を頼む！』

（・・・ 確かに言つた

私が言つた

つい勢いで言つてしまつたあああー！）

顔に出さず、内心で頭抱え叫んでいる千冬

するところへ・・・

「あら、織斑先生
デュノア君と抱き合ひちゃってどうしたんです?」

海奈が二コ二コ顔で現れる

そんな海奈にシャルロットは満面の笑みで説明した

「僕が正直に自分は女子ですって明かしたら、
僕と一夏の交際を千冬お義姉さんから認めてくれたんですー!」

「良かつたわね~、シャルルちゃん
シャルルちゃんならきっといいお嫁さんになるわね~

優しいし、気が利くし、お料理もできるもの

「えへへ」

シャルロットは海奈に頭を撫でなられ、照れている

そんなシャルロットを見ながら千冬さつま・・・と考え込む

(確かにコイツは性格や容姿など凄くいいな・・・
仮にオルコットの場合・・・

ダメだ・・あの性格と妙なドジ加減といい不安だ・・・

あのセカンドは・・・

内弁慶だろう・・・一夏が心配だ・・・

ラウラは?

軍人一筋のアイツは割りとしつかりしてるが・・・世間知らずなのがな

そう思つとやはりデュノアが一番『普通』なんだよな・・・

イギリスの貴族にして代表候補生

家柄は普通だが中国の代表候補生・・・

人体実験から生まれた15年間軍人であり、現役軍人のドイツ代表候補生・・・

そして凡庸型ISの世界シェア第3位の会社・・・デュノア社の社長の腹違いの娘であり、フランスの代表候補生・・・

この中に何の突飛した才能も持たない、普通の一般的な女子はいるだろうか・・・・・

否、いない・・・

しかし、性格的に選ぶならシャルロットが一番「心地いいのだ・・・

「それに織斑先生

義娘や義妹ができるのはいいですよ

いろいろ手伝ってくれますし、私だったら纂ちゃんなんだけど・・・
まるで娘ができたみたいにいろいろとおしゃべりしたり、お料理したりつて楽しめるんです

だから織斑先生も義妹ができたつて思えればいいんですよ

そんな『ぐるぐる考えるのは疲れるだけです』

(これが子供を持つ親の考えなのだろうか・・・)

確かに千冬は一夏を自分一人で育てて来たため、子育ての大変さは
知っている

しかし、それでも千冬は一夏の『姉』なのだ

そこが千冬と海奈の違いだろう

千冬はふうーと一息吐くと改めてシャルロットと皿を合わせる

「はあ～・・・

なんでこう問題が次やら次へと・・・

シャルロット・デュノアで合ってるな？」

「は、はいっ！」

千冬から鋭い眼差しを受け、緊張しながら返事をするシャルロット

「お前は一夏を、

私が今まで私が守つて来た一夏を預けてもいいか信用がまだ足りない
確かに今一夏の周りにいる女子と比べたら安心できるが、私からすればまだまだだ

そんな一夏を好きになつた理由を言え

「僕は・・・僕はただ守られるのは嫌です

一夏に守つてやるつて言われた時は嬉しかつたですが、ただ守られる存在なんて嫌です

僕は一夏のパートナーで居たいです

一夏の背中を支えて、守れるパートナーとして・・・

僕は一夏の恋人でも互いに背中を預けられる
そんな恋人になりたいです！」

「ただ守られる存在は嫌か・・・」

千冬は一瞬躊躇も、じつとシャルロットを見る

シャルロットは不安を押し殺しながらも強く千冬の瞳を見ていた

「…………いいだろ？？」

交際は認めてやる

その一言にシャルロットはパアッと笑顔が溢れた

しかし、シャルロットの頭に元ビックからか取り出した出席簿が直撃する

「ただしー

声は抑える、馬鹿者

風呂場の声が響き渡っていたわ、アホ！」

「あひ・・・」

若干涙目になりながら頭を抑えるシャルロット

やはり千冬の出席簿アタックは相当痛いよつだ

だが、次の千冬の行為にシャルロットは痛みを忘れた

「だが、まあ敵が多いこの学園にあの鈍感が気づかないだろう……

そこら辺は安心しる
私がサポートしてやる

その代わり、私の信用を大きくしてみろ」

なでなでと千冬が自分の頭を撫でながら微笑む笑顔に同性でありながらも見惚れてしまいそうになった

しかし、すぐさま意識を戻したシャルロッテは元気よく頷いた

せっかけは保健の授業（前書き）

無性に甘いのが書きたくなりました

本編とは全く関係ないです

読まなくても構いません

ちょいとR・15以上かも・・・

糖度50%くらいです

せつかけは保健の授業

「司……! れから何をするつもりだ?」

ベッドに押し倒された筈は田の前に笑みを浮かべている司に聞く

これから出来事の予想が簡単すぎて引きつった笑みしか出ない筈

「わかつてるだろ……

今日の保健の授業聞いてたら我慢できなくなつた」

司はそう言しながら自身の上着を脱ぎ捨てる

「……まだ風呂に入つてないんだが?」

「じつせ汗かくし……」

筈の上着を手慣れた手つきで取つていく

言つていることとは反対に筈は抵抗せず、司に身を任せているようだ

「夕飯の仕たつ、あつ！」

「今日は学食でいいだろ

てか、笄も準備万端じゃねえか」

「あつ・・・」

身体に腕を巻き付けながら司を恥ずかしそうに上目遣いで見る

その顔は火照つてあり、
瞳も少しばかり潤んでいる

男からすればなんとも本能を刺激する姿だらうか

そんな彼女の姿に司は笑みを浮かべた

「大人しく食べられ
いただきます 」

「あつ・・・ダメーー！」

そのまま大人な夜を過ごすお二人だった

きっかけは保健の授業（後書き）

やつぱり攻められたより攻めるほうが好き

友達からは「と」言わましたが彼女からは「れ」と言わされました・・

同の技術（前書き）

更新できなくてすいません・・・

実は携帯が壊れまして小説家にならひにインできなくて・・・

この話はぶっちゃけ最後だけが本編に関わる話なんで他はすっ飛ばして構いません

第や一シャルのイチャイチャは全くありません

司の近距離射撃の話です

ただいま活動報告にてアンケート中

司の技術

「だから・・・正確性を出すならスラスターに割くエネルギーを増やせばいいのよ！」

「それだと零落白夜の威力を落とすしかないだろ！」

「必要最低限以外使用してる時間を減らせばいいでしょ！」

「常時展開してるからすぐエネルギーがなくなるのよー。」

鈴と一夏は白式のスラスター整備に互いに意見を言い合っている

今日は機体整備の日であり、専用機持ちだけしかここにはいない

整備科の人間もいるべきではと思うとだろうが使用者はやはり操縦者が最終的に調整するのであって整備科の人間がいない時に整備できないとこうのはよくないのだ

だからこいつして操縦者だけで整備する時間を設けているのだ

で、今は近距離型と射撃型で別れているのだ

「やはり何かしら対応はしたまつがよいのではないか、セシリアお姉様」

「そうですね・・・」

「俺みたいに近距離射撃ができるよひとするかもしくはラウラみたいに近接武器をつかるかだ」

「僕は何かしら近接武器を持ったほうがいいと思つたすがにインターチェプターはね・・・」

現在セシリアのブルー・ティアーズのデータを見ながら射撃組はこうして悩んでいた

セシリアの唯一の近接武器
インターチェプター

だが、それは近接武器でありながらあまりにも心細い武器であった
「そもそも同さんはどうやって取り回しの難しい狙撃銃で近距離射撃をしてるんですの?」

その意見にはラウラやシャルも同意見のようだ

「近づかれたらそれだけ近くに標的がいるってことだろ?
後は銃口が敵の機体に当たつて撃てなくなるのを防ぐためにスラス

ターで少し下がる

で、あとは一瞬だけスコープを覗いて微調整
零距離射撃は威力大だしな

例えば・・・

シャルはさ、銃撃戦のゲームとかやつたことあるか?
パソコンのオンラインゲームみたいなの」

「一応、かじつた程度ならあるけど」

それが今、何の関係が?
三人の表情はそんな感じだ

「クイックショットは聞いたことがあるか?

あれと同じ感じなんだけど」

「えええ・・・・・」

聞いたことあるシャルは驚きの声をあげる

だが、そういうゲームをやつたことのないラウラとセシリアわけが
わからず、苛立ちを見せる

「どうこう」とimuthの?..」

「ええい、分かりやすく説明しろ新城！」

セシリ亞はシャルに詰めより、ラウラに至つては司の胸ぐらを掴んでいる

「ちよ、落ち着けラウラー。
シャル止めてくれー！」

司が苦笑しながらもシャルに助けを求める

それに答えるかのようにシャルは提案した

「ラウラはパソコン持つてるみたいだし、聞くより見た方が早いと思つ」

てなわけで一同（射撃組のみ）ラウラもとい千冬の部屋に入る
なぜ千冬？
その疑問にまず説明しよう・・・

それは
ラウラの相部屋になる女子生徒がいなく、ラウラの要望で千冬の部

当人は拒否したもの
知人であり、同じ女同士だから問題なし

そう周りから固められ、千冬は渋々了承したのだ

シャルとセシリアはあの完璧超人の千冬の部屋といふことで緊張した表情だ

しかし・・・

「うわ・・・汚な

「すまない、朝やる暇なかつたからな・・・」

散乱してゐる衣服や酒ビンに缶など酷い有り様だ

それにより一人は一気に緊張が解けたようだ

ラウラは深いため息とともに毎朝こんな状態になると愚痴混じりに
説明する

一応毎日片付けをしてゐるようだが今日は忙しかつたようだ

「シャル、なんかオススメのシューーティングオンラインゲームあるか？たいてい、どのゲームでも俺はクイックショットできるから」

「ん~、わかった

一応検討ついてるから

会員登録とゲームダウンロードやっておくよ

だから司とセシリアは手伝って来て」

シャルはラウラを指指す

そこにはせっせと片付けるラウラが・・・

領いた司とセシリアはラウラの元に行く

「片付け手伝いますわ」

「ありがとうございます、セシリアお姉様
では、衣服の片付けを頼む」

「ええ、わかりましたわ」

洗濯力ゴを持つていたラウラはセシリアにベッド周りを指差しながら指示を出す

だが残された司は慌ててラウラに詰め寄る

「なあ、俺は！？」

「ああ、忘れてた

貴様だけよく忘れる体質みたいでな」

「扱いひどくね！？」

『司のシシ』「//のよひなー言ヒタウラはため息と一緒に返事を返す

「貴様の印象は正直最悪だ

なぜ貴様のような男が第お姉ちゃんと付き合つてゐるか不思議だがな

「ちりの言葉で『つあじゅつ』だったかな・・・」

こんな女だらけの学園に第お姉ちゃんみたいな良い人間と交際して
る貴様なんて落第すればいいのに・・・」

「誰だ・・・こんな知識をつけた上に毒舌少女にしたのは・・・原
作と違うじゃねえか」

あまりの変わり様に『司』は呆然としていた

そんな『ヒラウラ』は指示を出す

「缶類の片付けと台所の洗い物をやつておけ
サボるなよ？
それと衣服には1mmも触るなよ?
触れたら問答無用で第お姉ちゃんに
「新城が織斑先生の部屋を物色してた」と報告するからな」

「そんな嘘が通るわけ」同居人の言葉であり、女の嫉妬は怖いぞ?」

司の言葉を遮り、冷ややかな笑みを浮かべるラウラ

主導権を握られ、司はラウラに従つた・・・

まさに女尊男卑だ・・・

「ダウンロードまで終わつたよ~」

ちゅうじ掃除に区切りがついたところでシャルの一聲がかけられた

司がシャルと交代し、椅子に座りマウスを動かしていく

そしてパソコンの[画面はアップデート]画面からゲーム画面に変わる

「ショットアタック・・・

すいふんシンプルな名前だな・・・」

と呟きながら司はシャルと交代してキーボードの前に立つ

そして画面にはキャラクター名入力画面が映る

「HIS学園生でいいかな・・・

いや、待て……シャルは会員登録時に生年月日とか正しいの入力した?」

まさかと思いつつ聞く司

そんな司にシャルはキヨトンとした表情で答えた

「そりだけどマズかったの?」

その答えに司はため息を吐きつつ名前を変更する

「このひつじゲームではハッキングとか個人情報流出しやすいから基本的情報入力は適当でいいんだよ……個人情報は正式だし……

名前は……「大女子大生」

その名前に女子三人は引いた……

「司……君、男だよね?」

「まさか、そっちの趣味があつたとは……」

「不潔ですわ!」

酷い言い様である

またもやため息を吐く司はちゃんと説明した

「あんな・・・こんなゲームだと男なのに女名とか・・・俗にネ力
マなんだがザラにいるぜ?」

逆に女で男、ネナベもいるしな

まあ、これも個人情報流出対策みたいなもんだ、俺はな
第一、ただ単に名前がこれただけだ」

そう説明するも妙に納得しない三人
だが司は無視し、ゲームを始める

「サブにデザートイーグルとメインは・・・L96A1ないのかよ
他は・・・ロシアのSV-96とドラグノフ・・・お、フィンランドのTRG-21があるな
これでいいか・・・」

司は慣れた手つきで進めて行く

そして画面は変わり、ゲームルーム画面へ

「ずいぶん人数が少ないのですね・・・」

「いや・・・8-8なら結構な人数だぞ?」

まあ、プレイすればわかるさ

これはチームデスマッチ

決められた点数まで早く殺せば勝ちだ
もちろん死ねば生き返るしな

初心者はいつこうチームスマッシュで鍛えるべきだな

などと云つて、画面を見ながら操作する

ゲーム画面に映るステージは港のようだ

貨物船が相手の陣地であり、こちらが港の倉庫のようだ

中間には多数のコンテナがあり、障害物の多いステージだ

「まずはスナイパーはいつやつてスコープを覗いて打つよな？」

敵を狙撃しながら説明する司はベテランなのだろう、次々と点数を稼いでいく

「じゃあクイックショットを説明するけど
まあ、とにかく見てくれよ」

そこでは画面に集中する

自分のキャラを操作し、前線に出る

その間も司は移動しながらも敵を倒していくので

すると急に前からナイフを持ったプレイヤーがコンテナの陰から飛び出して来た

だが、司は焦ることなく、そのプレイヤーに銃口の向きを合図させ、一瞬だけスコープを覗いた瞬間撃つ

結果は敵プレイヤーに見事に命中

倒したのだ

しかしレーダーには背後にまだ敵が映っている

振り向けばアサルトライフルを今にも撃とうとしていたキャラクターがいた

司は数発ダメージを喰らいながらもまたもやクイックショットで倒す

その瞬間

司のキャラクターは狙撃され、死んでしまった

「まあ、こんな感じがクイックショット

一瞬だけスコープを覗いて照準の微調整

だいたいの照準は基本的銃口の向きってことさ

で、俺はこの銃口の向きで照準を合わせのをHISに転用してるわけだ

スコープを覗けば視界は狭くなるがクイックショットなら銃口の向きで合わせから視界が狭くなるのは一瞬だけ

それじゃあ死んだら交代つてことでセシリ亞は訓練だけど他一人は普通に楽しみなよ

一応、N押せば死んだ時にアサルトライフルと交換できるから

訓練もあるがたまにはこいつやって遊ぶのもいいだろ？

三人の様子を見ると・・・

ラウラ

「ええい、リロードが遅い！

A君はリロードしやすいはずだろ？」

さすが軍人

連續3キルを叩き出した

しかしキャラクターの動きに不満があるのか
愚痴連発である

セシリ亞

「ああ、もう当たりなさい！

ああ、

後ろから！

ナイフ！あああ！」

後ろを取られ、前から挟み撃ちになり、大慌て

見ていて笑えるプレイだった

シャル

「確かにGで武器捨てるんだよね・・・」

撃つて敵を倒すなり武器を捨て、相手の銃を奪い、次の敵を撃つ

それを繰り返し、見事5キル

リロードなしでやつたそれはまさに高速切替のようだった

そして司

「よ、ほい、孤城チキンはボムで死んでろ!」

コンテナの影から素早く狙撃し、一人を倒した後
三方をコンテナに囲まれたバリケードのようなところから籠つてい
るところにグレネード爆弾を投げ入れる

すると三人が吹き飛んだ

次の瞬間、いきなり現れたアサルトライフルに撃たれながらもコン
テナの影に一度隠れる

そして追いかけて来た敵を一瞬だけ銃口を出し、狙撃する

更にもう一人追いかけて来たのに気づいた司は素早く狙撃

1人を倒したが、そこでスナイパーライフルのマガジンの弾切れになる

すでに敵との距離はリロードしてる暇すらない距離だ

直ぐ様サブ武器のハンドガン、デザートイーグルに持ち替え、数発撃ち込んでヘッドショットを決めたがそこで飛んできたグレネード爆弾によって死んでしまった

計8キルだ

「凄い・・・強いね司」

「なんですぐに照準が合いますの・・・それに敵の位置も・・・」

「お前よりも下手というのが少々不満だが確かに巧いな・・・」
感心して見ている3人に司は満面の笑みで答える

「まあ、経験だな

アドバイスは視界を広く
やられそうになつても落ち着いて

あとセシリアにアドバイス
これはIISでのアドバイスね

正確に狙い撃つのもいいけどFFHointや誘導射撃も戦略に入れるといいよ

そしてもし、クイックショットができるようになればBT兵器も持つセシリアは鈴や一夏のような近距離メインの敵からすれば天敵だわ

離ればBT兵器も兼ねた射撃の兩

近づいても零距離射撃による大ダメージ

だから頑張つてみろよ

近距離武器をつけるのはそれからだ

「・・・わかりました

早速、パソコン買って特訓しますわ！」

セシリアはグッと拳を掲げる

そんな姿に同は二口と微笑んだ・・・

「ただいま

司が重い足取りで帰ってきた

「お帰り、だいぶ疲れてるみたいだな・・・」

私は受け取った制服の上着をハンガーにかけながらそう声を掛けてやると司は笑みを浮かべていた

「疲れたけど、楽しかったさ

今日はセシリ亞がな・・・

楽しそうに話す司に相づちを打つが、正直、全く頭の中に入っこなかつた・・・

(専用機か・・・)

自分がだけの力が欲しい・・・

司と共に背中を預け、歩める力が・・・

私はそのことで頭が一杯だった

前の謎の無人ＩＳ事件やラウラの時、司は一人で解決しようとした

だが私にとっては不安、何よりも自分が好きな人の力になれないのが一番の不満だった

「ようこそさま」

「片付けはやつておくから、大浴場に行つたらどうだ？
確か今日は男子が使える日だろ？」

「おひ、サンキュー
行つてくれるぜー。」

手早く準備を済ました同は笑顔でそいつになつ部屋を出て行く
それを確認した私は携帯に手を伸ばし、ある電話番号の前で指を止
めた

「・・・嫌いな姉さんだけじ、」の時ばかりは感謝しよう

もしもし・・・

元気よく電話に出た姉に籌はそつと自分の気持ちを打ち明けた

胸を揉んでも大きくならないらしい（前書き）

アンケート募集中
詳細は活動報告にて

胸を揉んでも大きくならないらしい

「なあ、3人とも」

一年の中で蒸し暑い梅雨が終わつたにも関わらず、しつしつと雨が
降る土曜日

司、篠は一夏、シャルの部屋にお邪魔していた

そんな中、クーラーの効いた部屋でゴロゴロ談笑していた時、
突然、一夏が何か思い出したかのように話題を切り出した

「明日、Wガートしないか?」

その発言に3人は我が耳を疑つた・・・

「ふー、いい天気だな
夏らしい天氣だ」

「まさに『テート日和だな』

翌日の日曜日

待ち合わせの駅前の時計の前で一夏は手で遮りながら空を見上げ、司は周囲を見渡していた

一夏の服装は白い七分シャツ、茶色の革ベルトにメッシュの入ったジーンズ

左手首にある黒の腕時計

シンプルだが季節的にも程よい私服だった

司は黒と灰色の縞模様の七分シャツに黒のジャケット、紺色のジーンズ

長い髪は下ろさず、ポニーtail縛っている

一人の姿はまさに白と黒だ

「けど、まさかお前から『テート』って言葉を聞くとは思わんかったわ」

「失礼な、俺だってそれくらいの知識はある

それにどのみち買い物はしないといけなかつたしな

(知識はあっても超絶鈍感じゃ意味ないだろ)

口には出でずにして思つた所だつた

そして今日は来週行われる臨海学校で水着が必要になるのだ

そこで今日は水着を買ひついでに『テート』といふことになつたのだ

すると前から見知つた黒と金が歩いて來ていた

「お待たせ、結構待つた?」

「いや、それほど待つてないさ

笄はずいぶん大人っぽい服だな
うん、綺麗だよ」

「あ・・ありがと・・」

筈はニーツ「コリ」と笑みを浮かべた
その笑みは満面の笑みだ

筈の服装は白で小さな花柄の模様が入った薄い生地のシャツに黒で
袖口を折ったジャケット、ジーンズに茶色のサンダル
首には金色のネックレス

そして普段ボニー・テールな髪が下ろされているためか、新鮮であり
大人っぽかった

和風が似合つ筈だが、じつはお姉さんっぽい服もなかなかだ

「一夏、どう僕の服？」

「似合つてるよ、シャル
華やかでオシャレだと思つぜ」

「一夏もシンプルでカッコいいよ」

シャルの服は原作とだいたい一瞬であり、半袖のホワイトブラウス
の下にグレーのタンクトップ、ティアーズスカート
違うと言えば、髪型がサイドテールに纏めているところだろう

可愛さを更に引き立てていた

「じゃあ、電車に乗りつか

おこで、簾」

司はそつと簾に手を差し伸べ、簾はその手に自然と自分の手を重ねる
その一連の動きが息ぴったりカッフルであり、エスコートされてる
簾をシャルは羨ましく思い、一夏を見る

しかし・・・

「どうした、シャル?

電車のチケット買いに行ひばせ

「はあ・・・期待した僕が悪いんだよね

「ん?なんか言つたか?」

「一夏が馬鹿つてことー
この二ブチンー!」

「・・・どうか変な」と言つたか?」

少しあは成長?したがやはり唐突木づぶりは健在だった

「じゃあ20分後にここな」

駅前の大好きなショッピングモール『レゾナンス』
その2階にある水着売り場に来ていた

司はその男性用と女性用の境界線の通路を指差す

司と一夏はスタスターと男性用水着売り場に向かつた

「これでいいか」

司は決まったか? 司? 「

一夏はネイビーブルーのシンプルな水着を手にしたといひで先ほど
まで一緒にいた司の姿が見えないことに気がついた

一回り男性用水着売り場を探したところで試着室から出てきた司を見つけた

「司、その格好・・・」

「おひ、カツコよくな?」

(高校生がする格好じゃないだろ・・・)

内心でそうシッ 「む一夏

司の格好は紫に近い赤色の水着に黄色のアロハシャツ
髪はオールバックにし、サングラスをかけている

正直、20代のお兄さんがするみたいな格好だ

「まあ・・・いいんじゃねえか」

ツツコムのも面倒だと思った一夏はそう相槌を打ち、司と一緒に会
計に向かつ

「あれ? 篠達はもう買い物終わつたんか

「2人とも早いな~」

合流地点に戻れば篠とシャルは待つてたかのよつよつ歩み寄る

「ううん、ちょっとね・・・僕の水着は一夏に

「私の水着は司に選んで欲しくてな・・・」

「じゃあ実物見に行くか」

一夏の決まりの一言に司と一夏は女性用水着売り場に入る

「いざ入ったが・・・」

「恥ずかしいな・・・」

一面、女性用の水着が視界に入る

水着売り場は下着売り場ほど抵抗感はないものの、やはり恥ずかしい

目のやり場に困るのだ

それから2人は互いの彼女の水着を選ぶために一度別れた

司は篠と一緒に水着を探すが・・・

そこには落ち込んでいる篠が・・・

「どうした、篠？」

「・・・ない」

「なんて言った？
すまんがもう一度言つてくれ」

ポツリと呴いた言葉が聞き取れず、もつ一度と促すと筈はガバッと顔を上げて答えた

「私のサイズに合つ水着がないんだ！」

「・・・・・」

半ば自棄に答えた筈に『はつい』言葉を失った

サイズに合わない水着

瘦せているのはいつも夜に見ているからわかるため胸のサイズだとわかつたが試しに聞いてみたところ・・・

「・・・ Eだ」

「マジで！？」

「おかげで買える種類が少ないので！」

まさかここまで育つといふとほ・・・

驚きながらも内心でガツツポーズを決める『はつい』

すると筈が2着の水着を持つてくれる

「サイズがあるのがビックリしかないんだが、選んでくれないか？」

差し出されたのは

白い生地に黒の線が入っており、胸元にリボンがあり、首後ろで紐を縛るタイプ

黒い生地に胸元は金色のリングが左右の胸の生地を繋げるようについていて、こちらも首後ろで縛るタイプだ

（白は原作と一緒に黒はアダルトなビキニ…。
どちらも捨てがたいが…。）

司は水着から篠の顔へと視線を移す

見れば彼女はチラチラと白の水着を見ている

「（篠は意外と可愛いものが好きだしな…。）

白こうこうにするよ

こいつのまつが篠には可愛いと思つしな

「…そつか、じゃあ会計を済ましてくる」

「…つたぐ、可愛いな」

嬉しそうに笑みを浮かべながら会計に向かう篠の姿に司は惚れ直す
気持ちになる

正直に言おつ

端から見ればリア充、社会的に死ねばいいと感じる表情だ

余談だが一夏達の元に行けば原作通り試着室の前でお説教が始まつていたので筈と司はそのまま一人つきりでテーントをし、その空気は糖分70%だつたとさ・・・

胸を揉んでも大きくならないらしい（後書き）

胸を揉むと胸にある細胞が死滅するから揉むと大きくなる説は黒らしい

実際揉まれても大きくならなかつた（親友説）

今日は短め

一シャルは後半カットしてしまいました

すみません

アンケート、待つてます！

海奈せいか (前書き)

海奈視点

先に臨海学校の温泉に行った山田先生と海奈を書いてみた

海奈はうです

「暑い・・・」

私はそう咳きながらもパソコンの画面を見ながら文字を打つていく
「これが人間界の脅威なのね・・・」

私はタオルで汗を拭いながら仕事を進める

今やっているのはEIS学園への報告書の制作だ
来週行われる臨海学校の実地調査の報告なのだ
山田先生と同行してものの山田先生は部屋を出て行つたきり帰つて
こないため、こうして一人で制作をする羽目になつてている

何より少しでも経費を安くするため一番安い部屋を取つたのだがク
ーラーはついておらず、扇風機一台のみ

今は真っ暑間なため炎天下だ

そんなので暑さが和らぐはずがない

私は永らく神界にいたため『暑さ』を忘れてしまつていたのだ
そのせいか、顕現した身体は暑さに全く抵抗力がなくなつていたのだ

「力使って涼しくしちゃ おうかな・・・」

自分の力は水

近くに海水があるためこじら一帯の温度を下げるのは息をする程度のように簡単なのだ

空にいる奈に向ける

それだけで海奈が見ている10kmほど先の海で渦潮が起き、竜巻によつて海水が空に立ち上る

海水が遙か上空まで溜まつたといひで海奈は広げていた手を閉じる

その瞬間、莫大な海水は霧のように霧散した

しばらくしたあと、辺りはひんやりとした空気が漂つた

「新城先生！」

ビクッウウ！

いきなりの山田先生の登場に心臓が止まる勢いでびっくりした

「どうしたんですか、山田先生？」

冷静さを装いながら笑顔を向ける
内心は心臓ビクビクだ

「さつき外で凄い自然現象が起きましたよ！

急に竜巻が起きた瞬間、空に水ができたと思つたらいきなり消えて

しまったんです！」

それは自分がやりました

内心で笑みを浮かべる

誰もこんな一教師がやつたとは思わないだろ？

悪戯が成功したような気持ちが私には心地良かつた

わひと・・・・

「まあ、そんなことが起きたんですね
私は全く気づきませんでしたよ」

「ええ！？
音も結構大きかったですよ！？」

身体も小さいからか「口」が変わる表情は可愛いと思いつつ、ささやかな復讐をする

神である自分が山田先生が何をやっていたかなど調べるなど造作もない

「報告書の制作を『一人』でやっていたので集中していたのでしょうか

山田先生がいなくて大変でした

確かこれは今日中、しかも夕方までの報告ですし

「あ・・・」

しまった・・・

そんな表情だ

すっかり忘れていたみたいだが、忘れていたからと言つて暑い中報告書を制作した私のストレス発散には足りるわけなく

「例え山田先生が海に夢中で視察といつ名田で遊んでいたとしても私は気にしませんが・・・」

サマーと山田先生の顔が青ざめる

そして顔にはどうして知つている?と書いてある

「できるなら私もしばらく休憩が欲しいのですがよろしいでしょうか?」

「は・・はい

どうぞ自由に休んでください」

「ありがとうございます」

私は自分の荷物を持って部屋を出ていく

山田先生は泣く泣くパソコンの前に座つていた

「人間界はこいつて弄りがいがあるところがあるから好きなのよね

」

ルンルン気分で廊下を歩く海奈であった

海奈はひですか（後書き）

「」で海奈の力の欠片を説明

海奈は水を司る神で担当が司のいた世界だったところがいつの間にか

楽しみ（前書き）

束しかでない話

前置きみたいな感じなので短いです

楽しみ

「やつぱついないな～」

とある地下室にて

部屋全体パイプやパソコンによって埋め尽くされている

そんな中、うわミミを着けた女性——篠ノ乃束は笑みを浮かべながら世界中の人物名簿を見ていた

『新城海奈、新城司』

その名前の人物が一切ないのだ
経歴はあるが出世歴がどこにもないのだ

ましてや『自分が作つたはずがないコア』を使つてているのだ

『おかしい、わからない』

この2つが今の束の脳内を占めている感情だった

普通の人間だつたら慌てるが全てわかってしまうこの天才には楽しさを生むスペースになっていた

『何よりお姉ちゃんとしてこの人に興味あるね』

自分の妹が幼なじみの弟ではなく他の未知の男を好きになつた

妹の性格をわかっている以上、悪い人間ではないと判断しているが
『存在するはずがない』人間というのが束が認められない理由だった
「楽しみだな」

新たな楽しみが増えたのは束には堪らなく嬉しかった

彼女の特権（前書き）

今日は微糖

そしてつむぎが燃えます

彼女の特権

・・・・・

「———きひ」

(・・・・ん?)

「わらそろ起きる、もつすぐ着くぞ」

(ああ、臨海学校か)

隣の席の笄の声で目が覚める
バスの窓から外を見ればキラキラと太陽の光によつて輝く海と砂浜
が見えた

ちなみに本当は隣が他の女子だったのだが、その女子と笄の隣だった女子に一夏寝顔写真で買収

無理矢理、笄の隣にしてもらつたのだ

訓練の時に公言して以来、笄が嫌われるなどと言つた虚めもないようで、むしろツンツンしていた笄が丸くなり、仲良くなることが多くなったようだ

「なんだ? 私の顔見て……寝惚けているのか?」

「いや、ちよつと寝起きの栄養補給しようつて思つてな

「わあっ！？」

そう言つなり箒を胸に抱き寄せる
彼女特有の甘く、心地よい匂いに司は心が落ち着き、程よい目覚ま
しになる

「ちょ・・・離せ、司！」

「落ち着けよ、箒」

「あ・・・わふ・・・」

恥ずかしいのか、

じたばた暴れるが額にキスをすれば大人しくなり顔を埋める

そして落ち着いたところで箒成分をおもいつきり堪能する

やつぱり箒は可愛いな

自分の胸に顔を埋めている箒の頭を撫でてやる

気持ちいいのか目を閉じながら、小さく息を吐いていた
頬は少しばかり赤くなっている

そんな箒を見ていた女子達は・・・

「わあ～、いいな～」

「新城君つて、結構大胆だよね～」

「篠ちゃん、顔真っ赤で可愛い～」

「彼女の特権、羨ましい～」

周りから黄色い声が上がる

そろそろ離してやるか・・・さてと静めるか

「頑張つて男を見つけるんだな

俺は篠専用だから期待はするなよ

それと騒ぐと前から制裁鉄拳が飛んでくるぞ」

そう言って一番前の席を見れば我がクラスの先生である千冬が二ちらを睨んでいる

女子達はそつと静まり返った

「二郎がお前達の部屋だ」

案内されたのは二人部屋の小部屋

俺達が荷物を置くなり、千冬姉は入浴時間の説明と問題を起こすな
という注意をしてから部屋を出て行つた

「司、早く着替えに行こつぜ」俺はせつせと水着など準備をする

「まあ、慌てるなよ
シャルは逃げないぜ?
顔、緩ませやがって」

「うわ、顔に出てたか・・・

けど、シャルの水着姿早く見たいんだよな・・・

絶対シャルの笑顔にあの水着、砂浜は似合つて・・・

「わかった、わかった
さあ、行こうぜ」

「ねりー。」

俺は楽しみにしながら更衣室に向かつた

「なあ一夏、「△△は?」

「・・・無視しよう」

吹き抜けの廊下から見える庭に生えている「ツバキ」
横には『抜いてね』と看板が立っている

誰かわかつてゐる一夏だがシャルの水着姿を見たいがために無視し
ようと決め込んだ

もちろん原作を知つてゐる司もわかつてゐる

二人とも厄介」とに関わつて千冬の鉄拳制裁を食らいたくないのだ
るう

「一夏、迅速かつ穩便にこれを抑える方法思い付いた
織斑先生にコール、俺が説明する」

「なるほど、頼む」

一夏は素早く携帯を操作し、司に渡す

そしてしばらくして・・・

『どうした、一夏?』

「すみません、新城です」

『なんだ、新城か・・・

何かあつたのか?』

「(うわ・・・声低くなつたよ

絶対不機嫌になつたな)

うさミミ生えた庭を見つけたんですが・・・

『・・・場所を言え

それと食堂から簡易ガスコンロのガスを借りてそこで待つていろ』

「更衣室付近の吹き抜けの廊下です」

それを説明するなりブチリと切られる

「千冬姉、なんだって？」

「なんか食堂からガス借りて来いってさ」

「・・・ああ、千冬姉
かなり不機嫌だぞ
ちょっとガス借りてくる」

一夏は急いで食堂に向かつて行つた

(そんなに不機嫌なのか?)

姉弟だからわかるのだろうか? そう疑問に思つていていたが、どれほど不機嫌かはすぐにわかつた

一夏が戻つて来てからすぐに千冬がやつて來た

なぜか不気味な笑い声が聞こえる

「さすが我が弟

何をするかわかつてゐるじゃないか」

ガススプレーの吹き出し口に千冬が持つて来たライターをテープで

固定

即席の火炎放射器だ

「同、さつと行こう

巻き添え喰らひ

「あ、ああ・・・

壊れかけている千冬の笑い声と聞高い悲鳴は悪夢に出でちゃうだつた・・・

臨海学校1日目（前書き）

セッサー離脱です
オルコツ党の方、すみません

「あ、織斑君だ！」

「鍛える筋肉、逞しいな～！」

「もしかして隣にいるの新城君！？」

「ちょっと怖いかも・・・」

などと俺たちの姿の感想を言われている

もちろん、聞こえているわけで俺はともかく司の怯えの女子が何人
かいるわけで・・・

見れば司はちょっと落ち込んでいる

「なあ、そんなに怖いか？」

「サングラス取れば大丈夫だ

正直、サングラスあるかないかでだいぶ変わるぞ」

「仕方ないか・・・」

不満そうにサングラスを外し、オールバックの素顔が出された

やつぱりサングラス外せばカッコイイと思つ

女子の反応を見れば・・・

「わっ・・・サングラス外せばカッコイイ」

「ちょっと大人っぽいよね～、身長もあるし」

「あのシャツから見える胸筋が色っぽいかも」

180度変わって好評価

司も満更でもないようだ
ちょっと笑ってる

さてとそれさらかなと思つた時、ちょうど目的の人物が出てきた

「やっぱっ」ついで着たほうが一層似合つてんな、シャル」

「ありがと、一夏」

夏の太陽によつて輝くよつに見える白い肌
シャルの金髪に似合つ黄色の水着
そして美しい四肢は綺麗な線を描いていた

自分の彼女がここまで綺麗に見える

恋は眞田

そう聞いたことがあるが、たつた今、その意味がよく理解できた

「シャル、一緒に泳いづせー！」

「うんー行ー」、「一夏ー」

俺はシャルの手を引いて、海に向かつた

「つたぐ、あの2人は元気だな～」

「お前は泳がないのか?」

元気よく駆け出したカップル2人を見ながら司は簾の手を引きながら学園側が用意したテントにビニールシートが引かれた休憩所に向かつっていた

「俺はのんびりしてるほうが好きなんだよ

それに簾と一緒にいたいしな」

「そ・・そうか・・」

嬉しかったのか、簾の表情に笑みが浮かんでいる

なんだかんだで甘い空氣を生んでいる2人であつた

「あつれ、何してんだ?」

「その声、新城か!?」

シートに来てみればタオルミイラ・・・もといラウラがなぜか正座

して座っていた

「タオル取つたらどうだ？」

「うう・・・それは・・・」

簞の一 声にラウラは言葉を濁しながら言い淀む
なぜラウラがこんな格好をしているか理由を知つてゐる司は笑みを
浮かべながら促してやる

「うう、お前の水着姿は似合つてゐるぜ
だから自信持てよ

簞もラウラの水着姿見たいだろ？」「

司の促しを理解した簞も笑顔で促す

「ううだな・・・

可愛らしくラウラなりの水着も似合つだろ？

あつと、千冬さんもやつ思つだろ？」「

「教官が・・・なら・・・」

「う、可愛いじゃん

「ああ、似合つてるぞ」

千冬といつぱ前に反応したのか、ラウラは一枚ずつをと外して行く

原作と同じ黒のレースの水着だ

違いと言えば、アップテールではなくサイドテールになっているが
綺麗な銀髪は太陽の反射で輝き、可愛らしさを醸し出している

「やうか・・・可愛いか・・・」

ラウラは頬を紅く染め、嬉しそうに笑みを浮かべる

自ら嫌つてゐる同の前、しかもその本人に言つてゐることに気づかないほどだ

「えへへ・・・」

「おーい、ラウラ」

「わつと嬉しそうにぱいなんだわつ
そつとしといてやれ」

まるで自分のことのように言つ口げる
たぶん、自分も体験したから言えるのだわつ

するとこちらに一人歩み寄つて來ていた

威風堂々

そんな言葉が似合いそうな人物——千冬だ

「ほひ、餓鬼どもは休んでないで泳いで来い」

普段纏めあげてる髪をストレートに降ろし、ビキニのよつた黒い水着は長身ナイスバディの千冬にかなり似合つており、言つならばエロい・・・

(黙つてれば一流女優並みに美人なんだけどな)

(千冬さん、その性格さえなければきっとモテてるんだろうな・・・)

2人してなんと失礼なことを・・・だが事実

それを口に出していくにも関わらず・・・

「お前ら、失礼なこと考えてただろひ」

「「いえ、そんなこと思つてません!」」

さすがバカツプル

息ピッタリで高速の如く返事を返す

こんなところまで来て、アイアンクローは受けたくないのだろひ

「それじゃあ、僕たちは遊んで来ますのでじゅつくり

あ、ラウラをお願いします

行ひつか、第」

「ああ、少しほど水浴びでもしよう」

そつとその場を後にすむ

余談だが、トリップから戻ったラウラは自分の隣にいた千冬の姿に鼻血吹いて気絶したといつ・・・

時は経ち、夜

楽しい食事を終え、簞やシャルなどいつもの女子5人は千冬の部屋にいた

ちなみに一夏はマッサージを終え、風呂に
司は用事があるらしく、海奈の部屋に行っていた

「まあ、そう硬くなるな
これでも飲んで落ち着け

今は教師、生徒としてではなく普通に女同士として話せ」

「は、はあ・・・」

5人は勧められるままジュースを飲む

それを見た千冬はニヤリと笑い、冷蔵庫からビール缶を出しては勢いよく飲む

「じゃあ聞くがオルコット、鳳は一夏のことはまだ好きか?」

单刀直入の問い

それに最初に答えたのは鈴だ

「私は・・私はまだ好きです!」

シャルロットに取られたのは悔しいですがあと2年半諦めません!」

「僕は絶対に渡さないよ!」

鈴が龍ならシャルは虎だろう

2人の瞳にはメラメラと炎が灯つてゐ

そしてセシリ亞は「・・・

「私は・・・鈴さんを応援しますわ」

「 「え・・・」

まさかの戦線離脱

シャルと鈴は啞然とした表情でセシリアを見る

「正直シャルロットさんが再転入した時の一夏さんとの雰囲気を見ればどういう関係がわかりますわ

その時に心のどこかで諦めたんだと思いますの

けど鈴さんがそれでもなお、諦めないつて言った時、決めましたわ

私は彼女を応援しますわ！」

笑顔を鈴に向け、強く頷くセシリア
そんな彼女を鈴は笑顔で答えてやる

それは同じ人を恋した絆だろう・・・

だが、そんな2人を前にラウラが立つ

「ならば私は戦友と友の恋の邪魔をする者から2人を守るつ

これで2対2で対等だろ？」

「ラウラ・・・ありがと？」

シャルは心強い味方に安心する・・・

まさに頂上決戦だ

「ハハハ、青春してるな
餓鬼ども、ほどほどにしどけよ」

「アハハ、そうですね」

端から見てる千冬と篠は4人の姿に笑っていた

しかし・・・

『ガシリ』

「え、っ・・・?」

隣にいる千冬にガッチリと肩に腕を回され、ホールドされた篠

振り向きたくないが振り向いてしまった

そこには悪戯っぽい笑みを浮かべた千冬が・・・

「こいつらは好きな男の話をしたんだ
お前だけ新城のことを話さないのは不公平だろう

全部吐いてもらひや

そうだが、お前たち

「　「　「　はー、織斑先生ー」「　」「　」

(「・・裏切り者おおおー・)

話終えるまで終始、篝は茹で蛸のよつこ赤面していたそつだ

『 ロンロン』

「 ビーベー」

「俺だ、女神」

「来ると思つてたよ、同ちゃん」

真剣な面持ちの司を海奈は笑顔で迎え入れた

海奈はベランダ付近の椅子に腰かけており、向かいの椅子を指差す

司はそのまま向かいの椅子に座るとそつと首に掛けてあるＩＳ——リクルアを外し、テープルの上に置く

「明日、専用機持ちの訓練があるが必ず篠ノ乃束が来て、リクルアについて聞かれると思うが・・・聞かれても大丈夫なのか？」

自分はイレギュラーの存在

そしてこのＩＳもイレギュラーだ

不安はあるのだろう

だが、そんな司の言葉を聞いている海奈は未だに笑顔だった

「大丈夫だよ、そのコアは『468』個田として篠ノ乃束が開発した設定にあるから

もしデータを見せてと言われたら見せてもいいよ

データを君以外勝手に弄れないようにしてるし、コアへの強制アクセスもできない

私自身が創ったＩＳだからね

けど、まあ聞かれるだろうね

彼女の記憶だけは一切弄つてないしね　」

「えつ・・・弄つてないのか？」

「私が弄つたのは篠ノ乃束以外の人間全て

君が2番目のＩＳ男性操縦者として認識させ、君は織斑一夏ほどじ

やないにしても日本のE.S政府の研究対象だよ？

まあ、君のE.S開発責任者は私の設定で無理矢理、私にしたけど

そこまで聞いて司は啞然とした

そして一つの疑問が・・・

「そこまで世界を弄つてもお前に影響はないのか？」

そんな心配紛れの疑問

だが海奈は安心させるかのように一コツと笑いながら答える

「大丈夫だよ

この世界の担当の神とは旧い付き合いだし、世界の崩壊もしくは世界の欠落になるほどの影響がない限りお咎めはないよ

それに彼も暇潰しにはいい話題らしいしね」

「そうか・・・」

司はふうと息を吐き、胸を撫で下ろす

なんだかんだ言って、海奈を心配してるようだ

「ならもう用はないよ

せっかくの人間界の温泉、楽しめよ」

席を立つ司

すると海奈が何か思い出したかのように顎に人差し指をあてる

「ううそう・・・

篠ちゃんの挨拶は頑張りなよ?
篠ノ乃束は気に入らない人間には話すらしてくれないみたいだから
頑張つて挫けずファイト！」

「うひせやい！」

顔を真っ赤にして出ていく間に海奈はクスクスと笑う

「あーもづ・・・人々の人間界、いや人間としての存在は楽しいな
罪がこんなに楽しいとは思わなかつたよ」

彼女は空に浮かぶ月を見ながらそう呟いた

紅椿登場（前書き）

・・・ 篠、束、千冬、一夏、司以外空氣・・・

出てきたのは最初と最後だけだった

紅椿登場

臨海学校2日目・・・

学年の生徒が海岸に集まる
そしてその整列している生徒の前では千冬を筆頭に教師職員が並んでいた

「では各自、追加パッケージなどの整備科の生徒とともに試運転など行うよ！」解散！』

千冬の合図を期に生徒達は打鉄やラフアールなどを展開し、各自活動していく

そんな中、専用機持ちだけ篠とともに海岸沿いの一角に集まっていた
「専用機持ちだけ集まつてのになんで篠がいるんですか？」

その鈴の質問にセシリアやラウラ、シャルル、一夏は同じ疑問を感じていた

「それは今日、こいつの・・・」

千冬がそう言いかけた瞬間、遠くから砂煙を巻き上げながらものすごい速さでこちらに突進する女性がいた

「ち～～～ひや～～あいつ！」

「その如前で呼ぶなど何度言つたらわかる」

千冬は必殺技のアイアンクローラーでギリギリと彼女――篠ノ乃束を締め上げる

だがその尋常じやない迎撃を尋常じやなしに身のこなしで抜け出す

そして束はそのまま篠の前に着地した

「やあ、元気そうだね」

「どうせ」

笑顔の束に篠は素つ氣ない返事をする

束は篠の身体をじっくり見ながら鼻を鳴らした

「フフン、剣道でも有名な篠ちゃん

私は鼻が高いよ

背もおつきくなつたし、何年ぶりだろうね
特におっぱにもこんなに成長し、「フフッ！」

「蹴りますよ？」

「蹴つてから言つてるよ・・・
しかも、まさかの蹴り・・・」

普段反撃を行う際、竹刀を使うのだが今回は膝蹴り

おっぱいを探んでいた束は膝蹴りを顎にモロに食らつた

そんな束は周りからすれば乱入人であり、皆が手を止めている

「束、自己紹介をしたらどうだ?
うちの生徒が困っているんだが」

「おおう、そうだね
私が天才開発者、篠ノ乃束だよ
よろびく～」

クルリと一回転

最後に某美少女戦隊のよつにワインク&右目の横にチョキピースを
決める

だがそんな自己紹介に再び騒然

ノリについていけなかつたようだ

「はあ～～、コイツに常識を求めた自分がバカだった・・・

各生徒及び職員は「コイツを無視してください
大事なことですのでもう一度言います
無視してください」

珍しく千冬の念を押す指示に皆、各自の作業に戻る

そして篠は姉に期待を込めた言葉を促す

「姉さん、あれは・・・」

「もつちゅ～ん、用意してあるよ
篠ちゃん、専用IJS特と御覧あれ～！～」

束が自分の横を手で示す

しかし、そこには何もない

そこで束がパチンッと指を鳴らした瞬間

「「「えつー？」」「」

その場にいた全員が目を疑った
いきなり何もない空間に突如、ひし形の塊が浮いていたのだから
「フフフ、私特性のステルス機能には驚いたね～
さて、驚くのはまだまだあるよ

これが篠ちゃん専用機、『紅椿』！

全スペックが現行IJSを上回る束ちゃんお手製IJSだよ～」

全体が真紅のボディアーマー

その真新しい装甲は太陽の光の反射により、光輝いでいる

「さあ～篠ちゃん、今から私と一緒にパパッとフィットティングとパ
ーンナライズを終わらせてみようか～」

そつまつて空中投影ディスプレイに映るデータを見ながら同じく空
中投影されているキーボードを打つて、速さはもはや神業だ

そして5分ほどファイツティングを終わらせてしまった

「あとは自動処理に任せとけば終わりだよ
それでその間にいつくんのエリ見せて
束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ、はい」

一夏は戸惑いながらも白式を呼び出す

そして束はビームからか出したコードを取り出すなり、白式の装甲に
ブスリと差し込む

すると先ほどのように空中投影ディスプレイが浮かび上がった

「データを見せてね~

ん~、不思議なフラグメントマップを構成してるね~

などと面白げにデータを見ていく束

そして一通りデータを見るなりディスプレイを消し、次は司に向き

く

「あとと・・・君が篠ちゃんの彼氏だね?」

ふと束の雰囲気が冷たくなった

だがそれに気づいたのは千冬、一夏、篠の昔から束を知っている3
人だけだ

3人の表情が強まる

「妹さんはとても助かっています・・・
自分を支えてくれる大切な人です
こうして天才開発者の篠ノ乃博士として
そして篠のお姉さん、篠ノ乃束さんとして挨拶できて良かったです」

司は緊張しながらも精一杯言葉を絞り出す

原作と実際会うのは実感が全く違い、雰囲気も全く違っていたのだ
「いつくんじゃないのはちょっと不服だけど・・・
まあ、日本人だし第一印象は合格かな

君もEIS専用機持ってるんでしょう?
データ見てあげるよ」

「お願ひします」

できるだけ反抗的な態度はしないように

今、ここで束の機嫌を損ねるのは大変マズイ

司はそう心に感じながら相棒のリクルアを開拓する

そして一夏と同じようにデータを見ていく束

「へえ、これは面白いEISだね

白式と似てるけど全く逆のタイプか

スペックは化け物並みだね・・・
紅椿といい勝負だよ~

このEISは誰が作ったんだい?」

やはり予想通りの質問に向は焦らすに答える

「新城先生・・・自分の母が開発責任者です」

「そつか

・・・・・・・

はい、ありがとう

交際の件だけじ、今は良しとしあげるよ

篠ちゃんが選んだんなら仕方ないもん

けどね~、篠ちゃん泣かしたら許さないよ

『ゾッ...』

その場にいた千冬を除く、近くにいた全員がビロビロと肌が震えた
とてもなく冷たく鋭い殺氣

司はなんとか耐えながら頷いた

「わ、わかりました・・・」

「ならばよ～し
さて篠ちゃん試運転してみよっか～
武器は画面に表情されるからこうこう試してみなよ」

「わかりました」

篠は意識を集中させた・・・

飛ぶイメージ

スラスター吹かし、瞬時に上昇

そう思つた瞬間、紅椿は自分の想いに答え、上空200メートルの位置に滞空していた

（す、凄い・・・）

打鉄の数十倍の反応の速さだ
まるで自分の身体の一部のようだ・・・

「武装は・・・」

両腰に携えられた刀を抜き、画面を見る

「突きによる『極円』
斬りによる『空裂』」

画面データを見るだけで使い方が感覚でわかつた

まずは『極円』

右肩を引き、一点集中をイメージする
且指すは田の前に滞留している雲

「はあっ……」

気合い一喝と共に素早い突きを放つ

同時に両刃と共に筆の周囲に紅い塊が展開し、そこから順番にレーザーが放たれ、雲を蜂の巣に変えた

次に『空裂』

「筆ちゃん、今からミサイル打つから空裂で迎撃してみなよ

「わかりました」

いつもと変わらぬ姿になぜかプライベートチャンネルから通信していく姉に筆はそもそも同然のように返事をする

束は言つなり、自分の横に16連装ミサイルポッドを開け、全弾を筆に向かつて打つ

「第！」

一夏が心配そうに叫んだ
だが、司は

「大丈夫だ、第なら——」

ISのマイクは細かな音までも拾う

もちろん第はそれが聞こえており、それに答えるかのように右脇下
に空裂を構えた

「やれる、この紅椿ならつ……」

そして回転するかのように横一閃

その斬撃は紅く帯状のレーザーになり、ミサイル全弾を撃ち落とした

「すげえ……」

「これが……」

「第四世代……」

「全距離対応型の力なのですね」

「言葉が出てこないよ」

全員が唖然とし、その表情に束は満足そうな笑顔だ

だが、そんな束を距離をおいて千冬は見ていた
まるで敵を見るかのような視線で・・・

「お、おつ織斑先生へ、大変です！」

するとその時ウシ乳を揺らしながら慌てて真耶が駆けてくる

それはエス学園、専用機持ち達の最初の難壁だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5339x/>

IS インフィニット・ストラトス ISは狙撃専門ですが？

2011年11月20日00時24分発行